

自序

尋常中學の科程は已に一變せられ本邦領土の幅員已に廣大を

來たし加ふるに地理編纂の體裁亦舊套に安す可らざるものあ

り此種の原因は舊山房をして余が先に公にせる「新撰日本地

理と趣向を新にも事實を簡にせる本書を出版するの已むを得

ざるに至らしめたり

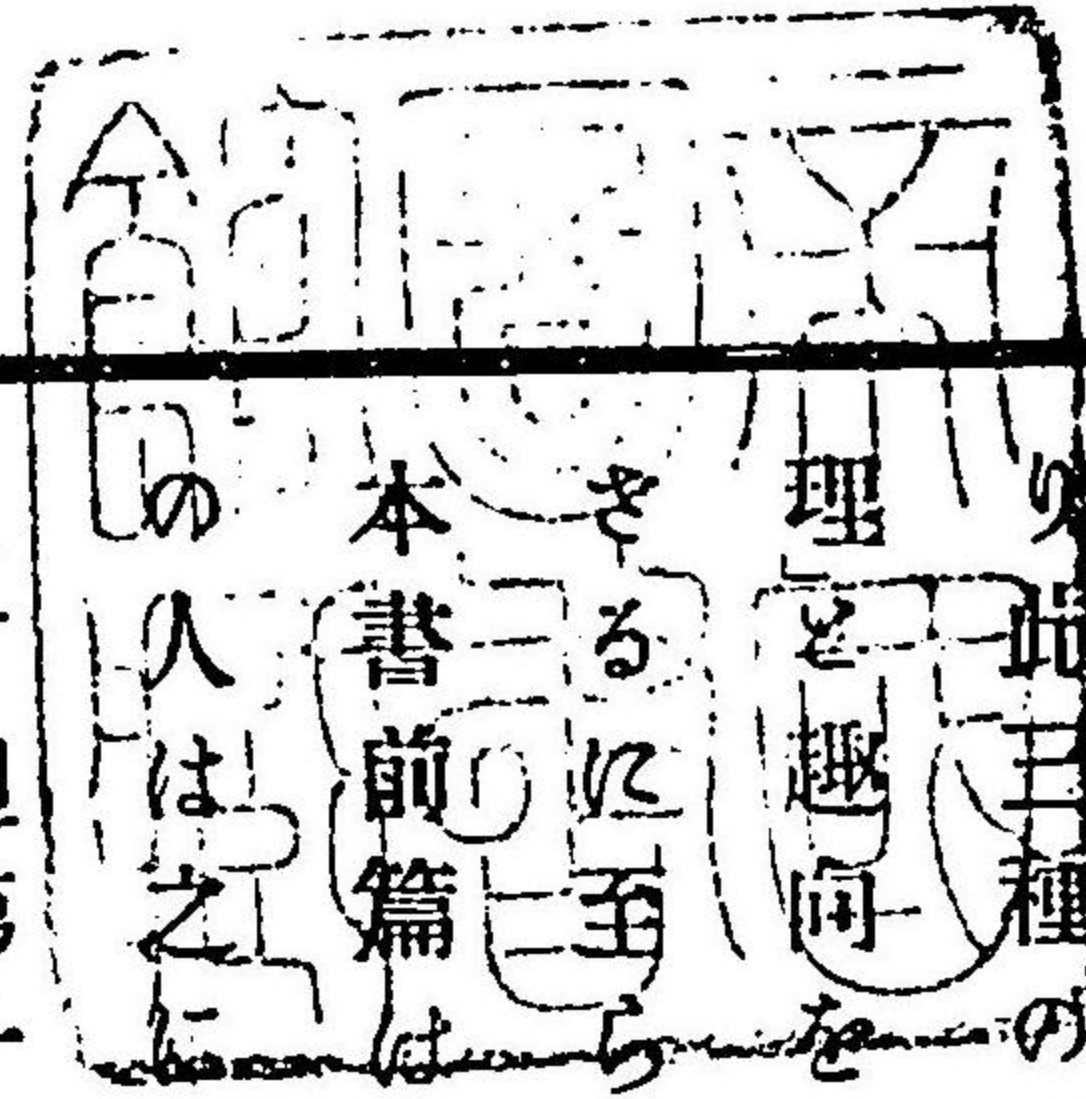
本書前篇は地理特説として旅行實踐の仕組に叙述したり當局

の人は之に倣て學校所在地より始めて之を學生に授くるを可

とす但第十五對外諸島の一項は必ず他旅行記を終りたる後に

於てすべし

後篇は從來の地理總説に必要な修正を加へて遺漏なからし



めたり

本書に挿入せる地圖は從來教科書の杜撰なる如きに非ず是れ其材料の撰擇上特に意を加へたるを以てなり其描圖上の結果は一に佐々木信堅氏の技倆によれり

本書編纂上前田秀實氏の補助を得たるは余の特に明言する所なり

本書に引用したる統計は日本帝國第十五統計年鑑及び日本地誌提要より據りたるものを多しとす但し市の人口は明治廿九年八月一日の官報よりて廿八年末日の現在數を掲ぐ

二十九年三月

著者識

新撰普通地理目次(日本之部)

前篇……地理特説

- 第一 東京より大阪に至る……………一丁
- 第二 大阪より馬關に至る……………一八丁
- 第三 九州を一周す……………二七丁
- 第四 馬關より松江を経て京都に至る……………三五丁
- 第五 京都より木曾甲府を経て東京に至る……………三九丁
- 第六 東京より青森に至る……………四三丁
- 第七 青森より兩羽、越後を経て東京に入る……………四九丁
- 第八 東京より關東及北國を経て大阪に至る……………五七丁
- 第九 大阪より淡路を経て四國を廻る……………六二丁

第十 大阪より紀伊半島を廻りて東京に至る六七丁

第十一 東京灣を出て、北海道に向ふ……………七二丁

第十二 北海道本島を一周す……………七六丁

第十三 日本海海岸及九州の海岸……………八一丁

第十四 馬關より四國の沿海を廻りて東京灣
に入る……………八六丁

第十五 對外諸島……………八九丁

後篇……地理總説

地文地理……………一〇一丁

位置……………全丁

幅員……………一〇二丁

自然區劃……………一〇四丁

地勢……………一〇五丁

樺太山系地方……………一〇六丁

支那山系地方……………一〇八丁

臺灣諸島……………一〇九丁

地震……………一一一丁

礦泉……………一二二丁

礦物……………一三三丁

水域……………一四四丁

北日本の水理……………一五五丁

南日本の水理……………一六六丁

臺灣の水理……………一八七丁

湖沼……………一三六丁

海岸線	一一九丁
港灣	一二〇丁
海流	一二一丁
潮汐	一二三丁
氣溫	一二四丁
風	一二六丁
雨雪	一二七丁
植物	一二八丁
動物	一三〇丁
人文地理	一三三丁
歷史	全丁
政治區劃	一三六丁

外交	一三九丁
族制及人口	一四一丁
市邑	一四二丁
政治	一四三丁
軍備	一四五丁
教育	一五〇丁
社寺	一五一丁
土地	一五三丁
農業	一五四丁
林業	一五六丁
牧畜業	全丁
漁業	一五七丁

製鹽業	一五七丁
鑛業	一五八丁
工業	一五九丁
交通	一六〇丁
鐵道	一六一丁
航路	一六二丁
郵便	一六三丁
電信	全丁
電話	一六四丁
内國商業	一六五丁
外國商業	一六六丁
附錄 地名索引	(目次終)

新撰普通地理(日本之部)

理學士 山上萬次郎 著

前篇.....地理特説

第一 東京より大阪に至る

東京は關東八州の中央武藏國にありて、隅田川其東部を貫流す。南は東京灣に臨んで直に外洋に通じ、東北西の三面は平野遠く連り地勢最平坦なり。市の東西長凡二里半、南北凡三里半にして、人口大畧百三十四万あり。宮城は其中央に位し、地區最高潔にして、繞らすに溝渠を以てす。鬱蒼たる古松之を擁護し、翠色滴らんと欲す。中央政府の諸官省、立法司法の府、皆多くは宮城の外圍にあり。東京府廳亦其間にありて、市内及武藏の八郡、豆南諸島伊

豆七島、小笠原島等を管治す。驛路は所謂四宿の地を経て四方に通ず。千住よりするものを奥羽街道といひ、下板橋よりするものを中仙道といひ、東海道は品川より、甲州街道は内藤新宿よりす。然れども現今交通運輸は専ら鐵道に依る。即中仙道鐵道及東北鐵道は上野を發して北陸及奥羽に通じ、甲武鐵道は麴町區飯田町を發して八王子、川越等に達し、總武鐵道は本所を發して佐倉に至り、東海道鐵道は新橋より東海道を走る。故に四方の物貨、殊に關八州中仙道及奥羽地方の物産は、一旦悉此地に輻湊し、商賣交通極めて盛なり。本市の物産は織物、燐寸を始とし、錦繪、鼈甲細工、蒔繪細工並に其の他の美術品なり。此市は古の武藏野にありて太田道灌始めて城を築きて之に據る。其後徳川氏覇府を此地に開き、名を江戸と改めてより、日に益繁昌を加へ、明治二年聖駕

蹕を此に駐め給ひし以來、更に舊觀を改め、大帝國の首都たるに愧ぢざるに至れり。全市を麴町、神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤阪、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、淺草、本所、深川の十五區に分ち、更に地勢に従て之を山ノ手、下町に大別す。山ノ手には貴族富豪の邸宅多く、下町は商業の最盛なる所とす。公園は上野、淺草、芝を主とし、麴町九段の靖國神社及び深川の八幡社の境内、吾妻橋上流の隅田堤等あり、其他龜井戸の梅、飛鳥山、小金井の櫻、瀧ノ川の紅葉、團子坂の菊も亦、都人の愛賞する所たり。

程を新橋に發し、汽車に乗りて横濱に行かむには、途に多摩川の下流六郷川を渡る。此川は鮎を産するに名あり、其上流二里餘に矢口ノ渡あり、延文三年新田義興の死せし所なり、又西して生麥村を過ぐ、文久三年英人斬殺の件を以て聞ゆ。進みて神奈川に入り、遂に横濱に達す。行程八里凡四十分を要す。

横濱市 は東京灣に臨み、本邦第一の開港場なり。本牧岬其東南

を擁し、東北横濱灣を控へ、神奈川港に接し、背後圍むに丘陵を以てす。港内深さ八仞乃至十仞にして、桑港及バンクーパーより上海若くは香港に至るの要衝に當り、貿易最盛なり。輸出物産は生糸、茶、絹布、熨斗糸、生銅等にして、總價約八千五百万圓、輸入品は綿糸、砂糖、石油、唐縮緬、吳呂等にして、總價約五千六百万圓とす。明治廿八年調、人口凡十七万、相模一圓及武藏の三郡並に本市を管治する神奈川縣廳あり。

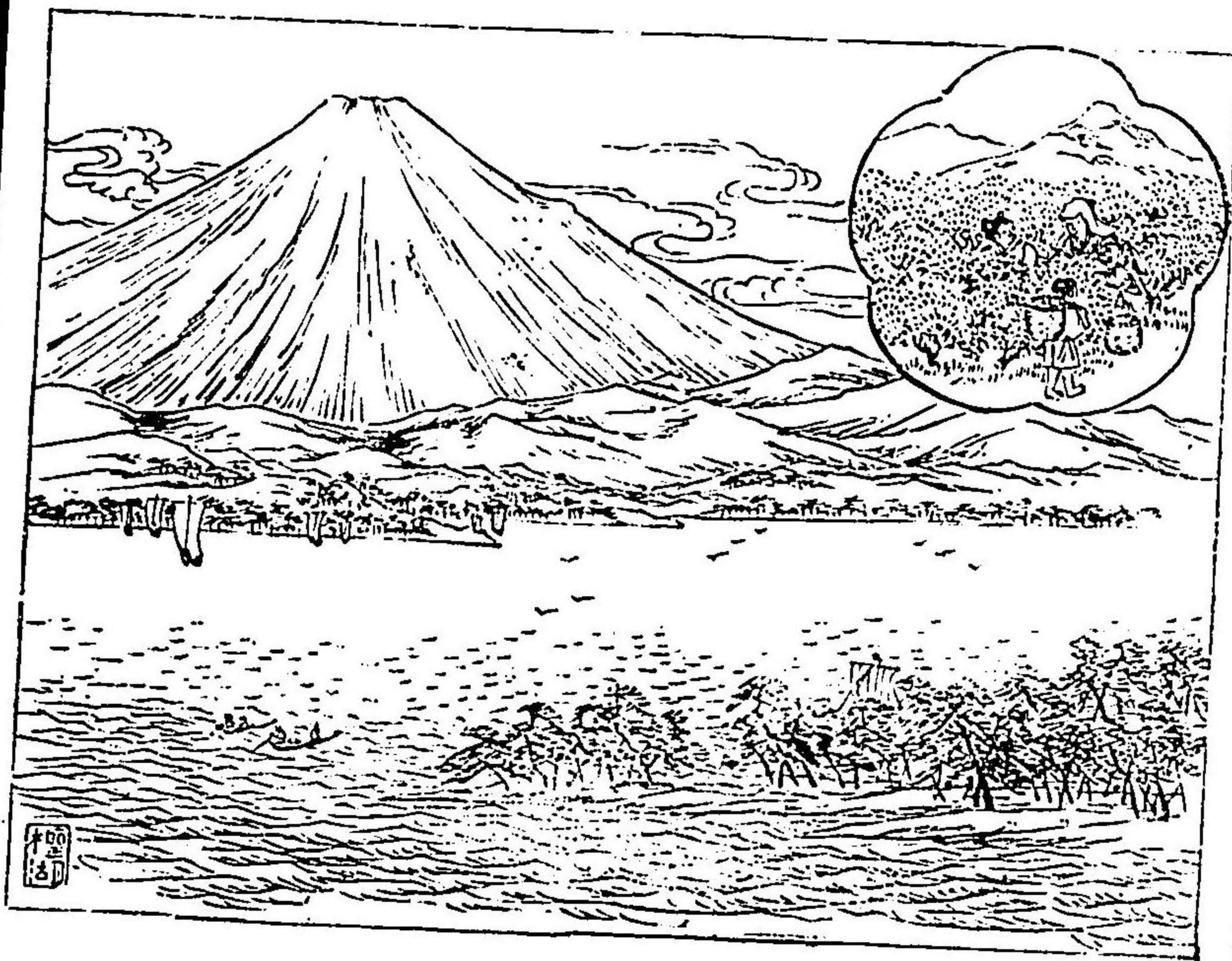
是より西に進むこと汽車半時間程の地を、相模國大船となす。東海道鐵道は、是より一支線を三浦半島に派し、鎌倉を経て横須賀に至る。鎌倉は源頼朝の覇府を開きし所にして、舊蹟尙多く、江ノ島とともに遊覽の地たり。而して本線は尙西方海岸に沿うて走り、馬入川舟行十七里の下流を渡りて大磯に至る。大磯は人口七千許、海水浴場を以て知らる。此邊一帶の長汀、東西に連り、南、相模灘を擁し、北、大山を望み、風光愛すべし。大磯の西三里を國府津となす。大船より凡四十分程なり。東海

道は是より小田原湯本を経て、所謂箱根八里の峻阪に通ず。小田原は國中第一の都會にして、人口凡一萬五千、其昔、後北條氏の割據せし所にして、早雲寺今尙存す。箱根山は又休火山なり、温泉に富み、箱根七湯を以て名高し。其絶頂には蘆湖あり、周圍三里餘、湖水極めて清冽、又富士を望むべく、風光甚佳なり。其南岸元箱根には古の關所の趾あり。東海道は之より伊豆の三嶋に出で、狩野川に沿ひて沼津に通ずべし。箱根湯本は又國府津との間に鐵道馬車の便あり、或は伊豆の熱海に至るを得べし。

熱海は伊豆にあり、間歇泉を以て其名高し。蓋國中平坦の地極めて少く、温泉の湧出する所甚多し。熱海、修善寺、韭山、伊豆山の如きは、其有名なるものたり。國の中央に登ゆる天城山(四六六四尺)は、半島第一の高山にして、有名なる官林あり、良材薪炭を出だす。沿岸は漁利あり。

再程を國府津に發し、汽車に乗りて酒匂川の谷に沿ひ、足柄山の北麓を廻る。其陸道は甚奇觀なり。足柄山は又新羅三郎の故事を以て聞ゆ。其西は即駿河にして、鐵路其の御殿場村に入る。是より更に黄瀬河谷に沿ひ、富士、愛鷹の東南麓を過ぎて

第一圖



三保崎より富士を望む

沼津に達す、國府津より茲に至る二時間餘程なり、是より鐵車復海岸に沿うて走る。
富士山は甲斐の境上に在る本邦第一の名山にして海表に直立すること一萬二千四百六十七尺、其整正なる圓錐形の山姿は、遠く望むに恰も白扇を倒に懸けたるが如く、又八朶の芙蓉を天邊に挾むが如し、頂上には舊噴火口ありて、俗に内院と呼び、周圍半里許

あり、其周邊は斷崖削立して奇怪名狀し難し。巖間には盛夏と雖も、千古の積雪を埋め、清泉の湧出するものあるを見る。而して此山は、寶永以來未破裂せざる休火山なりと雖も、其噴煙せしは古歌にも見ゆ。裾野には川口、山中、精進、本栖、西、四尾連、浮島沼等の沼湖ありて存す。此七湖は箱根の蘆湖と合せ、一に富士八湖の稱あり。此裾野は又他に類なき美景にして、建久の昔源頼朝此所に獵し、曾我兄弟は茲に美談を遺せり。

富士山の西麓に沿ひ、南流する所の富士川(舟行十八里)は、平軍潰走の古跡たると、其急流なるを以て聞ゆ。其河口に近き所は、富士を目睫の間に望むを得て、風光絶佳なり。此所即ち田子浦にして、西の方清見潟、三保の松原に對す。清見潟の南方清水港は駿河灣の良港にして、船舶の出入甚多し。薩陞峠の隧道を過ぎ、興津を經、清見寺を認め、静岡に入る。沼津より茲に至る一時半程、沿岸漁利多し。

静岡市は、元駿府又は府中と稱し、西方に安倍川あり、東方清水港を距ると又甚遠からず。此地は往時徳川家康退隱の地にして、其東方海岸に近き所に久能山あり、其の久能神社は家康を祀る。

漆器、竹器及製糸製紙の業盛なり。又駿河の地たる、甲州に反し氣候温暖なるを以て最茶の栽培に適す。故に毎年其季節に至れば、製茶の賣買甚盛大なり。此地は東京名古屋の中間に位し人口三万八千餘、地方商業の中心たり。静岡縣廳ありて伊豆七島を除く駿河、遠江三國を管治す。

静岡を發して西、焼津を過ぐ、昔東夷日本武尊を欺きて、却て自ら焚死せし所なりといふ。行きて有名なる大井川を渡る。此川は駿遠の境をなすものにして、平時は殆んど砂礫のみなれども、時雨及梅雨の頃には時々氾濫の虞あり。昔日の運壘越は話のみ残りて、今は橋梁を架し軌道を敷けり。此邊地勢殊に平坦にして牧野原其南部を占む。又布引原ともいふ。其勢遠く南に延長して御前崎となる。伊豆の石廊崎と相對して駿河灣を限れる所なり。御前崎に近く相良町あり、近傍石油を産す。其北は即小夜ノ中山の坂路なり。汽車は金谷の隧道を出で、掛川、袋井を過ぎ、見付を北に見て天龍川に至る。天龍川は源を信濃の諏訪湖に發し、遠江の中央を貫

流すること三十里、全長六十里とす。掛塚に至りて遠州灘に注ぐ。水淺くして運漕の便を缺くと雖も、灌漑の利は極めて大なり。殊に下流西岸の地は平野遠く連り、東方に磐田原あり、西方には史上に有名なる三方原ありて、以て濱名灣に接す。已にして天龍川の長鐵橋を越え汽笛一聲濱松に入る。静岡より二時間程。

濱松は東海道の要路に當り、殊に鐵道開通以來、其の東京西京の中間に位するの地たるを以て、益繁盛に赴けり。人口一萬七千餘、地方の物産は茶、藍を以て最とす。是より西三里にして濱名灣口に達す。此所を今切といふ。蓋此灣昔時大湖なりしが、今より四百年前海嘯のために、湖口を決せられ爾來海水侵入して灣と成れり。灣の東西凡二里、南北凡三里にして、水深く小汽船往來し、遙に秋葉、黒法師の諸山を望み、風光頗佳なり。今切には今、鐵橋を架す。西岸の地を鷲津といふ。其西六里餘を三河國豊橋とす。

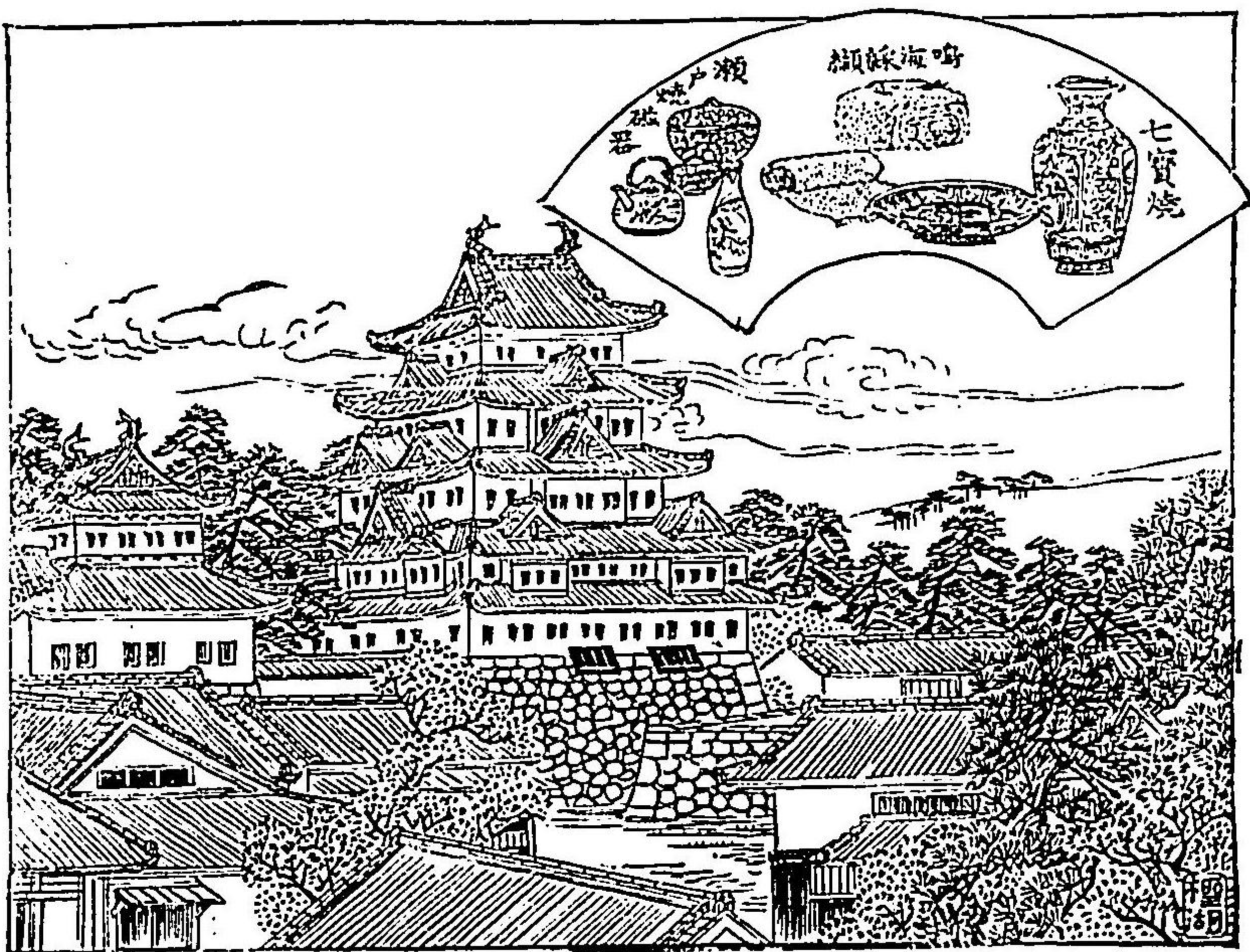
豊橋は舊名を吉田と稱し、豊川の下流に臨めり。人口一萬八千餘。三州第二の都會にして歩兵第十八聯隊の營所を置く。豊川は東部山間の水を集めて三河灣に入る。長さ凡十七里。其上流の地は設樂郡にして、砥石に有名なる名倉村あり。鳳來寺

山又高く聳ゆ、豊橋より汽車一時間程にして三州第一の都會岡崎に至る、人口一萬七千餘、漆器を産す、徳川氏創業の地にして本多氏の舊城趾あり、矢矧川は此近傍を流る、大河にして、北境美濃より來り、國內を貫流すること凡二十八里、衣浦に注ぐ、衣浦は三河灣の別名なり、三河には以上の二川と矢矧川の支流の大平川あるにより、取りて國に名づけしなりといふ、國內の地味棉の栽培に適し、三河木綿夙に名あり、雲母、花崗石も亦名産なり。

岡崎を出で、西五里餘を尾張國大府とす、東海道鐵道は是より一支線を知多郡半島に分ち、半田を経て武豊に至る、而して本線は桶峽間の古戰場を指願の間に觀、絞の産地たる鳴海、有松をも知りて熱田に入る、熱田は人口凡二萬、伊勢内海に瀕し、伊勢に渡るの要津たり、通稱を宮といふ、蓋街の東部に熱田神宮あり、日本武尊外四神並に草薙劍を祭れる神宮なるを以てなり、町の北方は直に名古屋に接す、濱松より三時間程なり。

名古屋市は尾張の中央部、木曾川下流の灌域にあり、人口凡二十一万、昔より小江戸と稱し、本邦第四の都會とす、尾州公の舊

第二 圖



名古屋城

城下にして金鯱を以て名高き名古屋城は市の北部にあり、現今第三師團を置く、此市は控訴院あり、又尾張三河を管する愛知縣廳の所在地たり、七寶織物、名古屋扇、生糸、酒等を名産とす、地方の産物には米、藍、陶器等の著名なるものあり、蓋此國地味肥沃にし

て、且良質の陶土に富む、故に尾張米、瀬戸焼の名産あるも、一は是が爲なり、又市の北なる長湫は、天正の役を以て知られ、西なる津島は、地方の商區とす、

名古屋より汽車に乗り、前ヶ須を経て伊勢に入り、桑名、四日市等に通ずることを得べし、名古屋より再京都に向へば、先づ織田氏の居城ありしを以て名高き清洲及一ノ宮を過ぎ、木曾川を超ゆ、木曾川は遠く信濃より來り、流程四十六里、伊勢海に入る、其流域は雨候、水害を被ると少からずと雖も、此河の滓渣却て沃地をなし、且常に運漕灌溉に便なり、かくて美濃に入り、笠松を経て、岐阜に達す、名古屋より凡四十分程。

岐阜市 は人口三万、長良川に臨み、商賣活潑の市にして、美濃、飛騨を管治する岐阜縣廳の所在地たり、提燈を此市の物産とす、刀劔は市の東北なる關の特産にして、鮎は長良川の名産、夏夜鵜を使用して捕獲する所多し、此國地勢平坦の地少からず、岐阜の東

には各務野、加茂野あり、西北には大野あり、國名蓋茲に取りしものなりといふ、且水利に富み、米の産出夥し、又製紙及陶磁器の製造甚盛なり。

岐阜を出で、西四里餘、長良川、揖斐川を過ぎ、大垣に入る、人口凡二萬、戸田氏の舊城下なり、其西、赤坂は有名なる大理石の産地たり、汽車は大垣より關ヶ原に向ふ、關ヶ原は著名の古戰場にして、且古不破の關のありし所なり、養老の瀧は平野の南なる多度の山中に在り、鐵道は尙西に向ひ、膽吹山の南麓を過ぎ、近江國米原に達す、岐阜より一時間半程なり。

米原より北に分る、所の鐵路は越前國福井に達すべし、縮緬を以て名ある長濱は米原の北、汽車時十三分の處にあり、古戰場なる姉川、賤ヶ岳は其の又北に位す、米原より尙京都に向ひ、彦根を過ぐ、井伊氏の舊城地にして、城樓尙存す、人口二萬一千、麻織物の名産あり、國の東部の大都會たり、是より琵琶湖畔に沿ひ、八幡を過ぎ、野洲川を越えて、草津に至れば、鐵路復分岐す、此處米原より一時間許を要す、右するものは即大津に出つ、左するものは三上山の南より、鈴鹿山の南麓を過ぎ、一

度伊賀に入り終に勢州四日市或は山田に達すべし此鈴鹿山は國の東南隅に位し甚高峻ならずと雖も近江伊勢の通路にして古の關趾あり鈴鹿峠の名ある所なり其西に當る伊賀越は草津より伊賀に通ずる山路にして是亦復讎談を以て聞ねたる所なり。

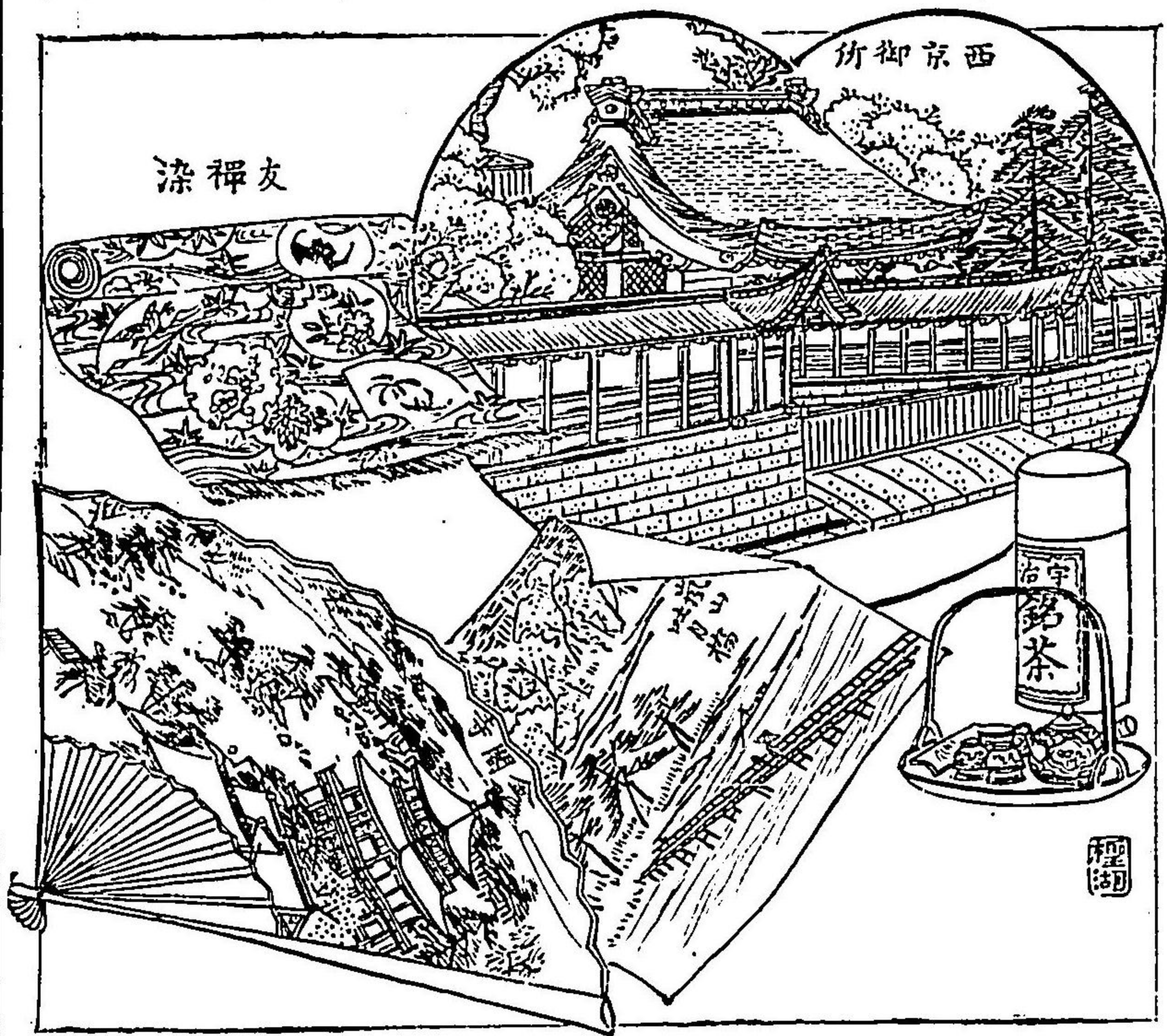
草津より勢田川を越えて大津に出づ其間二十分を要す。

大津町は人口凡三萬三千繁盛の度鐵道開通以前の如くならずと雖も商業尙殷盛にして近江商人の名ある所なり近江一圓を管する滋賀縣廳及第九聯隊の營所あり古の滋賀の都の遺趾今尙傳ふ街頭北に當りて開く所の大湖は即琵琶湖にして周回六十餘里其八景の如きは夙に人口に膾炙せり湖上小汽船ありて運輸の便多く且疏水の京都に通せるあり尙勢田川によりて其水を排するが故に交通甚便なりとす湖の周圍は又地勢至て低平にして地味膏腴頗る米穀に適し西岸は特に硯材をも産す。

大津を出で逢阪山の隧道を過ぎ山城に入りて京都に達す其間凡五十分時を要す。

京都 は山城の中央部にあり、加茂川に臨む、人口凡を三十四万

第三圖



京都名所及物産

山城、丹後の全部と丹波の一部とを管する京都府廳あり、又第三高等學校、美術學校、博物館の設あり。街衢整正、大路東西に走る。北方より數へて一條、二條、三條、四條、五條、六條、七條とす、就中三條通は殆ん

と市の中央にありて街路最盛なり。是より以北を上京と稱し以南を下京といふ。市の北部には舊御所あり。二條通の西方には二條城あり。加茂川は市の東部を北より南に流れ市を東西に分つ。昔は是より以西を洛中と稱し以東を洛外と稱したり。川には數多の橋梁を架す。就中三條通の橋は最大にして且美なり。近來琵琶湖の疏水を本市に引き、工業及運輸の便を助く。此地は又四方皆山にして河流其間に盤曲するが故に山水の景に富み名勝頗多し。且桓武天皇延暦十三年始めて皇居を此地に奠め給ひし以來、千七十餘年間の帝都たりしを以て古跡亦甚多し。春には市の西北に嵐山の櫻花を愛すべく、秋には高尾の紅葉を賞すべし。其他北野社、護王神社、東西本願寺、金閣寺、銀閣寺等最著名なり。物産には西陣織、友禪染、清水焼、粟田焼等あり。

市の東北近江の境に峙てるを比叡山といふ。高二千七百二十二尺。天台宗の本山延暦寺あり。此山の餘派は有名なる東山にして市を隔て、鞍馬、愛宕の諸山と鼎立す。京都を出で汽車に乗りて桂川の下流を過ぐ、迎ふるもの曰、山崎、曰、櫻井、山崎は對岸の八幡と共に古今の史上に名高く、櫻井は楠公父子訣別の所たるを以て知らる。斯くて大阪に達す、京都より凡一時間程なり。

大阪は東京を距る百四十四里、十六時間程、大阪灣頭に在りて關西の要衝に位す。人口凡五十万、東京に亞ぐの大都會なり。市街の北方には淀川、東より西に流れ、天保山に至り海に注ぐ。之を安治川と名つく。安治川より溝渠を縦横に引き運輸極めて便なり。鐵道には北方梅田より東、京都、西、神戸に至る官設鐵道、南方難波より泉州堺に通ずる阪堺鐵道、及湊町より大和に達する大阪鐵道、河内、飯盛山の麓に至る浪速鐵道等あり。往昔此地は難波と稱し、仁徳天皇の都と給ひし高津宮の跡ありて、豊臣氏築城以來市

況大に盛大に赴き、徳川氏の世に至りては、日本全國の商業の中心となり、最も繁榮を極めたりしが、維新以來外交の開くるに及び、港内水淺くして大艦巨舶を入るゝ能はざるを以て、貿易の業やゝ減退に歸せしが、現今なほ關西の要樞に當り、貨物集散の地たるを以て繁榮日に加はり、商業の發達、他の都會に優るもの甚た多し。市の東に大坂城あり、第四師團を此所に置く。大坂府廳は淀川口に臨み、攝津の東半及河内和泉の一圓を管治す。造幣局及控訴院あり。紡績會社は所々に散在し、綿布の産出甚盛なり。其他煙管、一貫張、眞田織等の工藝品又甚多し。市の東南隅にある四天王寺、北方にある天滿宮等は共に市人遊覽の勝地なり。

第二 大阪より馬關に至る

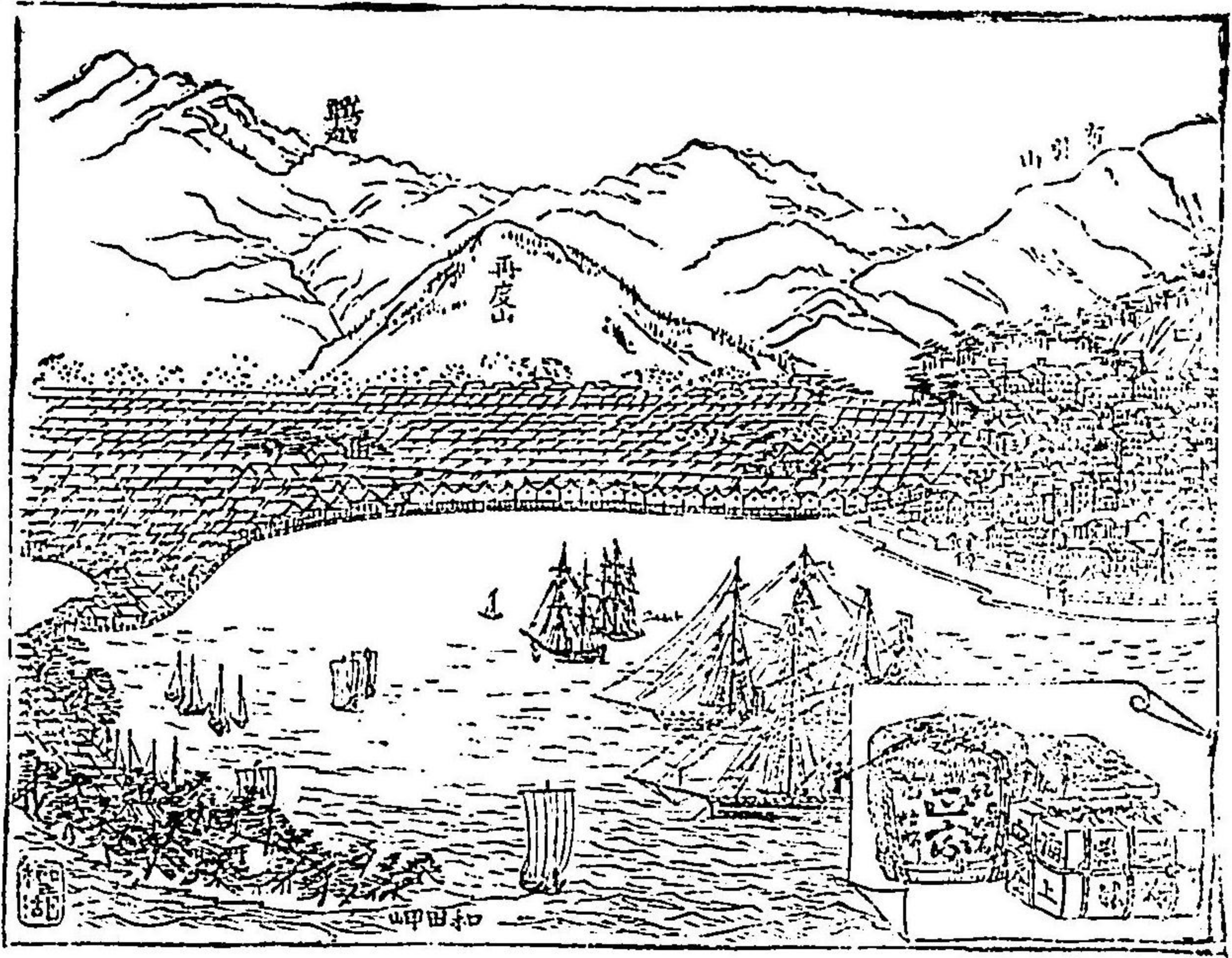
大阪梅田より西方數里池田川を渡りて尼ヶ崎を過ぐ、人口一万四千餘其浦頭を

古の大物浦となす之れより北に分るゝ所の鐵路は酒の醸造を以て聞ゆる池田、伊丹の諸邑に通す。尼ヶ崎より尙西に向ひ武庫川を渡り西ノ宮を經、所謂灘目に沿うて神戸に入る。

神戸市は攝津の西部に在り、其の西半及但馬播磨淡路並に丹波の一部を管治する兵庫縣廳此所にあり、人口凡十六万横濱に亞ぐ大都會にして本邦第二の互市場たり。輸出物、米、綠茶、樟腦、マツナ、石炭等、輸入物産、綿糸織、石油、綿、砂糖、金巾等。此市は元神戸兵庫の二市街を成し其中央には史上に有名なる湊川ありて之が境界をなしゝが、今は合して一市を成せり。湊川神社は元の兵庫にありて楠公を祭る所なり。神戸と大阪との大阪灣に於ける關係は、恰も横濱及東京の東京灣に於けると等しく、京阪地方の物貨の輻湊する所なり。市は紙及食牛を以て名産とす。

布引の瀑及有馬溫泉、角山の鳥地獄は神戸の北方にある勝地にして、播磨の境界

第四圖



神 戸 港

に近き船越は一ノ谷と共
に源平の古戰場たり之を
觀了りて後便を山陽鐵道
に借り神戸を發し須磨浦
を行く須磨は是より播磨
の舞子明石と共に前に明
石海峡を隔て淡路島に
對し風光明媚恰も相模の
勝地の關東に於けるが如
し舞子濱は又我國中央標
準時の子午線に當れり。
明石は人口凡二萬一千帆
木綿及明石縮を産す港内
船舶の出入に便なり夫よ

り汽車四十四分時の所に加古川あり丹波より流れ來りて播磨灘に注ぐ此川の
西更に三十三分時程に市川あり其西を姫路市とす姫路市は播磨の都會にし
て人口二萬七千餘古城趾あり第八旅團の營所を置く神戸を距る二時十二分程
北は播但鐵道によりて但馬の生野に通すべく西北は因州鳥取及作州津山に通
ずる要衝に當り南方飾磨津を距ること亦遠からず市街頗繁榮なり此地又革細
工を以て名あり且國內地勢平坦にして田圃開け地味饒なるを以て米麥の産額
非常に多し姫路より西揖保川を越えて龍野あり醬油を以て名あり龍野の西更
に有年川を過ぐ此川の河口右岸に赤穂あり海濱遠淺にして製鹽に適し佳良の
品を産す此地は又四十七士と共に名高し。
是より舟坂山の隧道を過き備前に入り三石に着す三石には蠟石を産し又盛に
耐火煉化石を製出す其西和氣を過きて東大川あり此川は小舟によりて津山に
上下するを得津山は美作の中央にある都會にして其四近は藍烟草の栽培に適
し其市街は足袋の製造に名あり院ノ庄は其西北山間にあり兒島高德の題詩を
以て聞ゆ又和氣の南伊部は陶器を以て長船は刀劍を以て其名各著はる和氣よ

三三 三里餘岡山に達す、姫路より茲に至る二時二十分を要す。

岡山市 は人口凡五万三千池田侯の舊城地にして、今美作備前備中を管する岡山縣廳あり、第三高等學校醫學部あり、市況頗繁榮にして西大川(旭川)之を貫流す、河口は即三番港なり、前に兒島灣を扣へて兒島半島を望むべし、藤戸の渡は今は地頸となりて存し、兒島高德の古城は其跡尙兒島郡の山嶺中にありといふ、旭川は又岡山より雲伯に通ずる要路にして舟運灌漑の利、兼ね具はる、吉備神社は市の西北山間に在り、吉備津彥命を祀る、蓋し神武天皇御東征の時、今の三備美作を合せて共に吉備といひ、當時天皇の舟楫を調へ給ひし所なり。

山陽鐵道は岡山を出て、尙西廣島に向ふ、即備前の境を越えて備中に入り、倉敷玉島を過ぐ、玉島港は大川(川邊川)河口にあり、大川は源を山陰、山陽の境に發し、砂鐵の産地を流れて玉島に至り、海に注ぐ、其の舟運灌漑の利大にして、而かも河口

の港亦水深く、船舶の碇繫に便なり、此地方河岸には綿及蒲席を産し、海岸には製鹽の業盛なり、吉岡鑛山は川邊川の上流に在り、銅の産額、中國第一なり、玉島より笠岡を経て備後に入り、福山に達す。

福山は國中の都會にして、人口凡一萬五千、綿綿の産を以て名あり、此より西方四十六分時に尾道あり、向島因島等其前灣に横はり、自ら一港を成す、其深さ三仞より十二仞、船舶の出入多し、此地の北方には山岳東西に走りて、地勢自ら南北に分る、其南部は今吾等の經過せし地方にして、即備後表、保命酒を産す、其北部は備中大川の上流及江ノ川の上流地方にして、三次は其北部の小都會なり、三次は又出雲石見より尾道に至り、或は廣島に通ずる咽喉に當るを以て、交通頗頻繁なり、是より尾道を發して三原を過ぐ、煙草及鹽を産すること盛なり。

已にして安藝國に入り、駛すること十二里、海田市を経て廣島に達す、海田市より別に南する所の街道は海軍鎮守府の所在地、吳港に通ずるものなり、吳は前に能美、江田の二島を控へ、要害の港なり。

廣島市 は淺野侯の舊城地にして、人口凡九万四千あり、太田川

に跨る。太田川の河口は市を距ること一里即宇品港の在る所にして海路の交通極めて自在なり。而して陸にしては岡山山口の間に位し、且、可部を経て出雲石見に入るの要路に當り、市街繁盛、繰綿、蚊帳、傘、藥罐を産し、中國第一の大都會なり。特に明治二十七年清國征討の事あるや、聖上親ら車駕を此地に進めさせ給ひ、且、臨時帝國議會を開き給ひしにより、此市は吾等が終に忘るゝ能はざる紀念地となれり。又控訴院及び備後安藝を管する廣島縣廳の所在地なり。

是より尙西に向ふ途に海を隔て、嚴島を見る。嚴島は日本三景の一、周圍七里餘の一嶋にして其中に市杵嶋姫尊を祭るの社あり、因て宮嶋と通稱す。神社は平清盛の造營せしものして社殿岸により水に架し、廻廊長く繞る。故に海潮満つるときは殿廊共に水上に浮ぶが如し。其沿岸には七浦の景あり、此嶋は又毛利氏の陶晴賢を討ちし古跡なり。

第五圖



嚴島の圖

已にして周防に入り岩國川に近づく、茲に一町あり岩國といふ、有名なる錦帯橋あり、又岩國縮布を出たすを以て著はる。是より徳山(人口凡一萬二千)宮市を經山口に向ふ。宮市の南に三田尻港あり、近傍鹽田を以て聞ゆ。山口町は山間にあり、廣島を距ること三十里、防長二州を管轄する山口縣廳の所在地にして山口高等學校の設あり、人口一萬五千餘、古、大内義隆

都城を構へ、華奢一時は京都を凌ぎしの地なりといふ、近傍に湯田の温泉あり。山口より西南に進み長門に入り厚東川を渡る、此川の上流は有名なる大理石の産地、秋吉臺にして、其西南海岸は石炭を産し、又小野田のセメント會社其他の工業場あり、已にして赤間關に入らんとす、其前二里、之を豊浦といふ、其西は即壇ノ浦にして源九郎の平氏を破りし古戰場なり、吾等は山口を出で、茲に十九里、赤間關に入る。

赤間關市 は又馬關といひ或は又下ノ關といふ、是舊時長島の上ノ關、佐波郡中ノ關とを合せて防長三關の港となせるを以てなり、此港九州の門司と相對して下ノ關海峽を占む、水深三仞乃至十仞、其東口は潮流甚急にして之を早柄ノ瀬戸といふ、西口には周圍三里の引島横はりて更に南北の二口に分つ、北口には燈臺あり、近年特別輸出及び特別貿易港となりてより市況益盛なり、人口凡三万五千、良質の硯を製す、市内赤間宮あり又 安徳

天皇の御陵あり。

第三 九州を一周す

下の關海峽を横ぎりて門司に渡る、門司には砲臺あり、其港は水深く頗大船の碇泊に便なり、且特別輸出港にして又九州鐵道の起點なるを以て市街漸く繁盛を加ふ、汽車に乗りて此地を發し西南三里小倉を過ぐ、小倉は從來九州三街道の起點にして又小倉織の特産を以て有名なり、第十二旅團の營所を置く。

此地より西筑前に入り折尾を過ぐ、折尾より鐵道三派に分る、右するものは北洞ノ海のはどり若松に至り、左するものは遠賀川に沿ひ途にして又飯塚及豊前國金田の二方に分岐す、二路共に著名の石炭坑區を過ぐ、吾等は折尾より尙西して遠賀川を越え香椎、箱崎を経て博多に達す、門司より茲に至る二時三十分、香椎は仲哀天皇の行在所のありし地にして、箱崎は其の八幡宮を以て名高し、此地方地味肥沃にして米、麥、煙草、甘蔗及藍を産し又生蠟を製す。

博多 は那珂川を以て福岡に連り、福岡灣に臨む、今合稱して福

岡市といふ。舊福岡は黒田侯の舊城地にして第六師團に屬する第二十四聯隊の營所あり。筑前筑後と豊前の四郡を管する福岡縣廳あり。其の博多は寧ろ商況盛にして有名の博多織を産す。人口合せて五万八千餘。近年特別輸出及び特別貿易港となりしより市況一層繁盛となれり。

博多を發し東南に進むこと五里にして太宰府あり。此地は古、太宰府を置きし地にして又菅原道真を祭れる太宰府神社あり。汽車は是より南國境を超え肥前に入りて筑後河の畔に出づれば二途に分る。此分るゝ所を鳥栖といふ。尙南するものは飛白等の綿布を以て名ある久留米市(人口凡二万七千)を経て熊本に至るべし。鳥栖より西に折れ佐賀市に出づ。福岡より約二時間程なり。佐賀は人口凡二万九千。鍋島侯の舊城地にして佐賀市及肥前の八郡を管する佐賀縣廳あり。市街端正商況亦盛なり。鐵道は是より武雄に至て止む。武雄には有名の温泉あり。更に有田に出づ。有田は陶器を以て名あり。此地より北に當りて伊万里、唐津の諸邑あり。

唐津は特別輸出港にして近傍の地盛に石炭を産す。又其近傍鷹島は元寇慶殺の昔忍ばれ、名護屋は今も尙豊臣秀吉の大望を想ひ起さしむ。有田より尙西に進めば佐世保に達す。佐世保は鎮守府の軍港にして市街漸く盛なり。是より北に向へば平戸島に渡るの便を得べし。南に向ひ鯛ノ浦の東岸に沿うて大村を過ぎ長崎に入らん。

長崎市 は我邦五港の一にして又最古き開港場なり。肥前の一市六郡と壹岐對馬を管する長崎縣廳、控訴院及第五高等學校醫學部の所在地にして人口七万二千餘。市街は山を負ひ土地狹隘且頗高低ありと雖も、港内水深く能く大艦を容るべし。港外三里を距る高嶋は周回一里未滿の小島なれども、嘗て石炭の産出に富みたるを以て名あり。

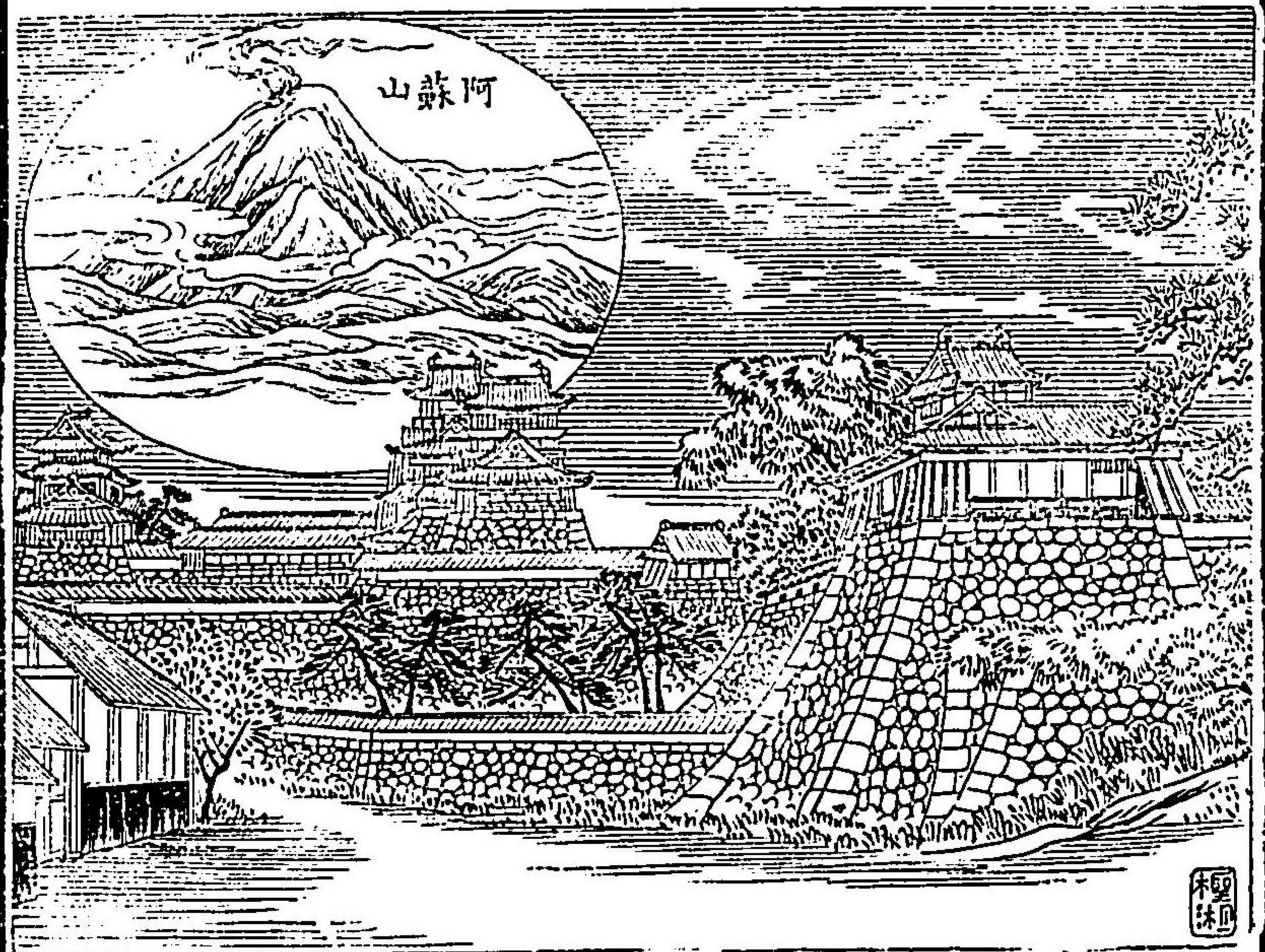
是より諫早に出で温泉岳の聳ゆる島原半島に入り、特別輸出港なる口ノ津及舊城地島原を廻りて又諫早に還り、多良岳の麓を廻り筑紫海に沿うて進み一たび

佐賀に入りて又南に向ふ。温泉岳の高四千六百八十六尺の活火山なり。筑後川を渡る。筑後川は九州第一の大河にして豊後より來り、茲に筑紫海に注ぐ。此河の沿岸は平野遠く連り、地味亦肥れて五穀菜蔬藍甘蔗等の豊熟に適す。若津港は此河の河口にして湖沙干満の差甚しき所なり。是より南二里に柳河町あり。久留米に次げる商業地たり。此地を出で、瀬高に至るの途、矢部川驛に久留米より來る所の鐵路と會す。依て之に乗りて三池を過ぎ肥後に入る。三池は本邦有名
の石炭産出地なり。

肥後に入りて高瀬、木葉、田原阪等西南の役に有名なる地方を過ぎ、熊本市に達す。福岡より茲に至る汽車時四時間餘を要す。

熊本市 は肥後の北部にあり、阿蘇活火山(四千六百八十尺)より發せる白川に沿ひ、人口凡六万三千熊本縣廳の所在地にして、細川侯の舊城地なり。加藤清正の築ける熊本城は市街の中央に位し、今第六師團の軍營あり。明治十年の役、谷將軍固守の故を以

第六圖



熊本の城の圖

て最も能く知らるゝ所なり。市内又第五高等學校あり。商業亦盛なり。

隈府は菊池氏の古蹟にして、山鹿は汽車開通前、西街道の要地なりき。共に熊本市の北方に在り。吾等は是より南に向うて進む。途に宇土より西に折れ、宇土半島の西端に出づれば、こゝに三角港あり、特別輸出港たり。

宇土より尙南へ進めば八代に達す、目下九州鐵道の終點たり、球摩川の急流國見岳を發するもの、此町の南方に來り、八代灣に注ぐ、是より球摩川を越え又南に進む、右は海を隔て、天草島を望み、左は廣き平野を眺む、此平野は肥後米を産する所にして、地味又五穀、綿藍、烟草、甘薯、玉蜀黍等に適す、肥後の山中は又良材を出だすに名あり、人吉は球摩川の上流薩摩に通ずる要路に當れり。

八代より海岸に沿ひ三太郎阪を越え長島を横に見て薩摩に入り、口ノ津を過ぎ焼酎に名ある阿久根を經、川内川の谷に出で、市來に至り鹿兒島に達す、熊本よりこゝに至る道程四十二里。

鹿兒島市 は人口凡五万六千薩摩大隅二國を管する鹿兒島縣廳の所在地にして島津公の舊城地たり、城山其北を繞り鹿兒島灣其前を浸し、港内船舶輻湊市況頗盛なり、地方の物産は薩摩燒、飛白、鯉節、煙草、甘蔗、甘薯、牛、馬、金、錫等ごなす、其の錫鑛山は市の南、谿山にあり。

鹿兒島の南に横はれる大島を櫻島といふ、大隅に屬す、周回凡十里、御岳其中央に聳え高さ三千六百三十七尺頂上常に噴烟せり、鹿兒島より道を東街道に取り加治木國府、烟草の名産地、福山等を過ぎて日向に入り都ノ城に達す。

霧島山は日向大隅に跨る活火山にして、其南麓に霧島神宮あり、東麓都ノ城には則ち高千穂の宮趾あり、都ノ城は大淀川の谷に位す、是より大淀川に沿ひ其河口に近づけば人口八千餘の一町に達す、之を宮崎となす、市況甚盛ならずと雖も、當時日向一圓を管する宮崎縣廳の所在地なり、是より南すれば、肥後志布志等を経て大隅に入るとを得べく、北すれば則ち東街道に従ふものなり、北に向ひ一ノ瀬川を渡る、此川は源を市房山に發するものにして、佐土原は其南岸にあり、是より高鍋に出で江代山より發する大丸川を渡り、美々津に出で國見山より發する美々津川を渡り、細島港を横に見て延岡に達す、宮崎よりこゝに至る殆んど三十里の間海岸屈折少く且砂洲多し、農産には米、麥、甘薯を主とし、且林産に富み、又樟腦製造、製糖、製茶の業盛なり、延岡は五箇瀬川の谷にあり、此國北部の商地にして、三田井を經て熊本に至るの便あり、市況盛なり、是より北、國境を超えて豊後に入る。

豊後に入りて海岸を行くものは佐伯臼杵を経て後、大分に出づべく、内地を行くものは祖母岳より發する大野川の谷に出で、大分町に入るべし。大分は同名の灣頭にあり、人口凡一万一千、豊後及豊前二郡を管する大分縣廳の所在地にして大給子の舊城地なり、市中には鑄物及檜物細工の製産あり、竹田を経て熊本に入り、日田を経て久留米佐賀博多等の諸市に通ずる要路に當り、市況盛なり、是より北に進むこと三里別府の温泉場あり、其四近は又一帶の原野にして、豊後富士の名ある由布岳は其の西北に峙てり、甘蔗、紙、煙草、蒲席等は多く此地方より産す、是より北に進み豊前に入りて宇佐に達す、宇佐には宇佐神社あり、應神天皇神功皇后を祭る、和氣清麿の事を以て殊に名高し、其の西北三里に中津あり、山國川に沿ひ人口凡一万四千あり、山國川の上流には世に有名なる耶馬溪ありて、其源は遠く豊筑の界なる英彦山より發す、英彦山上には神社あり、天忍穗耳尊を祭れり、中津以北は地勢極めて平にして地味亦肥え五穀の産に富む、吾等は中津より行橋を経て又小倉に入る、鐵路は小倉より行橋を経て尙南方に連接せり、小倉より門司を経て馬關に還る。

第四 馬關より松江を経て京都に至る

馬關より美禰郡の高地を過ぎて萩に入る、萩は阿武川に臨み人口一万九千、市況往時の如く盛ならず、吾等は阿武川に沿ひ東徳佐峰の野坂を超えて石見に入る、麓の町を津和野といふ、津和野は山間の小都會なれども北に笹ヶ谷の銅山を控へ自ら一商區をなす、是より鮎を以て名ある高津川に沿ひ海岸に出づ、河口に高津村あり、柿本人麿を祀るの神社あり、此地より東北に進むこと九里濱田に達す、濱田は日本海に臨める一良港にして製紙製糸を以て聞ゆ、海岸に沿ひ尙進むこと四里、江津に至りて江川を渡る、江川は全長五十餘里、山陰山陽第一の大河にして其上流地方に砂鐵及銅を産す、又三次と舟運の便あり、江津より東、銀山を以て名ある大森に入る、大江高山其南に聳え、三瓶山其東に峙てり、三瓶山は雲石兩國の境に跨り高凡四千尺、其山麓温泉多し、大森の西海岸にも亦温泉地あり、温泉津といふ又小港なり、吾等は大森より進みて出雲に入る。出雲は神代の故國にして、出雲大社は西海岸の杵築町にあり、吾等は神門川を渡り、今市町を過ぐ、今市は出雲西部の商區なり、こゝより斐伊川を超ゆる安道湖の南

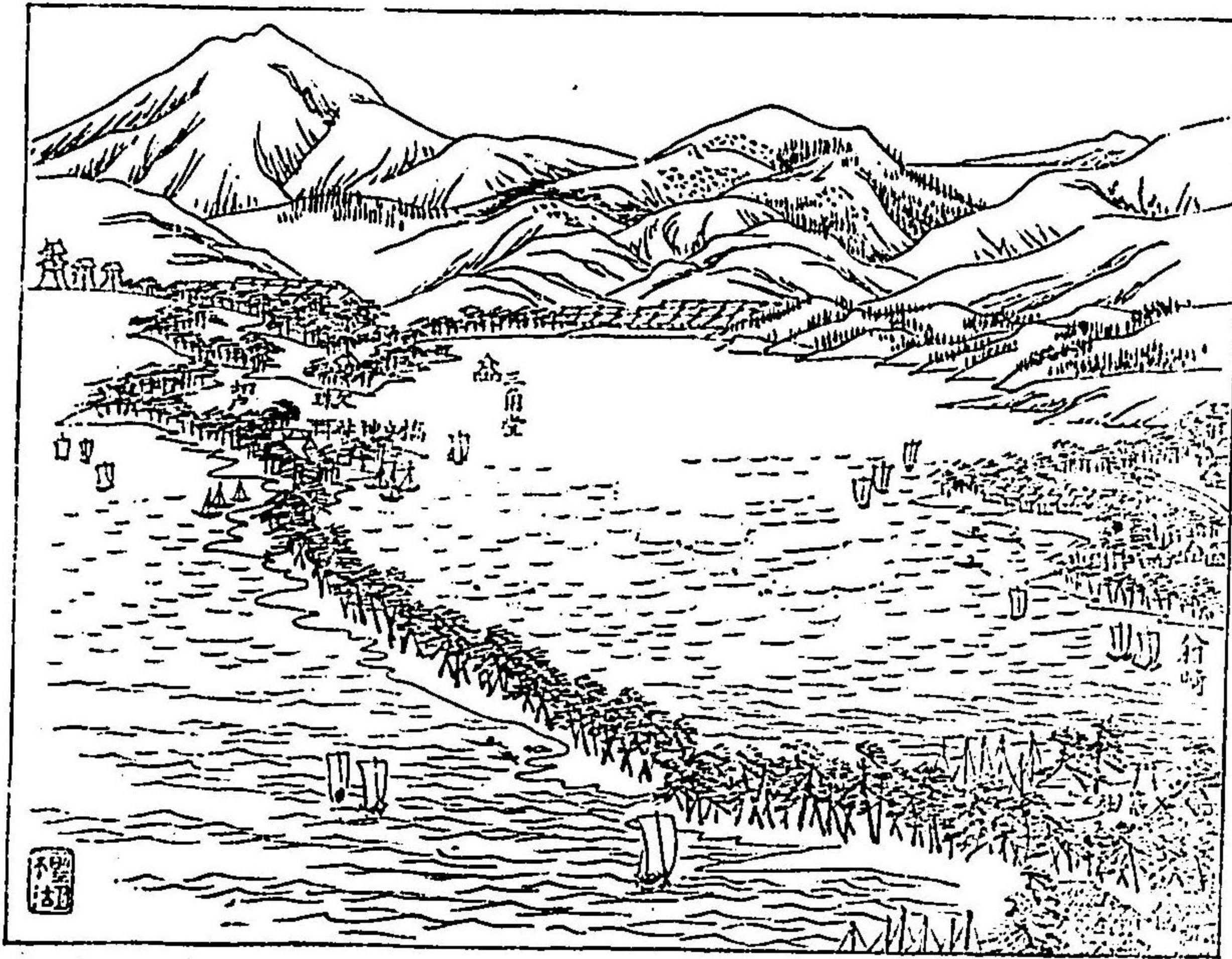
岸に沿うて松江市に達す、斐伊川は源を神代の古蹟簸の川上(船通山)に發し砂鐵地方を流れて宍道湖に入る長さ廿一里、其の成せる平野は神門川の平野と合せて地方米穀の産地となす、宍道湖は周回十三里風景絶佳を以て聞ゆ、其水多くは流れて中海に入る、又佐陀川によりて日本海に通ず。

松江市 は宍道湖の湖脚にあり、人口凡三万五千、出雲石見隱岐を管する島根縣廳の所在地にして松平伯の舊城地たり、東西の湖海は小汽船によりて交通の便を助け市況頗盛なり、市の近傍、製糸、製茶及陶器製造等の業盛にして又人參、鱸、海苔等の名産あり。

頓原は松江市より赤名峠を越えて廣島に通ずる街道に當り、炭酸泉を以て名あり、松江市の西南、須賀村に素盞鳴尊の宮趾あり、又市の東南、廣瀬には尼子氏の舊城趾あり、松江市を發し半鹹半淡の中海に沿ひ、安來を経て伯耆國に入り米子に達す。

米子は人口一万五千、南は四十曲峠を経て岡山津山に至るべく、北は夜見ヶ濱を貫きて境港に至るべし、境港は此地方の要港にして又隱岐に渡るの便あり、吾等は東に向ひ日野川を過ぐ、近傍は米棉の産地として聞ゆ、日野川は源を雲備伯の界なる三國山より發す、上流盛に砂鐵を産す、川の東方富士形の山を望む、是即大山なり、中國第一の高山にして高さ五千九百八十六尺、其裾野は牧場なり、京阪地方の食牛は此地方より輸送するもの多しといふ、吾等は尙海岸に沿うて進むに左に船上山を仰ぐ、名和長年の遺勳を以て名高し、已にして天神川を過ぐ、上流に木棉及飛白を以て名高き倉吉あり、此地方よりも亦砂鐵を産す。是より因幡に入り湖山池の傍を過ぎ千代川を渡りて鳥取市に入る、千代川は又加露川といふ、源を那岐山に發し其谷は姫路街道の通ずる所なり、鳥取市は池田侯の舊城地にして人口凡二万八千、因幡伯耆を管する鳥取縣廳あり、北加露河口に加露港ありて海に通じ、南播磨の姫路に至るの便あり、地方の物産は牛、馬、砂鐵にして又茶、生糸あり、吾等は鳥取を發し岩井の温泉地を過ぎ、牛を以て有名なる但馬に入る。

第七 圖



天の橋立

海岸に沿うて進めば豊岡に出づ、豊岡は京極氏の舊城地にして朝來河の畔にあり湯島温泉に近し、柳行李紙等を産す、是より東丹後に入れば與謝灣に臨める宮津に達す、宮津は人口殆んど一万、丹後縮緬の名産ある所にして又特別輸出港たり、其港の前に横はれる青松一帯の砂嘴は所謂天の橋立にして日本三景一の名空しからず、宮津より東に進めば軍港豫定

地の舞鶴港(水深八俣)に至るを得べく、尙東に進めば終に若狹に入りて其の小濱に達すべし、吾等は豊岡より河畔に沿ひ丹後に向ふ、出石の陶器地、生野の鑛山は街道の左右數里にあり、

丹波に入れば地勢概して高峻なり、福知山に達す福知山は山間の一市邑にして、こゝを過ぎて北に流るゝ所の河は大江山の麓を廻り丹後に入り由良川となりて由良港に注ぐものなり、福知山より綾部を経て須知の峠を越え園部より龜岡に入る、須知は即加古、由良、大堰三川の分水嶺なり、龜岡は舊名を龜山といふ、明智光秀の築きし城趾あり、此國舊時七大名の分轄せしと地勢の然らしむるとにより今に至りて尙大市邑に乏しく、龜岡尙一万に足らず、國産としては煙草牛等あり生糸茶等も少からず、吾等は龜岡より大堰川に沿ひ行程六里京都に入る、兩岸の風景甚たよろし。

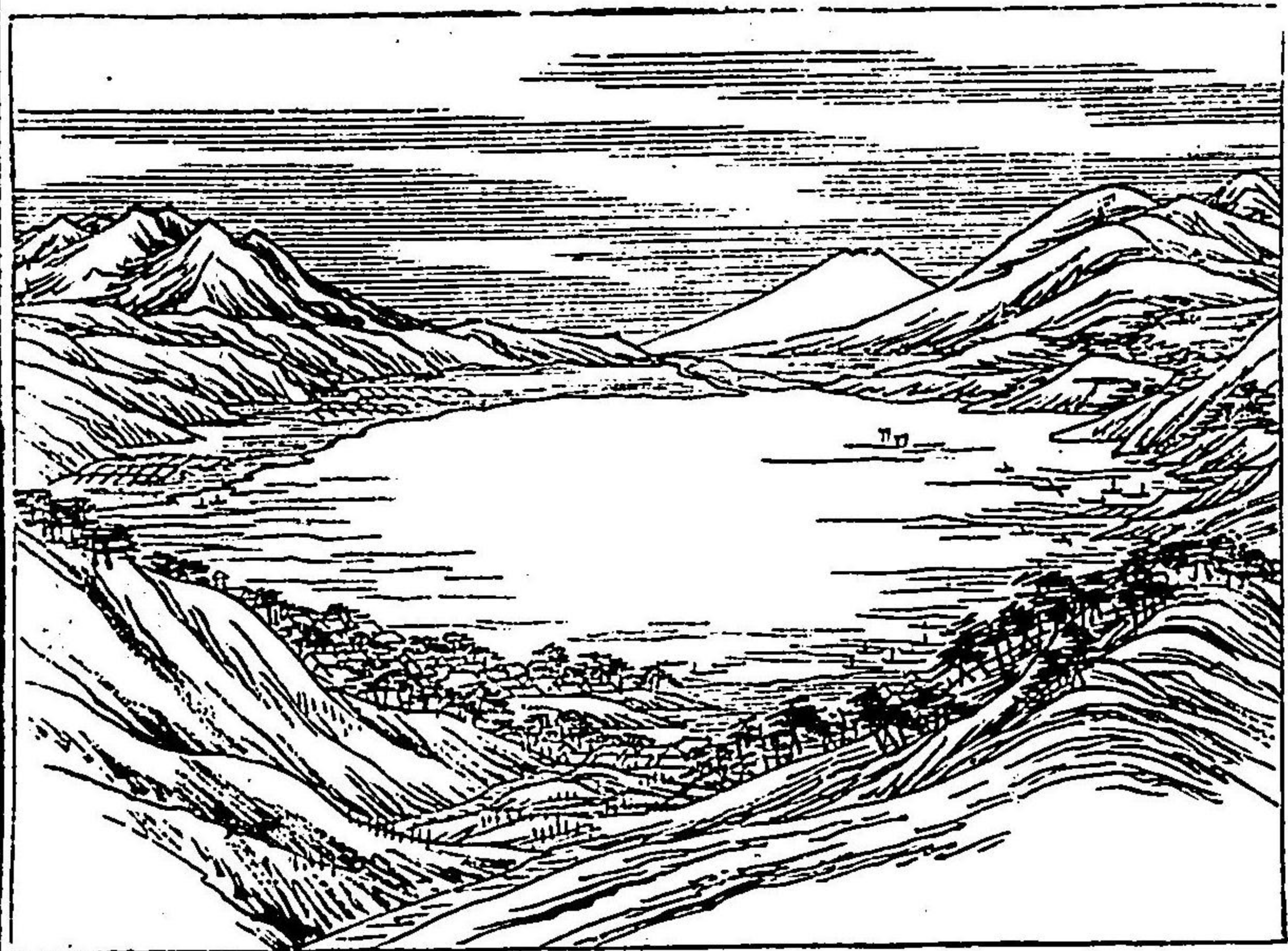
第五 京都より木曾甲府を経て東京に至る

京都より近江鳥居本に出で美濃、信濃、上野を経て武藏國板橋に至る之を中仙道といふ、其の京都より岐阜に至るの間は鐵道と合ひ或は離れ甚しき差違なきを

以て汽車によりて先づ岐阜に達し、是より中仙道に従ひ東に進む七里にして太田あり、こゝより飛騨川に沿ひ飛騨の高山に到るを得べし。高山は乗鞍岳、大日岳を繋ぐ所の分水嶺の北にあり、飛騨國の中部に位す、岐阜を距ること三十四里、人口凡一万五千あり、宮川に臨む、近傍、陶器製造、製紙、製茶の業盛なり。此地方又良材に富み良匠多し、其名古より著はる、高山の西南、位山は一位の木を以て名高し、東に聳ゆる乗鞍岳は高さ一万四百五十一尺、富士山に次げる秀峰にして、鎗ヶ岳、木曾御岳等其の左右に列り、共に飛騨の山系を造り、日本中部の大高地を起せり、神岡、鑛山は鎗ヶ岳の西麓にあり、宮川、白川の谷は越中に通ずる要路なり。

太田より加茂野を過ぎ、恵那山を横に見、木曾川谷に沿うて信濃に入るに道峻しく、谷深し、其水は常に檜、樺、松、杉等の良材を送るの通路たり。是より其源に近づき、駒ヶ岳と乗鞍岳とを繋ぐ分水嶺を超ゆれば、犀川の谷に下るべし、之に沿ひ鹽尻より北に向へば、松本に到るを得べし、松本町は松本平にあり、信濃の中部に位し、北の方長野及越後の糸魚川に通ずる要路に當れり、人口凡二萬九千、養蠶業甚盛

第八 圖



諏訪湖の景

にして従て市街も亦盛なり、中仙道に従ひ鹽尻より東に折れ、鹽尻峠を越ゆ、頂上より望めば、一帯の連山、其西南に走りて、遠く三河尾張の境に至り、左は立科山の連峯、眼中に入り、東方遙に富士山頭を認む、脚下は即ち諏訪平にして、鏡の如く澄めるは、諏訪の湖、家の多く集ひたるは、諏訪の町なり、諏訪湖は、周回四里餘、毎年冬季に至り、湖水氷結し、人馬其上を往來す

といふ、其水南に流れて天龍川となり伊那谷を成して遠江に入る、伊那谷の飯田町は人口一万三千餘、養蠶及傘、紙、漆器の製造を以て知らるゝ所なり、鹽尻峠を降り、下諏訪を過ぐ、中仙道はこゝより和田峠を経て東北の方追分に出づるなり、甲府に至らんには、こゝより上諏訪を経て東南甲斐に入るをよしとす、是より甲府に向ふ。

甲斐は四面山を以て包まれ南に富士山あり、北境には八ヶ岳、金峯山等あり、西境には赤石山系に屬する甲斐駒ヶ岳、鳳凰山、北岳、白根山の諸山あり、北、西の兩山脈は共に金鑛を産する所あり、中に就き保鑛山最も名高し、此の甲金の名ある國に入り釜梨川の谷に沿ひ韭崎を経て甲府に至る。

甲府市 は笛吹川に沿ひ國の中部に位す、人口凡三万五千、甲斐一圓を管する山梨縣廳の所在地なり、國中一體養蠶機織の業盛にして地味又最も葡萄の栽培に適し、甲斐絹、甲州葡萄の名夙に高し、其他菓物、材木、水晶等亦名あるものなり、昔武田氏の據りし所たり。

笛吹川は南に流れて釜梨川と合し富士川となりて駿河に入る、鵜澤は富士川の岸にあり駿河に下るの要津なり、身延山は又鵜澤の西南に當り日蓮宗の本山を以て聞ゆ、是より東京に赴かん爲め道を東に取り、葡萄を以て名ある勝沼を過ぎ、武田勝頼を以て知らるゝ天目山を横に見て、篠子峠を越ぬ馬入川の谷に降り猿橋を過ぎ、相模に入りて小佛嶺を越え武藏に出で、八王子に達す。

八王子は人口凡二万五千、製糸機織の業盛にして商況亦活潑なり、又東京新宿との間に汽車の便あり、依て之に乗りて多摩川を横ぎり、櫻花に名ある小金井を横に見て東京に入る、途に汽車の立川より分れて青梅に至るものと、國分寺より分れて川越に至るものどあり、青梅は秩父産石灰の本場にして川越は武藏の一商區たり。

第六 東京より青森に至る

汽車に乗りて東京上野の停車場を發し北方四十五分程の町を浦和といふ、武藏の大部を管する埼玉縣廳の在る所にして人口六千餘、木綿織物の産あり、是より數分時にして大宮驛に至る、鐵道左右に分れ左に行くものは中仙道鐵道となり

右に行くものは東北鐵道となる、東北鐵道に依り中川を横ぎり栗橋驛より、醬油に名高き野田を横に見て更に利根川を越ゆる下總の古河驛を過ぎて下野の小山に至る。

小山は兩毛鐵道水戸鐵道の會する所にして市街年を遡うて盛なり、其北五十分時の所を宇都宮町となす、宇都宮は下野一圓を管する栃木縣廳の所在地にして人口三萬六千餘、其東南の眞岡には木綿の名産あり、宇都宮より西北に分るゝ所の鐵道は日光鐵道にして之に乗らば一時間餘にして日光に達すべし、日光は徳川氏祖廟のある所にして其の東照宮は結構壯麗を以て聞ゆ、其北に峙つ所の男體山高八千九百九十四尺は日光山彙の冠にして、日光山中には湯本温泉及中禪寺湖あり、湖水深く且清し、古放魚を禁せしも近年養魚の禁を解きしより大に魚を産す、其水溢れて華嚴の瀑布となり又流れて大谷川となり東に走りて鬼怒川に入る、華嚴は山中第一の瀑布なり、此地は又日光塗を産し山に杉檜等の良材多し、且其の南方六里に足尾の銅山あり産額本邦第一なり、吾等は宇都宮を發して尙東北に進み、鬼怒川那珂川を越ゆる、殺生石を以て知らるゝ那須野を過ぐ、野の西方

高原山の麓に鹽原温泉あり稍名あり、已にして汽車は那須岳を左に見入溝山を右に見て磐城に入り白河に達す。

白河は古關所のありし地なり、八溝山は其東南にあり脈を北に引きて磐城の高地を成す、那須岳は白河の西に位し北に延きて安達太郎山吾妻山に連り岩代を東西二部に分てり、阿武隈川は那須岳より發し此東西兩山脈の間を流るゝこと五十餘里にして太平洋に注ぐ、棚倉は白河より久慈川谷に沿うて水戸に出づる街道にあり。

阿武隈川の谷に沿ひ岩代に入り、三春駒の名高き、磐城の三春を横に見て郡山本宮を過ぎ紬に名ある二本松を経て福島町に入る、東京より九時半程なり、福島は人口凡一万七千岩代及磐城の大部を管する福島縣廳の所在地にして養蠶製糸の業盛なり、兩羽街道とは即ち此地を發して羽前に入り羽後を通りて陸奥に到るものをいふなり。

吾等は是より半田銀山を横に見て又磐城に入り白石を過ぎて陸前岩沼驛に至り、こゝに於て常陸の水戸より來れる濱街道に會す、常陸より入るものは途に勿

來關のわりしといふ所を過ぎ、白水炭田近傍の地方を過ぎ平を経て中村を通り
さてこゝに來れるなり。岩沼より北三十分にして仙臺に達す。東京より仙臺まで
十二時間程なり。

仙臺市 は東北第一の都會にして人口六萬八千餘、名取川に臨
む、第二師團控訴院及第二高等學校の設あり。又陸前の大部と磐
城の北三郡を管する宮城縣廳の所在地たり。精好織、綾羽二重、銅
器、漆器埋木細工等を出だす、伊達氏の舊城地なり。

仙臺灣は本州東海岸に於ける大なる灣入にして日本三景の一なる松島は其灣
の西部にあり、鹽竈は其灣に臨み製鹽の名ある所にして又松島を臨むによろし、
東北鐵道は仙臺の北岩切停車場より分れてこゝに至るものなり。吾等は仙臺よ
り鳴瀬川、涌川を横ぎり、陸前米に名高き平野を行き盡して陸中一ノ關に入る。鉛
鑛の産額日本第一たる細倉鑛山は國の西北にあり、古川、小牛田、涌谷、石巻は陸前
の西北部より萩の濱に出づる街道に當れり。

第九圖



松島の景

一ノ關よりは北上川の岸に
近づき其の谷に沿うて北に
進む。北上川は流程七十六里
源を陸中の北部に發し石の
巻に至りて仙臺灣に注ぐ。其
谷は米の適地にして、栗駒山
を含む所の中央山脈と仙人
嶺、早池峯を含む所の北上山
系とに挟まる。吾等は一ノ關
より水澤、黒澤尻、花巻等を経
て盛岡に入る。仙臺を出で、
こゝに六時三十分を要す。

盛岡市 は陸中の大部
陸前の北一郡並に陸奥

の南一郡を管する岩手縣廳の所在地にして人口三万二千餘、青森に通ずる要路に當る、物産には絹布あり、舊時南部伯の城地にして安部貞任を以て名高き衣川の柵趾は其の近傍に在り。

汽車は盛岡を出で岩手姫神二山の間を過ぎ、中山峠を貫きて陸奥に入り馬入川の谷を下りて八戸に出で、陸前より陸中の濱街道を経て來るものと會す。陸前より來れるものは先づ仙臺を出で、道を東海岸に取り、近傍金を産する氣仙沼町を過ぎ陸中に入りて鐵鑛に名高き釜石町を經、宮古を通りてこゝに會せるなり。馬淵川の河口鮫港へは八戸より分るゝ所の鐵道あり。

八戸を出で相坂川を渡る、相坂川は源を十和田湖(周回十里)に發するものにして十和田湖の近傍には十和田鑛山あり尙少しく離れて陸中の小阪銀山尾去澤銅山あり吾等は三本木野を横に見て小河原沼(周回十四里弱)の近傍に出で野邊地を過ぐ。

野邊地より北に突出する半嶋を斗南半島といふ野邊地灣を隔て、望む所の連

山は即其山麓にして恐山といひ、其一峰高く聳ゆるものを釜臥岳と稱し硫黃を産する所たり、其麓の大湊は良港の開あり、汽車は野邊地より西に折れ小湊を過ぎて青森に入る、盛岡を出で、こゝに八時間餘なり。

青森町は青森灣に臨み北海道との便多し、陸奥の大部を管する青森縣廳及第四旅團の營所あり、人口凡万四千、近傍の地は米穀並に檜、松、杉、羅漢柏等の良材を産す。

第七 青森より兩羽及越後を経て東京に入る

青森の東南に八甲田山(六千百一十一尺)あり其脈西北に引きて津輕半島をなす、吾等は汽車によりて其山脈を横ぎり一時間餘にして弘前市に達す。

弘前市 は岩木川の谷にあり人口三万一千餘、陸奥第一の都會にして物産には漆器あり又近傍の地は米を以て名高し、津輕氏の舊城地たり。

岩木川は源を白神岳の近傍に發し岩木山の麓を流れて十三瀉に注ぐ、吾等は弘

前より東南矢立峠を越え羽後に入りて大館に達す。陸中より來れる米代川あり、西南に流れて二ツ井を過ぎ阿仁川を合せて能代に至り、能代川となりて日本海に注ぐ。能代は漆器を賣たし阿仁川の上流森吉山の麓阿仁は銀銅鑛に名高く、二ツ井の北方太郎鑛山は多く鉛を産す。吾等は、大館より米代川に沿ひ、鶴形より折れて南の方八郎潟に宿ひ、土崎より秋田市に入る。八郎潟は周回十五里船越の峽によりて日本海に通ず。秋田市は大平山を負ひ、御物川に臨み土崎港を距ること二里弱、羽後の大部と陸中の一郡を管する秋田縣廳の所在地にして、又佐竹侯の舊城地たり、人口凡二万七千、秋田織等を以て物産とす。秋田路は亦一の名産也。秋田より海岸に沿ひ本莊を過ぎ、又烏海山を横に見て酒田港に達することを得べし。酒田町は人口凡二万一千、明治廿七年一旦震災に罹りたれども、羽後の商業地として市況舊の如く盛なり。吾等は荒川銅山を横に見て御物川の谷に沿ひ、横手湯澤を経て、院内銀山に近き院内峠を越えて羽前の新庄に出でん。御物川は源を酢川岳に發し、其谷は善く米穀を産す。横手は又陸中黒澤尻に通ずる要路に當

れり。

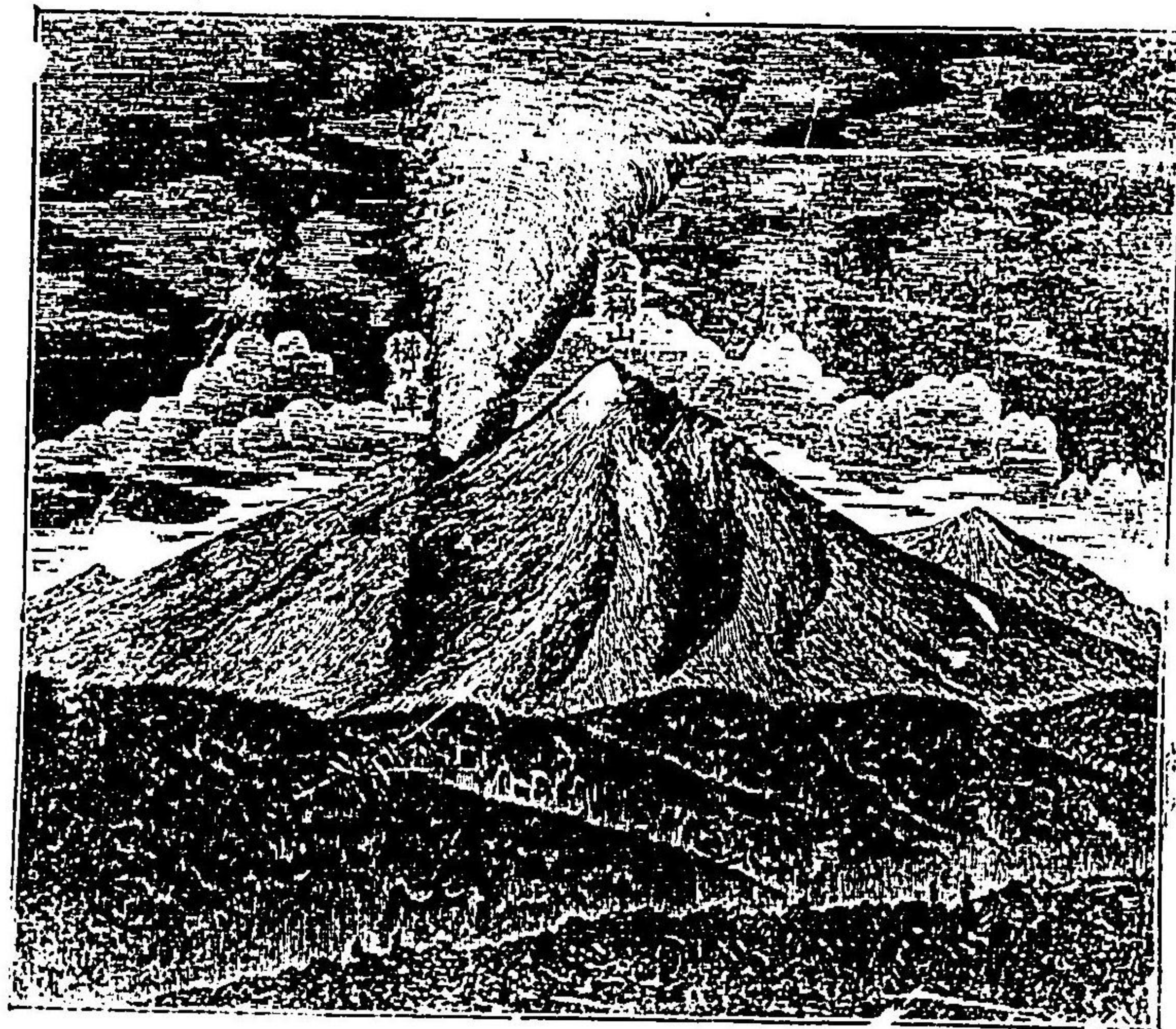
羽前の新庄は人口凡一万一千あり、是より最上川に沿ひ酒田に至ることを得べし。最上川の谷は善く米穀に適す。吾等はこゝより最上川の谷に従ひ楢岡、天童を経て漸く南に登り山形市に入る。

山形市は羽前一圓と羽後の南一郡を管する山形縣廳の所在地にして、人口三万三千餘、東は關山峠(笹谷峠)を経て仙臺に通ずべく、西は月山の山麓を横ぎりて鶴ヶ岡に達すべし。

鶴ヶ岡は人口凡二万、亦繁盛の所なり。吾等は山形より上ノ山赤湯等の温泉地を経て米澤市に達す。

米澤市は人口凡三万、絹織物を以て名高し、其南に登ゆるを吾妻山の諸峰となす。吾妻山は岩代羽前の境に在り、明治廿六年破裂の時三浦西山の兩氏其實験に斃れし處なり。米澤より又板谷峠を越えて福島に至るとを得べし。吾等は檜原峠を超え、明治廿一年の破裂を以て名高き磐梯山を横に見て若松町に入る。若松町は元會津といへり、人口凡二万五千、地味農産に宜しからずと雖も漆器蠟燭鐵器及

第十圖



磐梯山破裂

陶器を製出す、その東に猪苗代湖あり汽船を通ず(周回十七里)其水流れ出で、日橋川となり、山王峠に發する大川及尾瀬沼に發する只見川を合せ越後に入りて阿賀川となる。吾等は乃ち其谷に沿ひ若松より西北に向うて進み、經井澤の銀山を横に眺め、越後に入りて鳥居に出づ。飯豊山は其の北方に聳ゆ。鳥居より津川を経て新發田に至る新發田は人口一万六

千餘、第二師團に屬する第十六聯隊の營所あり。近傍湖沼多し、村上を経て羽前の鶴ヶ岡に通ずべし、吾等は是より新潟に至る。

新潟市は信濃川の河口にあり、越後一圓と佐渡とを管する新潟縣廳の所在地にして人口凡五万、我國五港の一たり、然れども信濃川の泥沙年々河口を埋め船舶の碇泊に不便なり、北國街道に從はゞ寺泊、出雲崎、柏崎を經、米山を横に見て直江津に至るを得べし。

信濃川は信濃より來り日本海に入る、其長さ百餘里にして越後の米穀の多くは其の平野より産す、又其平野の中には織物を以て名高き土地少なからず五泉長岡、十日町、小千谷、六日町等即ち是なり、吾等は小汽船に乗り新潟を出で信濃川を遡り、彌彦山を後にし三條を横に見て長岡に至る。長岡は牧野氏の舊城地にして其東方には石油を産し古志油田の稱あり、蒲原油田は其の西に横はる。之より小千谷、六日町を經て清水越を越へ上野に入る。

川に沿うて先づ沼田に出でこゝにて片品川に會し、尙下りて澁川に至り吾妻川に會す、こゝより西方富士山形の山を見る之を榛名山といふ、伊香保温泉は其麓にあり、又澁川より吾妻川に沿うて遡れば白根硫黄山の麓なる草津温泉に至るを得べし、澁峠は即ち草津より信濃に通ずる坂路にして、吾妻山は草津の西南に當れり。

吾等は澁川より南に進みて高崎に至る、高崎町は人口凡三万、第一師團に屬する第十五聯隊の營所あり、東は兩毛鐵道によりて東北鐵道と小山に會し、西は直江津線の鐵道によりて信濃に通じ、東南は又鐵道によりて東京に至るを得べし、即ち高崎より汽車に乗りて、製糸に名高き新町を過ぎ武藏に入る。

遙に南に連なれるは秩父山にして三峰山、武甲山は其中に著るし、熊ヶ谷に至りて秩父より來れる荒川に會す、荒川は秩父より檜杉樅等を運び出だす舟路にして其の下流は即ち隅田川なり、汽車は熊ヶ谷より大宮浦和を過ぎ赤羽より東京上野の停車場に達す、高崎よりこゝに至る凡そ三時間程にして新潟より道程凡六十里あり。

第八 東京より關東及び北國を経て大阪に至る

東京本所の停車場より汽車に乗り、中川江戸川を渡り下總市川驛に達す、市川は古の鴻ノ臺あり今は陸軍教導團を置く、其東方に小金原及習志野あり、汽車は市川より船橋を経て千葉に至る、千葉は東京灣に臨み人口凡二万六千あり下總の大部と上總安房の全部とを管する千葉縣廳の所在地にして又上總に通ずる房總鐵道の發する所たり、第一高等學校醫學部の設あり、汽車は又こゝより東北に折れて佐倉に達す、佐倉は東京を距ること汽車一時半程の所にあり、印幡沼に臨む、第一師團第二旅團の營所あり、又木炭を産す。

吾等は佐倉より成田を経て、一たび酒に名高き佐原に出で、折れて利根川を渡りて常陸に入り、霞ヶ浦の西岸に沿ひ土浦に至る、土浦は人口凡一万一千、陸は東京千住に續ける水戸街道に當り、水は霞浦を通ふ小汽船の碇泊地となり、市況盛なり、土浦より筑波山を横に見て石岡を過ぎ水戸に入る、東京上野の北なる田端より鐵路分岐し水戸を経て平に通ず、東京水戸間は四時卅分程なり。

水戸市は那珂川に臨み河口なる湊磯濱を距ること三里に位す、人口三万一千餘

常陸一圓と下總の三郡とを管する茨城縣廳あり、徳川侯の舊城地にして弘道館
偕樂園今尙存せり、木綿、烟草、砥石、寒水石を物産とす。

水戸市より北に通ずる街道は即ち奥州濱街道にして太田は其近傍の商地なり、
水戸を發する水戸鐵道により友部笠間下館を経て、一たび下總の結城(紬の產地)
を過ぎ又下野の小山に出づ。

小山より兩毛鐵道に移り、栃木佐野足利を経て上野の桐生に至る途に佐野を横
ぎりて越名より葛生に通ずる鐵道あり近傍滿庵鑛山あり、足利は織物を以て名
高く、桐生も亦織物を以て名高し、桐生より赤城山を横に見、紬に名ある伊勢崎を
經て前橋に至る、水戸よりこゝに約六時間を要す。

前橋市 は利根川に臨み高崎を距ること汽車凡十五分程の所
に位す、人口凡三万三千あり、上野一圓を管する群馬縣廳の所在
地にして製糸業大に行はれ市況盛なり、凡て此國は到る處繭糸
織物を産すれども就中前橋近傍を以て最も盛なりとす、鐵道は

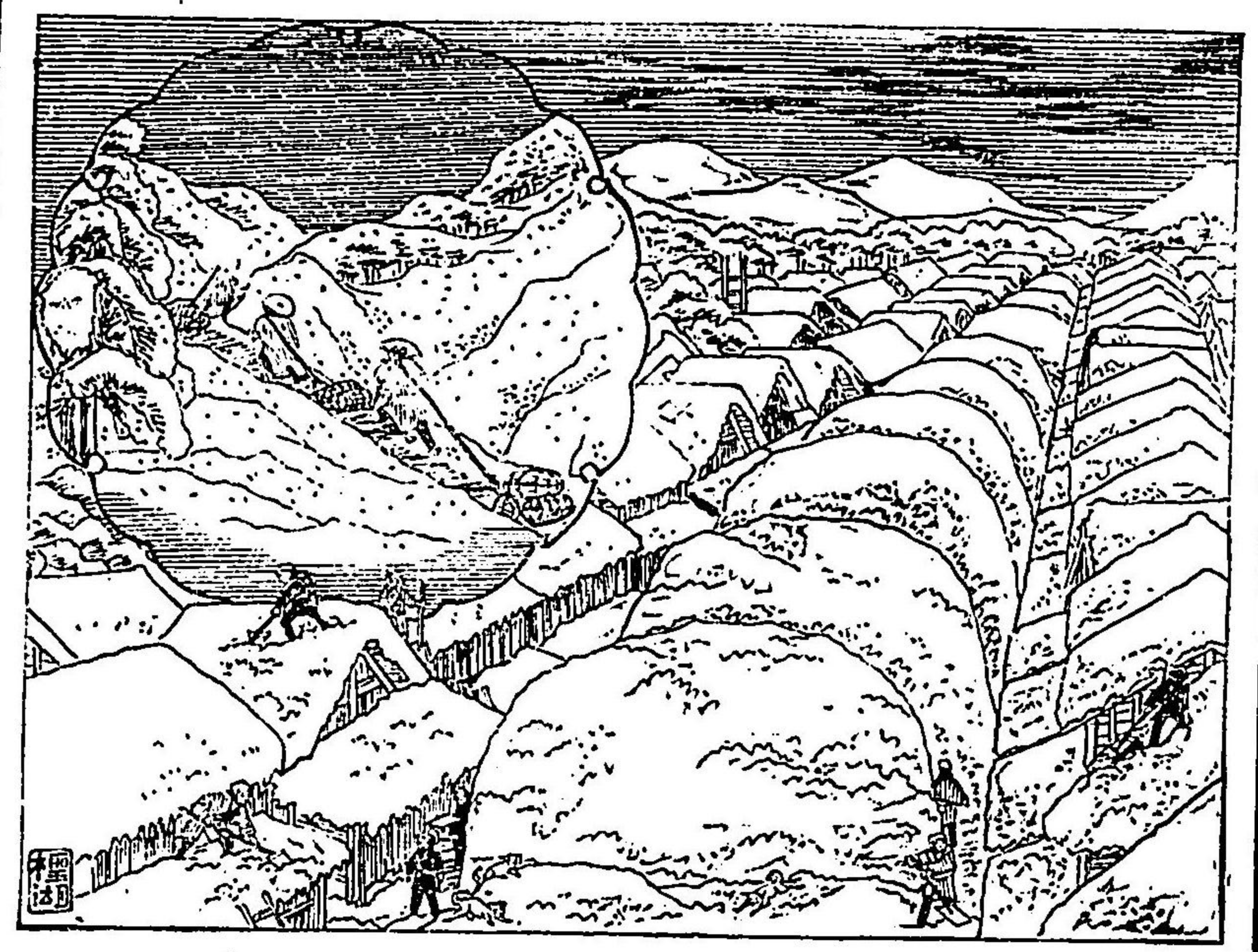
こゝより高崎に出で、直江津線に合す。

高崎より製糸を以て名高き富岡を横に見て奇景に富める妙義山の麓を廻り、礮
部より横川驛に出で碓氷峠を登る此峠は古來名高き峻阪にして今尙傾斜甚急
なれども山を穿ち隧道を通じ、汽笛一聲の間に嶺上輕井澤に達す。

輕井澤の北方に峙てる火山は名高き淺間山にして、高さ八〇八四尺、噴煙常に絶
えず、吾等は輕井澤を發し追分、小諸を経て佐久平を過ぎ上田に達す、佐久平は千
山川の谷を稱するものにして米穀の産に富む、上田は又人口凡二万一千を有す
る町にして養蠶製糸、機械の業共に盛なり、是より城捨山下を過ぎ松代を横に見
古戰場たる川中島を経て長野に達す、前橋よりこゝに至る四時間を要す。

長野市 は人口凡三万三千、信濃一圓を管する長野縣廳の所在
地にして、有名なる善光寺は此町にあり、千曲川犀川は又こゝに
至り相會して一川となり、北に流れて越後に入る信濃川即是なり、
長野の近傍は土地低く平にして善光寺平の名あり、寒暑の差

第十圖



高田の雪圖

甚しといふ。

吾等はこゝより北に進み國境を越えて越後に入る。焼山妙高山西に聳えて信濃の高妻山に連り荒川は信濃の野尻湖より流れ出で、北に走る。此川の谷は石油産地にして其脈南長野の近傍に始まり北は小千谷の近傍に至る名づけて頸城油田といふ。油田の區域を出で、尙荒川に沿ひ高田に至る。高田町は人口二万餘あり降雪特に多

きを以て聞ゆ。こゝより尙北に進みて直江津に達す。長野より約二時四十分程なり。直江津は日本海岸の要港にして又北國街道に當れり。直江津より西方糸魚川を経て國境に近づけば名高き親不知の險あれども、今は道路開けて車をも通すべし。吾等は即ち越中に赴く。

越中に入りて先づ黒部川を渡る。黒部川は源を立山(九四〇一尺)に發し樺杉等の材木運送の便を助け逆華山、劍岳の間を流れて日本海に注ぐ。黒部川の南方二里にして魚津町あり。漆器及織物の産地にして商況亦盛なり。こゝより水橋を経て富山市に入る。

富山市は古來藥種商及金銀銅鐵器の製造等を以て名あり。越中一圓を管する富山縣廳の所在地にして人口五万八千餘あり。其近傍は盛に米穀を産す。神通川は飛驒より來り市に沿うて流れて岩瀨港に至り日本海に注ぐ。八尾は富山の西南に當れる地方の商區たり。

富山を出て、西の方高岡市に至る。高岡市は人口凡三万一千、金屬及漆器を以て名産とす。射水川は飛騨より來り市の近傍を流れて伏木港に至り海に注ぐ。伏木は特別輸出港にして又能登に至る街道に當れり。能登に至るにはこゝより針に名高き氷見を過ぎ能登の二ノ宮に行くなり。二ノ宮よりは滿庵の産地七尾港を経て漆器と製鹽を産する輪島(人口一万餘)に至るべく或は羽咋に至るべし。高岡市を出で源平の古戰場俱利伽羅峠を超えて加賀に入り、河北潟の東岸に沿ひ金澤に達す。

金澤市 は犀川に臨み西北二里を隔て、金石港を控へ前田侯の舊城地なり、人口凡九万、加賀能登を管する石川縣廳、第三師團に屬する第六旅團の營所及第四高等學校あり、市民は商工の業を勉め絹織、象眼細工、陶器、銅器等名高きものを出だす。

金澤を出て海岸に沿うて進むに海岸の屈曲極めて少し、手取川を渡る手取川は源を白山(八八七七尺)に發す。手取川より尙南方に進み、陶器と木綿とを産する小

松に出づ、安宅川其傍を流る、此川の上流には銅山甚多し、古の安宅關は又此川の下流なりしも今は海中凡一里の水底に沈めりといふ、小松より大聖寺を経て越前に入り丸岡に達す。

丸岡より又九頭龍川を渡り福井市に至る。

福井市 は足羽川に跨り人口凡四万四千あり、越前若狹を管する福井縣廳の所在地にして松平侯の舊城地なり、又古、北ノ庄と稱し柴田勝家の居城たり、足羽川は九頭龍川、日野川を合せ北に流れて海に注ぐ、其河口に阪井港あり。

九頭龍川のほとりなる藤島神社は南朝の忠臣新田義貞公を祭り其上流なる大野は土井子の舊城地なり、福井を出で、鯖江を過ぎ武生に至る。武生は蚊帳及鳥子紙の製造を以て聞ゆ。これより直ちに南に進めば近江に至るべき本街道となる。吾等は方向を西南に取りて進み木芽嶺の新道に従ひ金ヶ崎に至る。此地は古城趾のある所にして金崎宮には後醍醐の皇子尊良恒貞二親王を奉祀せり。汽車

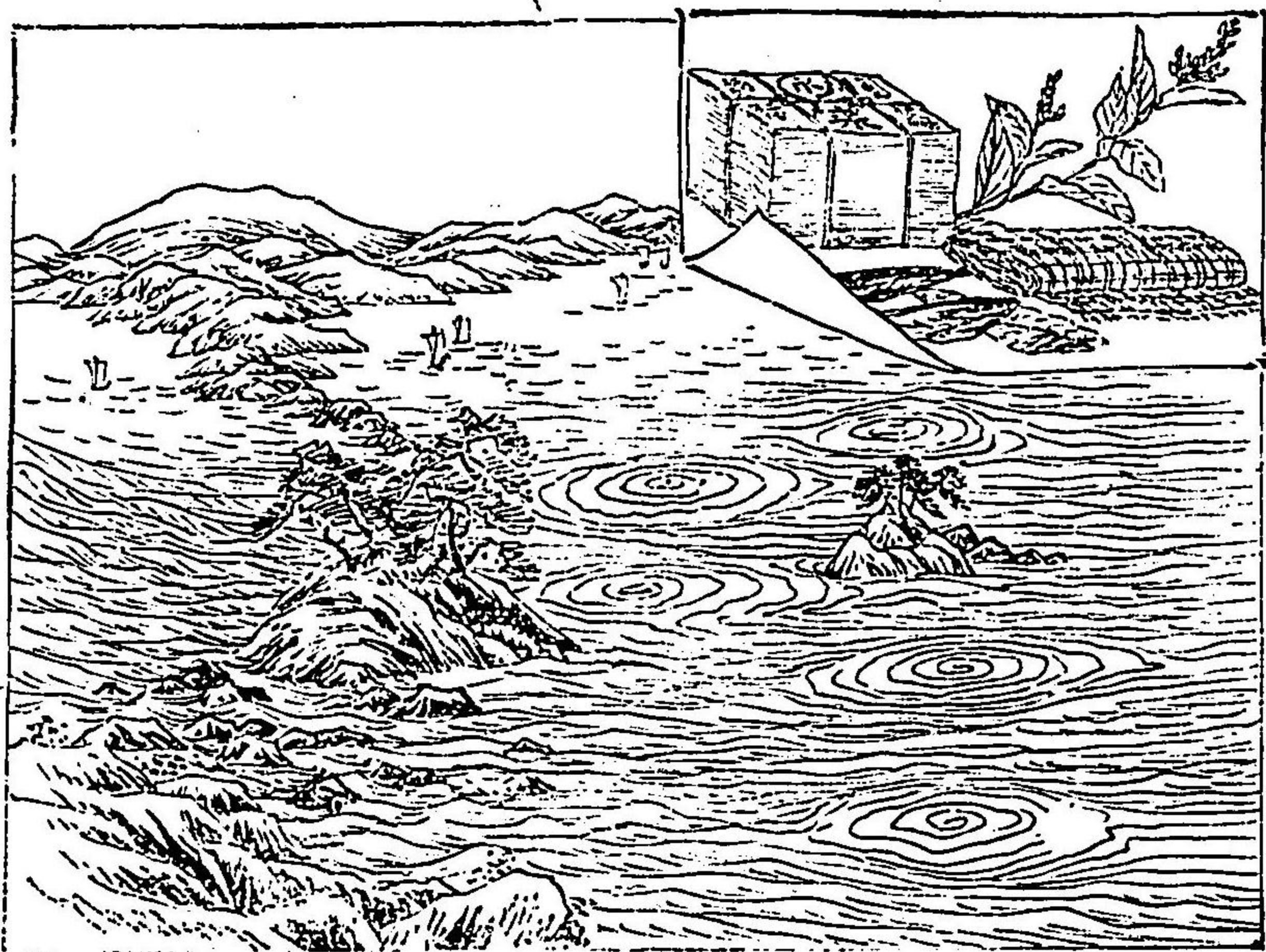
は又こゝを發して京都に向ふ、吾等は之に乗り敦賀を過ぐ敦賀は金崎と町續きなり、灣内は水深く北國第一の要港にして若狹塗の産地小濱とは海陸の便あり。町の東方に氣比神社あり、仲哀天皇神功皇后等を奉祀せる所なり、鐵路は福井より敦賀に至り敦賀より柳ヶ瀬の長隧道を過ぎて近江に入り、又京都を経て大阪に通ず、福井より京都に至る汽車時間は凡そ八時半を要す。

第九 大阪より淡路を経て四國を廻る

大阪を發し、舟にて淡路の岩屋に渡り之より南に進むに、平地は少けれども地味凡て肥むて善く米穀に適す、且製紙製糸の業等盛にして粗陶器類をも産す、人口も亦密なり、洲本由良は大阪灣に臨める良港にして紀淡海峡は國防上必要なる海峡なり。

吾等は淡路の福良より鳴門海峡の前面を横ぎりて阿波の撫養に達す、鳴門海峡は潮流甚急にして岩礁に激し因て渦をなして燕々鳴り渡り舟行甚危険なり、撫養は齋田鹽の産地にして人口凡一万八千あり、吾等はこゝより吉野河口の徳嶋に至る。

第十圖



阿波の鳴門

徳島市 は蜂須賀侯の舊城地にして今、阿波一圓を管する徳島縣廳の所在地なり、人口凡六万あり、水陸共に運輸の便あるにより商業頗る盛なり。此地の織織は夙に名高し。

吉野川は源を土佐伊豫の山間に發し全長四十一里、徳島に至り海に注ぐ、上流劍山地方の良材薪炭の類は専ら此河に頼りて市場に出づ、又其

の谷は地味肥えて米穀菓實煙草等によろしく殊に最も藍に適す、脇町貞光池田等は此川の岸にありて徳島より讃岐或は土佐に通ずる路に當れり、吾等は徳島より製鹽に名ある小松島に出で那賀川を渡りて富岡に至る、富岡は亦製鹽地なり、那賀川は源を劍山(七三九二尺)に發するものなり、吾等は富岡より尙海岸に沿うて進み海部川を渡りて漸く土佐の國に入る。

土佐に入りて室戸崎を廻り、土佐灣に沿うて安藝赤岡を過ぎ、物部川を渡りて高知に達す。土佐灣は室戸岬と蹉陀岬との間をいふものにして天武天皇即位十三年四國の地大に震ひ土佐の南部一帯陥落して以て此灣を成せるなりといふ。

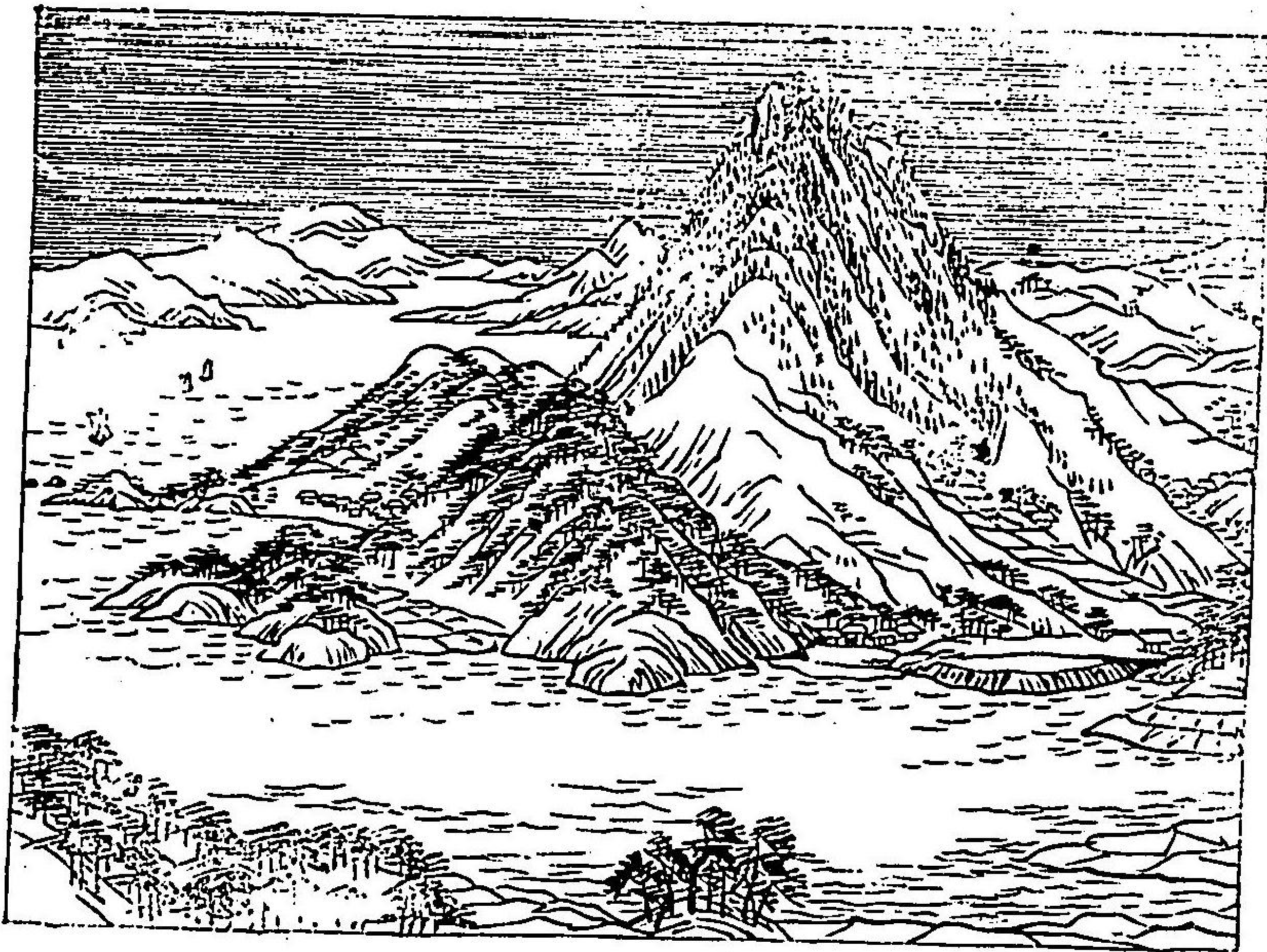
高知市 は西北雪光山を望み南は海岸に近く浦戸港に枕む。北は川口を経て伊豫の川之江に通じ、西は伊野佐川を経て伊豫の松山に至るを得べし、人口凡三万七千あり、土佐一圓を管する高知縣廳の所在地にして山内侯の舊城地たり、氣候温暖にして夏は殊に雨多し、此地の物産紙鯉節は夙に名高し。

此國內地は地味肥えて米穀、甘蔗、烟草、藍綿等に適し尙製茶、樟腦製造等の業盛なり。高知より伊野に出で仁淀川を渡れば此川の谷に沿ひて伊豫の久萬に到るの道あれども、吾等は分れて南方に進み須崎中村を過ぎて渡川を渡り、宿毛より國境を超ぬて伊豫に入る。

伊豫に入りて海岸の屈曲殊に甚しきを見る、宇和島灣に至ればこゝに一良港あり、宇和島といふ町は伊達侯の舊城地にして今は織物及紙を製出し商業亦盛なり、こゝより吉森山を横に見て卯ノ町八幡濱を過ぎ、大洲に至りて肱川を渡り、湊町より重信川を渡りて松山市に入る、肱川の兩岸には蒲菴を産する所多し。

松山市 は久松氏の舊城地にして伊豫一圓を管する愛媛縣廳及第五師團に屬する第十旅團の營所あり、人口凡三万二千、松山編を産す、市の東北に當りて道後の温泉あり、又市の西北に當りて三津濱高濱の良港あり、而して道後高濱を連ぬる鐵道は此市を過ぐるを以て市況從て盛なり。

第三十圖



五劍山の圖

松山を出で、石槌山(七〇七〇尺)と高繩山(三五九七尺)との間なる峠を越へ西條に至る。今治は西城の西北に當れる商業地なり、西條の東南には又市川の安賀母尼鑛山、別子の銅山あり、吾等は西條を出で、高知街道と川ノ江に會し讚岐に入り、觀音寺を経て多度津に達す。多度津より東南なる鐵道に従うて進めば琴平神社に至るを得べし、吾等は多度津より汽車に乗り、東北に向うて

丸龜に至る、丸龜は京極氏の舊城地にして、第五師團に屬する第十二聯隊の營所あり、こゝより飯野山を横に見て高松市に達す、

高松市 は人口凡三万四千あり、讚岐一圓を管する香川縣廳の所在地にして、水陸の便よろしきにより商業頗る盛なり、五劍山は市の東北に聳ゆ奇景たり。

此國大河なけれども數多の小川あり、其の谷は大概地味肥えて米穀、甘蔗、綿、藍等に適す、海岸には又製鹽の業盛なり、屋島の古戰場より志度を廻り復た高松に還りて船に乗り、大阪に向は、途に醤油製造に名高き小豆島を見る、其の土庄は高松より十二海里を隔つ、

第十 大阪より紀伊半島を廻りて東京に至る

復た大阪を發し、浪速鐵道によりて河内に入り、牧方に達す、牧方の東方なる飯盛山には楠正行公を祭れる四條畷神社ありて、其麓は古の四條畷なり、牧方より山城に入りて男山の麓なる八幡を過ぎ淀に至る、こゝより巨椋沼を横

に見て伏見に入る、巨椋沼は周圍四里餘あり淀川の防水池たり、伏見は京都^都を距る僅に二里、又大阪及奈良に通ずる要路に當り、人口凡一万八千あり、伏見より南の方茶に名高き宇治を経て平等院黄檗山等を觀、それより木津川の谷に沿ひ奈良に向ふ、途に木津より分れて尙木津川を溯れば、元弘の歴史に名高き笠置山及大和月ヶ瀬の梅林あり、直ちに奈良に入る、京都よりこゝに至る凡十一里あり、奈良は大阪を距る汽車時凡二時間の處に位し、人口凡二万七千、元明天皇より七代八十餘年の帝都にして世に南都とも稱す、大和一圓を管する奈良縣廳の所在地にして又帝國博物館を置く、奈良晒及奈良漬は此地の名産なり、近年大阪と鐵道の便開けてより市況大に振ふ、東大寺の大佛、春日社等あり、吾等は奈良より汽車に乗り郡山(人口凡一万三千)を過ぎ王子に至る、こゝにて鐵道南に分れて高田の法隆寺を經、櫻井に達するものあり、途に畝傍の山陵、桓原神宮に詣で又多武峰なる淡山神社(祭神藤原鎌足公)初瀬觀音等に至り、且五條を經て紀伊に入るの便あり、されども吾等は王子より大和川の谷に沿ひ、生駒山を横に見て河内に下り、復大阪湊町に入る、大和川の谷は地味綿によろしく、河内木綿

の名從て世に知らる、狹山池は、崇神天皇の御代に穿ちし池にして河内の南部にあり、大和川と共に灌漑の便をなす、又狹山池の東方に聳ゆる金剛山(四九〇四尺)は楠公と共に其名高し、是より再び大阪を發し、大和川の下流を渡りて和泉國堺市に達す、大阪よりこゝに至る三十分を要す、

堺市 は人口凡四万八千、舊時は大阪灣中の要港なり、しも港内漸く埋もりて碇泊に便ならず、然れども尙富者多く鐵器及段通類の製造日に盛なり、

堺より海岸に沿ひ南方に進みて岸和田に至る、岸和田は地方の商區なり、こゝより山手に向ひ國境を越えて紀伊に入り、紀ノ川を渡りて和歌山に出づ、

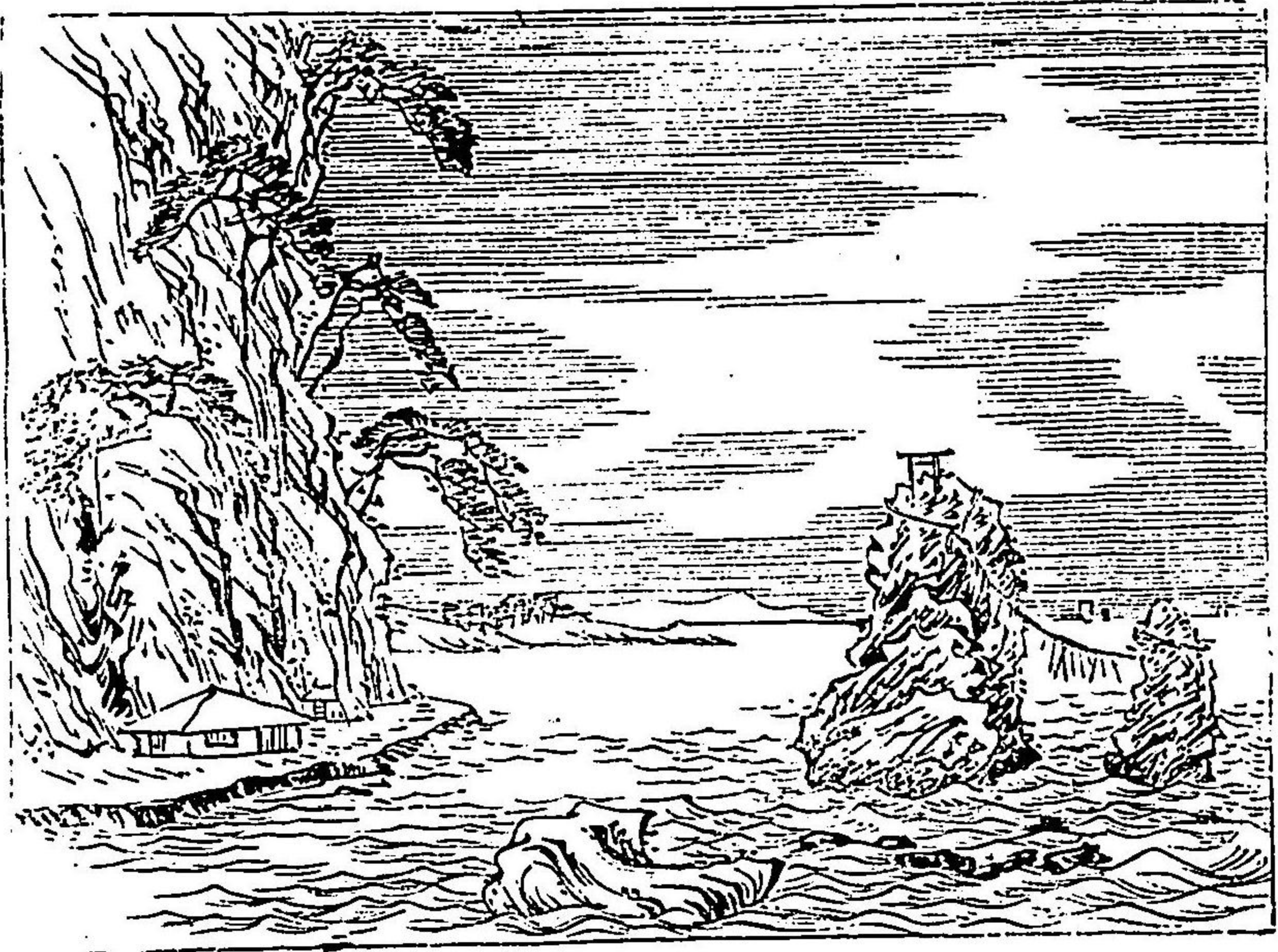
和歌山市 は紀ノ川の河口に近く和歌浦に接す、徳川侯の舊城地にして紀伊の大部を管する和歌山縣廳の所在地たり、水陸の便よろしく商況頗盛なり、綿織及綿フランネルを出たす、

紀ノ川は其上流を吉野川といひ大和より来る、其長さ三十餘里、其下流は兩岸極めて平にして地味肥々善く米穀に適せり、中流の左岸即國境に近き所に峙てる峯あり世に高野山といふ、金剛峯寺其の中に在り。

吾等は和歌山を發し、漆器を産する黒江を過ぎ、有田川を渡りて湯淺御坊を經、日高川を渡りて田邊に至る、此間山には良材及蜜柑を産する所多し、田邊より又海岸に沿ひ富田川、日置川を渡り大塔峰を横に見て串本に至る、串本の南なる沙崎は實に紀伊半島の最南端なり、吾等はこゝより那智深と熊野社とに名高き那智山を横に見て新宮に至る、人口一万二千餘、水野氏の舊城地にして熊野川に臨めり、熊野川は大和の吉野郡より來り三十五里を流れたるものにして上流は北山川と十津川とに分る、十津川は先年の水害と維新の歴史とに稍聞えたる所にして又地藏岳、釋迦岳、大峯山、上岳等の木材を運ぶに供せらる、之を溯れば一たび五條に出で櫻花に名高き吉野を經て伊勢に至ることを得べし、吾等は又新宮より熊野川を渡りて尾鷲に向ひ大臺原山を横に見て伊勢に入る。

伊勢に入りて宮川の谷に沿ひ宇治山田町に出づ、宇治山田は人口凡三万あり、伊

第十四圖



二見浦

勢神宮あるを以て殊に盛なり、春慶塗は此地の名産とす、若しこゝより朝熊山の麓を廻り志摩に入れば其の良港鳥羽に至るを得べし、又宇治山田の海岸は二見ノ浦といひ靈地となす、即ち是等を經廻りて宇治山田より又汽車に乗り、楠田川を渡りて松坂を過ぎ、又雲出川を渡り津に達す、此の間河谷は地味皆米穀によるしく、又菜種油を産す、津は又安濃津といふ、人口三万あり、藤堂伯の舊城地にし

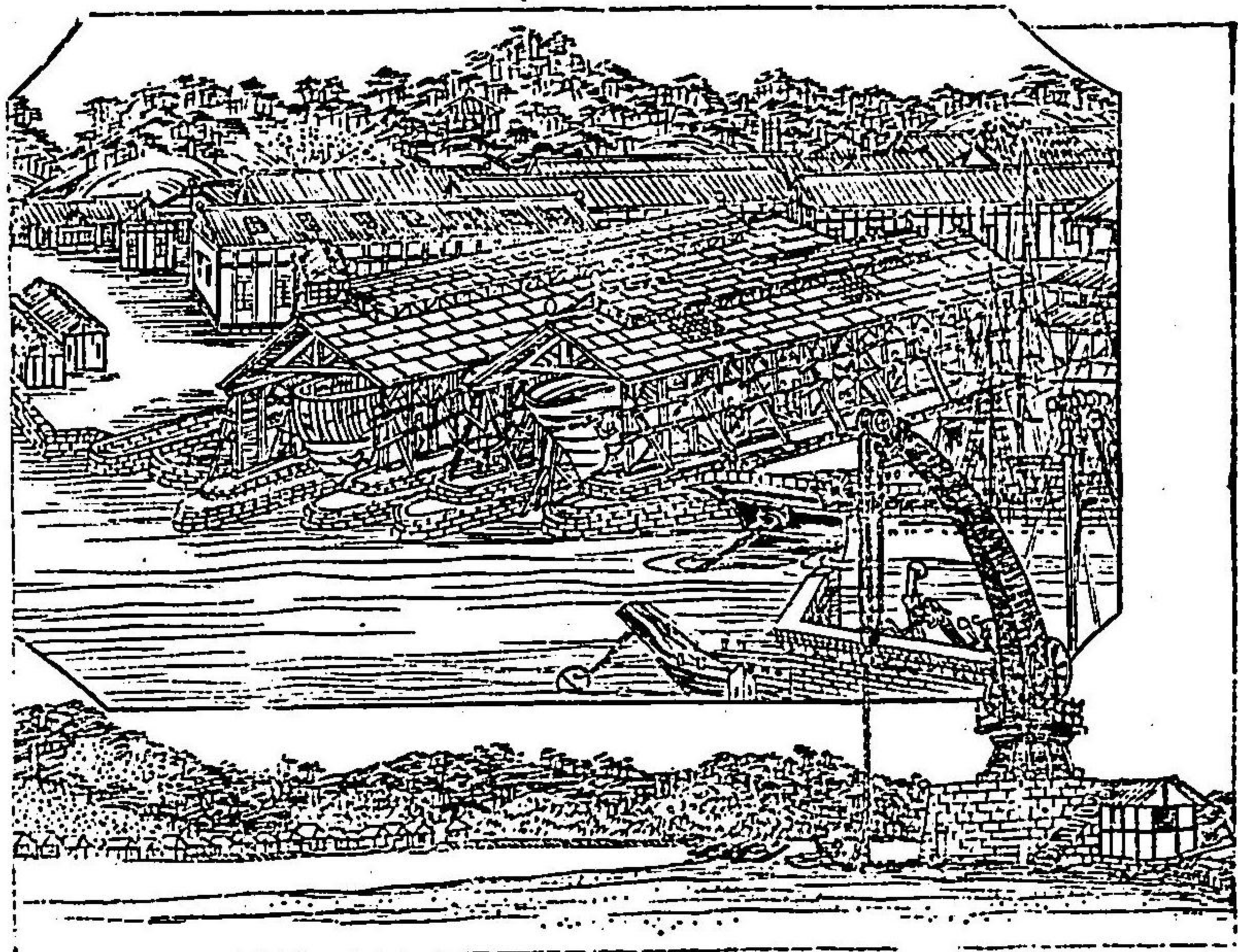
て今伊勢伊賀志摩と紀伊の二郡とを管する三重縣廳の所在地たり、汽車はこより更に龜山に至り草津四日市間の鐵道に會す、依りて之に乗りて龜山に出で又轉じて四日市に至る、四日市町は伊勢海の良港にして市街の人口二万餘あり水陸の便宜しく特別輸出港たり、又洋紙、綿糸等の製造の業盛なり、こより汽車に乗りて尙東北に進み万古焼の産地桑名を経て揖斐川木曾川の大鐵橋を渡り、尾張の前ヶ須より名古屋に入り、東海道鐵道によりて東京に還る。

第十一 東京灣を出て、北海道に向ふ

東京灣の小汽船は主に木更津、加知山、北條、館山等を往來す、吾等は此便により房總半島の鹿野山、鋸山、清澄山等に登りたる後、程を横濱に發して北海道函館に向ふ。

船は品川、六郷、本牧の燈臺を後にし、横須賀軍港を横に見て、觀音崎燈臺の下を廻る、仰げば砲臺、こゝに坐を占めて對岸富津と共に東京灣の防備をなせり、觀音崎の西に入り込みたる港は即浦賀にしてそれより南に延びたるは三崎なり、三崎の劍崎燈臺を横に見て、房總半島の南に出で野島崎燈臺を見て北に廻はり、犬吠

第十 五 圖



横 須 賀 造 船 所

崎の燈臺を目標として九十九里濱の沖を進む、此邊は鰯の漁獲殊に夥し。

犬吠岬を北に廻ればこゝに利根川の河口あり、銚子町あり、銚子町は人口一万六千餘、縮布を産す、其の北は海水灣入して鹿島洋をなす、是より船は犬吠岬の沖を離れて東北に進み、陸前黒崎の東なる金華山の燈臺を、認めて船首を西北に轉じ、仙臺灣に入りて荻ノ濱に達す、横濱よりこゝに至る二百八十六海里なり、荻ノ濱の西北なる燈臺

は北上川の河口を示すものにして石ノ巻港こゝに在り。
 船は萩ノ濱を出で、金華山沖を廻り、出入多き陸中の海岸を横に見て北に進み、九十海里にして陸中釜石港に入る。これより又北方三十二海里を行きて宮古港あり、總べて此近海は北より來れる寒流と南より來れる暖流との衝突により霧を起すこと多く、航海者の警戒する所なり。宮古よりは稍方向を西北に轉じ行くこと七十五海里にして鮫港に至る。これより北方尻屋岬に向ひ進んでその燈臺を廻り西に轉じて津輕海峡に入り鹽首岬の燈臺を横に見て茂邊地燈臺に近づき更に箱館の燈船に面して箱館港に投錨す。鮫港よりこゝに至る海路百九海里、横濱より直航五百二十九海里なり、近海亦霧多し。
 吾等は上陸を後にして先づ北海道の海岸を廻らん。船は箱館を發し鹽首惠山の兩燈臺を後にし噴火灣に向ふ。此近海鳥賊、鮑を産すること夥し。噴火灣の口には東西各一箇の良港あり、相距ると二十二海里西の港を森といふ。東の港は即ち室蘭にして軍港指定地にして特別輸出港たり。箱館より海路各七十六海里を隔つ。船はこれより室蘭を發し、出入少き膽振、日高海岸の沖を進み、浦河、幌泉の燈臺を

横に見て襟裳岬の燈臺より東北に廻り、屈曲少き十勝海岸の沖を行く。此邊は昆布及鮭を産す、かくて特別輸出港たる釧路港に入る。室蘭よりこゝに至る凡二百海里なり。釧路港より東方三十三里の所に厚岸灣あり。大黒島灣口にありて燈臺を設け航海者に便す。厚岸の東方二十六海里の所に又柳町の港あり。此二港に寄らずして釧路港より直ちに東北に向ひ、落石、花咲二燈臺の沖を行き、納沙布岬を廻りて根室港に達す。辨天島の燈臺其前に在りて之れが目標たり。根室は室蘭を距ること二百八十七海里、箱館を距ること二百九十五海里にして又千島列島に通ずる船舶の發着場あり。
 根室より北に進むこと二十八海里にして國後嶋の泊港に入り、又出で、根室海峡を過ぎオコック海に至る。こゝより知床岬を廻れば海水變入して遠く西北に及ぶ。吾等は灣中の良港たる網走、紋別を経て宗谷岬に向ふ。總べて此近海は鮭、鯨に富む。宗谷岬の北を廻れば岬の西に一小灣を見る。稚内港其内にあり。これより禮文島の船泊港、利尻島の石神港及び焼尻島を経て天鹽の増毛港に至る。此間一體鯨、昆布の最も能く産する所たり。増毛より出で、海水の深く變入す

るを見る是即ち小樽灣なり、行くこと四十九海里にして同灣内の小樽港に入る。こゝより又箱館に還らんため船を進めて神威崎燈臺の西に廻り、壽都港に寄るとなく、壽都灣中に突出せる辨慶崎の燈臺を横に見て、北海道本島と奥尻島との間を行く、此邊亦鯨の漁場多し、かくて江差港の沖に進み、辨天島の燈臺より方向を東に轉じ、白神崎の燈臺を横に見て津輕海峡に入り箱館港に還る、小樽よりこゝに至る二百二十一海里なり。

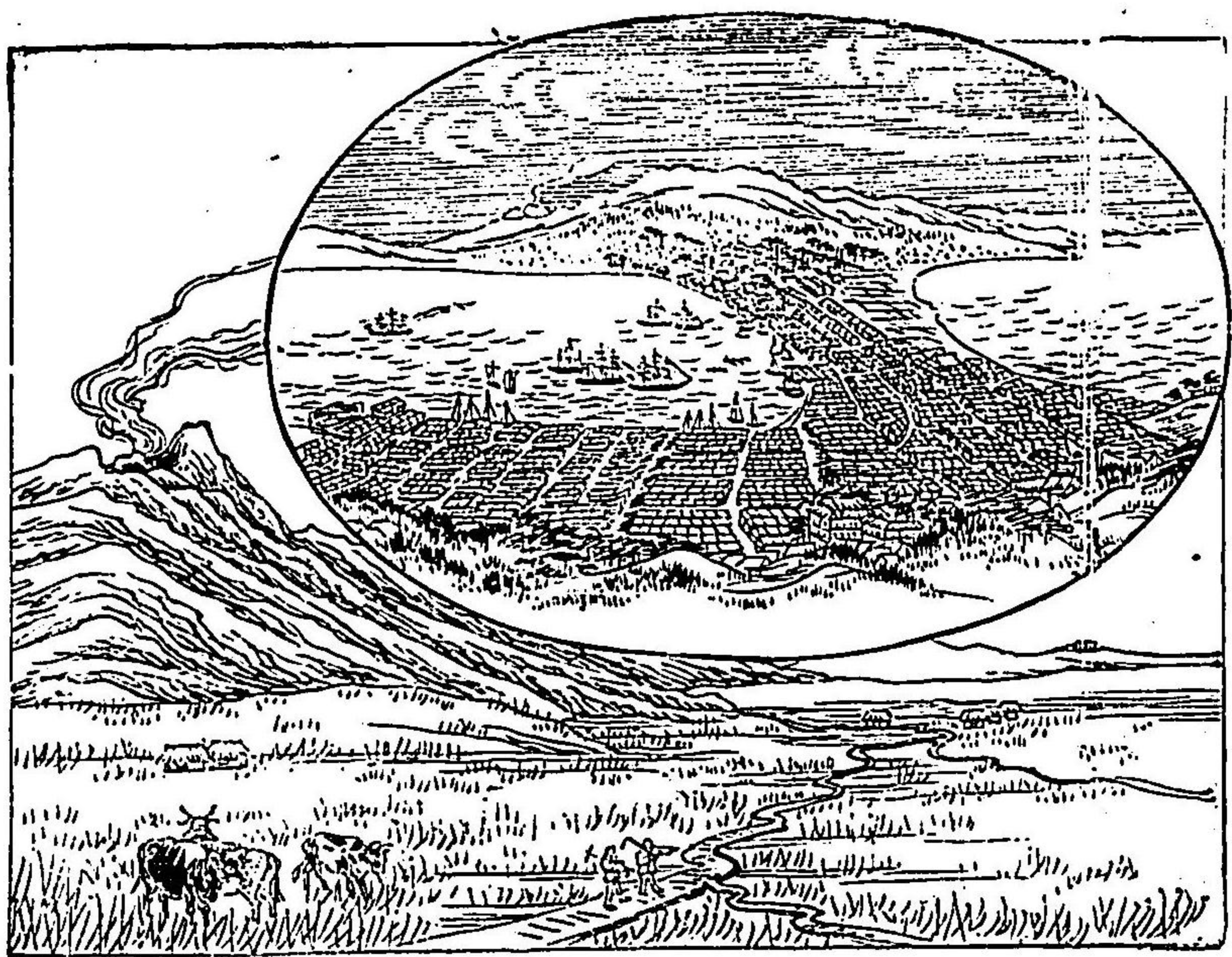
第十二 北海道本島内地を一周す

先づ函館に上陸す

箱館 は人口凡六万六千あり、五港の一にして青森を距ること五十九海里の所にあり、水陸の便よろしきを以て商況盛なり、五稜廓は箱館の北方一里半にあり、維新の歴史に知られたる所にして今製氷を出だす。

箱館の東方に恵山火山あり硫黄を産す、其脈引きて大川岳、駒ヶ岳に及ぶ、吾等は

第十 六 圖



箱館前山の圖

箱館を發し、牧場に名高き七飯を経て森に至り、是より噴火灣に沿うて有珠岳の南なる有珠に出づ、其間の地は地味よろしといふべからず、有珠の東に洞爺湖より流れ来る河流あり、之を渡りて室蘭に出で汽車に乗りて東北に進み、白老山、樽前山を横に見て苦小牧に至る、鐵道はこゝより石狩の追分に出で諸所の炭山に通ず、別路又千歳の平野を横ぎりて直ちに札幌に至るものあり、千歳の平野

とは即ち千歳川の谷にして、千歳川は支笏湖より發するものなり。吾等は道を異にして苦小牧より東南に進み、日高に入りて浦河、幌泉を過ぎ、又東北に轉じて十勝に入る。日高は土地牧場に適し、新冠の如き殊に名あり、又「アイヌ」人の住めるもの多し。

十勝に入りて又海岸に沿ひ、東北に進みて大津に至り、十勝川に會す。十勝川は其源數多あり、其一は十勝岳の近傍に發し、然別湖より來れる然別川を合せ、石狩岳の近傍音更山より來れる音更川と合し、更に利別を経て來れる利別川を合せ、東南に流れて海岸に近づき、又二分して東西二川となり、海に注ぐものにして、此川の谷は實に北海道大原野の一に加へらる。吾等はこゝより尙東北に進みて釧路國釧路に入る。

釧路は釧路湖より來れる釧路川、阿寒湖より來れる阿寒川の相合して海に注げる河口に當り、硫黄の特別輸出港たり、其硫黄は雄阿寒山及跡佐登より産すれども、特に跡佐登を最も盛なりとす、即之れがために跡佐登標茶間に鐵道を敷き、標茶より船にて之を釧路に送るものなり。吾等はこゝより厚岸を経て根室國根室

に達す。

根室は人口凡一万六千あり、地方海産物の取引盛なる所なり。こゝを出で、樞逆沼の西岸を廻り、北の方標津に至り、標津川を渡り、斜里岳(五〇四九尺)に向ふ、但標津より海岸に沿ひ、知床岬を廻るものは良牛(五四三二尺)の硫黄山を見ることが得べし、斜里岳の北の坂路に向ふものは其坂路を下りて北見の斜里に出づ。

斜里より網走に出で、網走湖の岸を行き、熊取湖の北を廻り、常呂川を渡り、猿間湖の北岸を進む、猿間湖は周回十五里、蠣を産するに名あり、こゝより湧別川を越えて紋別に至る。総べて此國の地味は悪しきにからざれども、温度低く、雪多く、従て人の住むもの少し、紋別より尙西北に向ひ、宗谷に出づれば、氣温却て稍暖なり、蓋し北見の東南部の却て寒きは寒流のため、岸を洗はるゝがためならむ。宗谷よりは宗谷海峡を隔て、樺太を望むべし、宗谷より稚内を経て天鹽國天鹽に入る。天鹽は天鹽川の河口にあり、天鹽川は源を天鹽岳の近傍に發し、北に流れてこゝに注ぐ、其の谷は又北海道大原野の一に加へらる。天鹽を發して、留崩増毛を過ぎ、雄冬山(三三〇〇尺)の山道を越えて石狩に至るを得べく、又増毛より東方に分れ

て山脈を越ゆれば石狩川の支流なる雨龍川の谷に至るを得べし。吾等は石狩國の海岸に沿ひ、南に進みて石狩河口の石狩に達す、石狩河は全長百六十七里ありと云ふ、我國第一の大河にして源を石狩岳に發し、寒氣強き上川御料地の野を流れ、カムイコタンの急流となり、雨龍川と會して稍緩流となり、それより空地川、江別川、豊平川等を合せて海に入る、其の谷は地味よろしく、北海道大原野の一たり、川よりは又鮭を産すること夥し、かくて吾等は石狩より南の方六里なる札幌に至る。

札幌は豊平川に跨り石狩國の西南部に位す、人口凡二万八千あり、北海道一圓を管する北海道廳の所在地にして又屯田兵司令部、札幌農學校の設あり、砂糖製麻及一般の農業盛なり。

炭鐵鐵道は後志國手宮より小樽を経て札幌に至り、それより岩見澤を経て空地、太歌志内、郁春別、幌内、夕張等の諸炭山に通ず、吾等は即ち此便により札幌を出で、小樽に至る、汽車時凡一時四十五分を要す。

小樽は人口凡四万あり、室蘭より汽車時九時四十分程の所にあり、本道中、箱館に

亞げる要港にして特別輸出港たり、こゝより海岸に沿うて神威崎を廻ることを止め、ボンシカリベツ銀山の傍を過ぎて、稻穂崎より岩内に下る、それより更に海岸に沿ひ、雷電岳の下を過ぎて後志川の河口、磯谷に出づ、後志川は源を膽振國のマガカリヌプリに發し、後志に入りて海に注ぐものなり、吾等は磯谷より歌葉を経て壽都に至る、壽都よりは尙海岸を追ひ、久遠を過ぎて渡島國に入る、遊樂部岳（四〇九二尺）は國境に聳ゆる高山にして、上古丹の滿俺鐵山は其西麓に當れり。渡島國に入りて江差に達す、江差は人口凡一万五千あり、箱館を距ること陸路十九里、海路四十九海里にして、海路は常に汽船の往來あり、尙海岸に沿ひ千軒岳（三九九尺）の南に廻りて福山に出づ、福山は舊名を松前といひ、曾て松前藩の城下たり、今人口一万一千餘あり、こゝより陸路二十九里にして箱館に達す。

第十三 日本海々岸及九州の海岸に沿うて航海す

船は箱館港を發して又白神崎龍飛岬の間を離れ、こゝに日本海に出づ、海水の岩木川谷に向うて彎入せる所には鱒ヶ澤の港あり、能代川谷に向うて彎入せる所には能代港あり、男鹿半島の南方に廻りて土崎港に寄る、箱館よりこゝに百五十

第七十圖



佐渡鑛山

一海里なり、男鹿半島の船越は亦船を泊するに足る。土崎より西南富山灣に至る間は海岸の屈曲甚少し、土崎より五十海里を行き、飛島を横に観て酒田港に寄り再び出で、粟生島の沖を廻り六十三海里にして又新潟港に入る。總べて此近海は冬時西北風を受け航行困難なり。新潟の東方二十六海里を隔て、岩船港あり、西方三十二海里を隔て、佐渡の夷港あり。

佐渡は有名なる金銀鑛山のある所にして、金北山三八二八尺は夷港の西に聳ゆ。相川は金北山の西南麓に當り新潟縣に屬する佐渡島廳の所在地にして、人口一万五千餘あり、近傍には又 順徳天皇の御陵あり、小木港は又島の南岸にありて越後の出雲崎を距ること二十四海里、船を泊するに足る。此國の沿海は鰯鮑等其他漁産に富む。

吾等は新潟を出で、又六十三海里を航し、直江津港に寄る。こゝより伏木港に達するに是又六十三海里なり。

伏木の東岩瀬港も亦船を泊すべく又伏木灣の西方に彎入する所即ち七尾入江は大艦巨船をも容るべし、伏木の燈臺を後に見て珠洲岬の沖に出で、綠剛崎の燈臺を横に見て方向を西南に轉ず、此近邊暗礁甚多し、又遙に船倉島七ツ島を西北に望むべし。

進みて加賀の沖に至るに、此邊鯛鯉鯖鮠等の漁産多けれども海底遠淺にして良港に乏し、かくて越前の沖に出て越前岬を廻れば西方經岬との間一大灣をなし、其灣の海岸又頗る出入して宮津舞鶴小濱敦賀の諸港をなせり、此灣は鯛の名産

所たり。立石崎燈臺を目標として進み、敦賀港に入らむ。

敦賀は伏木を距ること百九十九海里にして、金石より六十九海里、阪井より三十六海里、小濱より三十四海里、舞鶴より四十九海里、宮津より五十一海里あり。吾等は敦賀を出で、方向を西に取り、屈曲少き因幡伯耆の海岸を横に見て、伯耆國境港に入る、敦賀よりこゝに至る百四十六海里あり。

境は此地方の良港にして、隱岐の西郷を距ること五十七海里なり。

隱岐國は四大島より成り、西島中島知夫里島の三は出雲に近きを以て島前といひ、他の一を島後といふ。西郷港は其の島後にあり、日本海中の良港にして、島根縣に屬する隱岐島廳の所在地たり。西島には、後醍醐天皇の黒木の御所の跡あり、中島には、後鳥羽天皇の御火葬場あり。此國の沿海は魚類藻類の産に富み、鯛は特に名産たり。

吾等は境港を出で、地藏崎を廻り、出雲の沖を進みて石見瀨に向ふ。鷲温泉津、濱田は稍船を泊するに足る。此近海は冬季西風の強きこと北陸道に異らず、但し夏時の航海は最も安全なり。進みて長門の沖に至り、見島を後に見て角島燈臺より

南に轉じ、響洋を行きて馬關港に投錨す。境港よりこゝに至る二百三海里あり。馬關近傍の島には燈臺甚多し、之を北方に見、若松港を南方に見て西南に進み、六十海里にして博多港に至る。こゝより又出で、風浪に名高き玄界洋を行き、鳥帽子島の燈臺を横に見て、又遙に壹岐を望み、平戸の燈臺に面して平戸の瀬戸に向ふ。此近海は鯛鯔鯨等漁産多く、平戸島の近海は又鯨獵の盛なる所なり。

平戸の瀬戸を過ぐれば、鯨獵を以て最も名高き五島を遠ざかりて、彼杵半島の海岸に近づき、伊王島の燈臺を横に見て長崎港に入らむ。博多よりこゝに至る八十二海里あり。

長崎港は浦鹽斯德、朝鮮、支那及西洋諸國を往來する汽船の發着所にして、又近傍諸港と通運の便多し。五島の福江を距ること五十五海里、牛深より五十海里、富岡より四十海里、口ノ津より五十海里、三角より六十海里、嶋原より六十六海里、大牟田より八十二海里あり。吾等は長崎を發して天草洋の沖を行き、甌島の東方に出で、野間岬に向ふ。

此間阿久根港及川内川の河口は船を泊すべし、野間岬を廻りて東方に進めば開

開崎と音岬との間より灣入せる鹿兒島灣あり。吾等は船を灣内に進めて鹿兒島港に達す。長崎よりこゝに至る百六十二海里あり。

再び鹿兒島灣を發し、開聞岳を後に見て、佐多岬燈臺の沖を廻り志布志灣を横に見て日向洋に出づ。日向洋は風向により航行の困難なる所にして且海岸は良港に乏し。唯細島港ありて船を泊するに足る。細島は鹿兒島を距る百海里の所に位し。時々佐伯臼杵佐賀關等を経て大阪に到るの便船あり。

吾等は細島を發し、芹崎燈臺を横に見て豊後洋に進み、速吸海峽を過ぎて瀬戸内海に入り、双子山を目標として國東半島を廻り、周防洋を過ぎて一たび馬關に還る。

第十四 馬關より四國の沿海を廻りて東京灣に還る

馬關の周防洋に接する所の兩岸亦燈臺あり。吾等は之を横に見て東方に進み、四十海里にして三田尻港に入り、又出で、室津上ノ關の間を行き、方向を北に轉じて大島の瀬戸に向ひ、之を過ぎて尙北に進み宮島、能美島の間を行きて宇品港に達す。三田尻よりこゝに至る六十八海里あり。

宇品は又三津ヶ濱を距る三十六海里にして、其航路は吳と倉橋島の間を出で南走して陸月島の西より入るを常とす。安藝の海岸に沿うて大崎島、大三島、佐木島、因島等の燈臺を南に取り、向嶋の北なる尾ノ道港に入る。此里程五十海里あり。尾ノ道は多度津を距ること三十海里、輛は其東に位せる港なり。尾ノ道を出で輛を横に見て水嶋洋を過ぎ下津井より兒嶋半嶋の岸に沿うて岡山三番港に達す。尾ノ道よりこゝに五十六海里あり。三番より更に東に向ひ、小豆嶋の北方播磨洋を過ぎて、松尾崎の燈臺を目標とし、明石海峽より大阪灣に入り、神戸港に至れば此里程六十五海里あり。

かくて又神戸より出で、再び播磨洋を過ぎ、小豆嶋の南を行きて横に高松港を見、尙進みて多度津港に入る。神戸より八十二海里なり。多度津より西方箱崎を廻り四十海里を行きて今治港あり。それより大島今治の間を過ぎ梶取岬より西南に進みて興居島(伊豫小富士)の東、三津濱港に入る。今治より三十五海里なり。三津濱を出で、釣島燈臺を横に見、燧洋を過ぎ速吸海峽を通り、豊後洋を経て土佐沖に向ふ。豊後洋の八幡濱港、宇和島港は皆船を泊するによろし。淺婆崎燈臺よ

り東に進み蹉跎岬を廻れば即ち土佐灣なり、此近海は西南より來れる暖流のため影響を受くるもの多し、吾等は土佐灣の高知、浦戸港に入らん。

浦戸は土佐灣の要港にして須崎港を距る二十七海里、蹉跎岬の清水港を距る凡七十海里あり、土佐灣は鯉珊瑚を産すること夥しく鯨獵も亦甚盛なり、こゝを發し龍頭崎燈臺を後に見て室戸岬を廻り、更に浦生田岬を廻りて徳島に至る、高知より徳島まで百八海里あり。

徳島より紀淡海峽に向ひ、友島燈臺を横に見て大阪灣に入り再び神戸港に至る、友島には又堅固の砲臺あり防備極めて嚴なり、神戸港は徳島を距る五十一海里、大阪を距る十四海里なり。

神戸より大阪に寄り、安治川口燈臺、木津川口燈臺、堺港の燈臺を横に見て和泉の海岸に沿ひ、再び紀伊海峽を出で、紀州洋に向ふ、こゝに突出せるは潮岬にして其東に大島あり、共に燈臺を設けて航路を警む、紀州洋は又風浪高き所にして航海者の注意する所なれども、海産は甚多く鯨獵亦盛なり。

かくて志摩國の沖を廻り、燈明崎燈臺、菅島燈臺を横に見て伊勢内海に向ふ、志摩

は海岸の出入甚多く、的矢港、鳥羽港、皆船を泊するに足る、伊勢海に入りて四日市に達す、半田に至るには師崎に出で、東に廻るを要す。

四日市は横濱との間に定期船の往來あり、吾等は之に乗り、伊良胡崎燈臺を横に見て遠州洋に出づ、此近海は遠淺にして又風浪常に高し、船、遠州洋を行きて横に御前崎の燈臺を見るに至り、北方深く海水の變入せる所を見る、是即ち駿河灣にして清水港のある所なり。

吾等は直進して石廊崎燈臺と神子元島燈臺との間を行き、下田港を横に見て相模洋に出で、大島の北を進み城ヶ崎燈臺を横に取り、劔崎燈臺の東より觀音崎を廻りて東京灣に達す。

第十五 對外諸島

吾等は略は旅行を終れり、こゝに圖を披きて我國の地形を見るに亞細亞の大陸と相離れて本州四國九州北海道本島の四大島あり、而してこれより大陸に通ずる所は各島嶼連續して恰も飛石の狀をなせり、即ち北海道本島とカムチャツカとの間には千島列島あり、九州と支那南部との間には薩隅諸島、琉球諸島及臺灣

島、澎湖諸島等あり、又九州と朝鮮との間には壹岐對馬の諸島あるが如し、斯の如く外國に對せる諸島を名づけて假りにこゝに對外諸島と稱すべし、又伊豆七島及小笠原島は本州より太平洋諸島に對する列島にして、佐渡隱岐は日本海中の鎮たるを以て此類に入るべきものなり。

千島列島 は北海道根室國の東北なる國後島より最東の占守島の間列れる三十餘島の總稱にして、總面積四國と略同じ、ホツスル海峽によりて之を二部に分つを得べし、國後、色丹、擇捉、得撫は南部に屬し、島内概ね樹木に富み、又船を泊すべき港あり、北部に屬するものは新知、捨子小丹、チン子コタン、パラモシリ、占守、アライト等にして、概ね樹木に乏しく、海岸は寒流に洗はれ、氣候寒冽なれども沿海は海獸魚類藻類の産實に夥し、タスカロラの海底は列島の東方に當り海洋の最も深き所と稱せらる。

國後の泊色丹のノトロ、擇捉の紗那、得撫の小船は船を泊するに足る、又國後擇捉

には硫黃山あり、得撫にはアレウト人の一村あり、新知のブロートン灣は水深けれども灣口淺くして船を容るゝに難し、アレウト人住めり、パラモシリの乙登前港は占守島の片岡灣と相對して共に船を泊すべし、占守には今報效義會の郡司成忠等住めり、占守の東端は千島海峽を隔て、カムチャツカのロバトカ岬と相對し、英國綠威より東經百五十六度三十二分の所に位し、我國の最東たり、占守の西方なるアライト島は北緯五十度五十六分に位し、我國の最北たり。

薩隅諸島は薩摩大隅より西南に當れる列島の輿論島に至るまでを總稱するものにして、種子島、屋久島、川邊十島、大島、鬼界島、徳ノ島、沖ノ永良部島、與論島等を含めり、南都の島には多く砂糖を産し、沿海は鯉鯖等の魚族に富む、縣治は鹿兒島縣に屬せり。

種子島には國上港、赤尾木港あり、國上は鹿兒島を距ること六十二海里なり、此島は天文年間葡萄牙人の始めて鳥銃を傳へしにより名高し、

屋久島には八重岳(六三五一尺)高く聳え、海岸には一ノ湊、宮浦あり、一ノ湊は鹿兒島を距る七十三海里なり。

川邊十島は概ね硫黄を産す、其の黒島は樹木繁り、遠く望めば黒き島の如く、竹島には竹の名産あり、硫黄島には僧俊寛の遺蹟あり。

大島、鬼界島、徳ノ島、沖ノ永良部島、與論島は北部の諸島と大に言語風俗を異にし、全く琉球の風たり、大島の名瀬港は稍船を泊するに足るも、鬼界島の灣村、徳ノ島の山村、沖ノ永良部島の和泊、皆港と稱すべからず、然れども大島は良港に乏しからず、笠利灣、瀬戸内灣、焼内灣の如きは是れなり、名瀬は大嶋嶋應の所在地にして鹿兒島に至る二百二海里、汽船の便あり。

琉球諸島

とは薩隅諸島の西南に連れる諸島の總稱にして

沖繩島、宮古島、石垣島、入表島等を含めり、島内概ね砂糖を産す、芭蕉布及飛白縞亦名産たり、氣候は温暖にして霜雪を見ず、縣治は別に一縣を成し沖繩縣と稱す。

第十八圖



沖繩人の風俗

沖繩島の沿岸は船を泊すべき所多からず、運天港の如き其最たるものなり、那覇は島の西岸嶋尻の部にあり、大嶋の名瀬港を距ること百七十六海里、沖繩縣廳の所在地にして市況亦盛なり、那覇の東一里許を隔てたる首里は尚侯の舊城地にして、今熊本第六師團の分遣隊ありて守備せり。

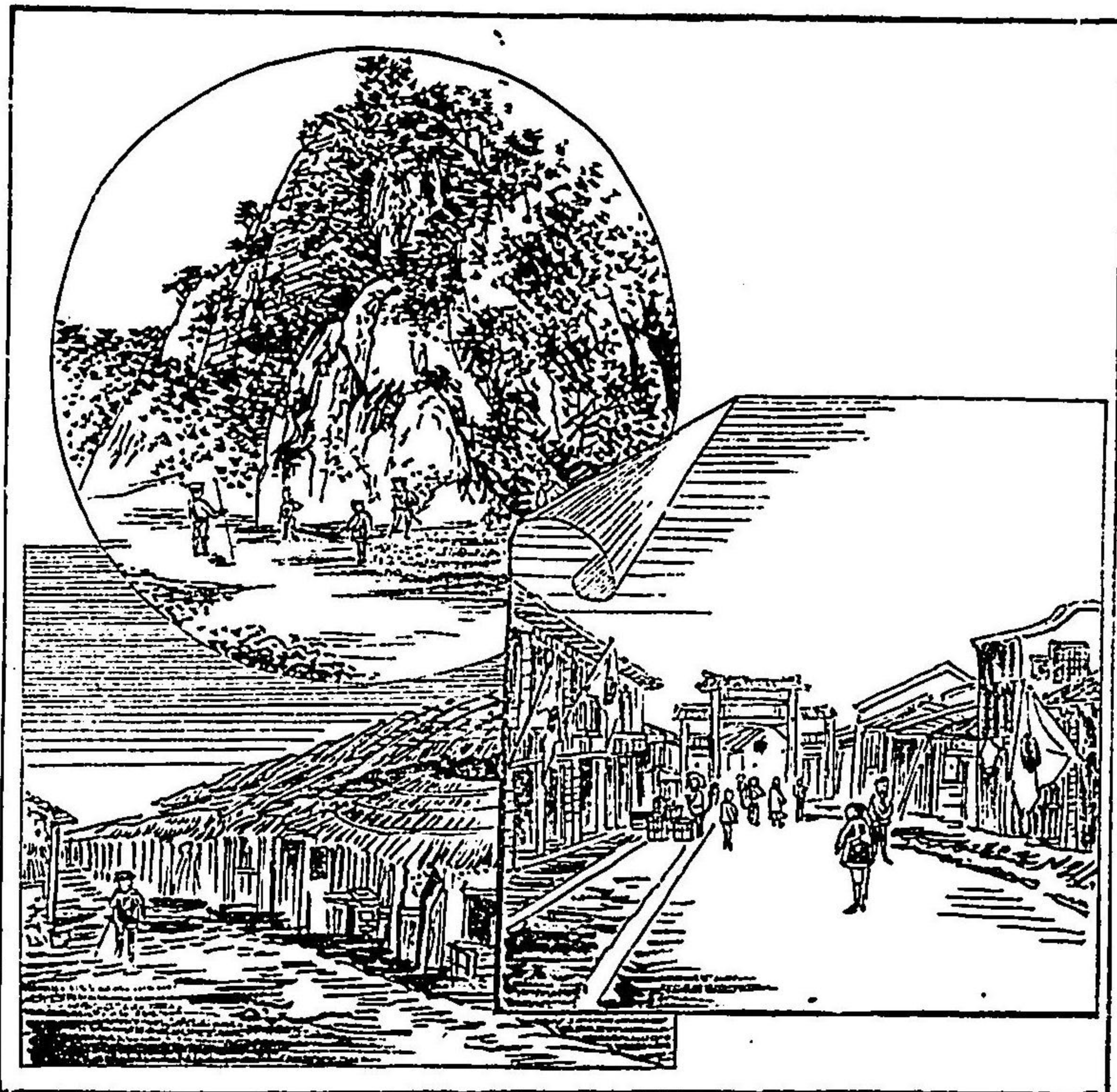
宮古島の張水港、石垣島の川平港、宮良港、入表島の古見港、鬚川港は稍船を繋ぐに足れ

ども沿岸一體に良港に乏し。

臺灣嶋澎湖嶋 は琉球諸島の西南に位し我邦の最南最西の地を占む、合稱して臺灣諸島といふ。熱帶温帶の兩區に跨り、氣候産物人民の容貌風俗等皆大に内地と異なれり。此地は明治二十七八年の清國との戦争により、清より我に割きし所なり。

臺灣島の東北部に基隆港あり、島中の良港にして臺北縣基隆支廳を置く、近傍石炭を産す。こゝより臺北を経て新竹(臺北縣支廳所在地)に通ずる鐵道あり、吾等は船によりて島の最北端富基岬を廻り淡水港に入る。淡水港は淡水河の河口にして東岸に滬尾の市街あり、後に硫黃を産する大屯山燒山の火山脈を負へり、滬尾は外國貿易の行はるゝ所なり、淡水河は島中の大河にして源をシルグイア山に發し、上流は基隆河、新店河、大始陷河の三支流に分る、臺北は其會合點に近き所にあり、臺灣總督府の所在地にして又臺北縣廳あり、近傍一帶地味肥むて米茶等に適し、基隆河の谷と源(九份山、金瓜石山)には砂金を出だす、淡水河の下流は小舟

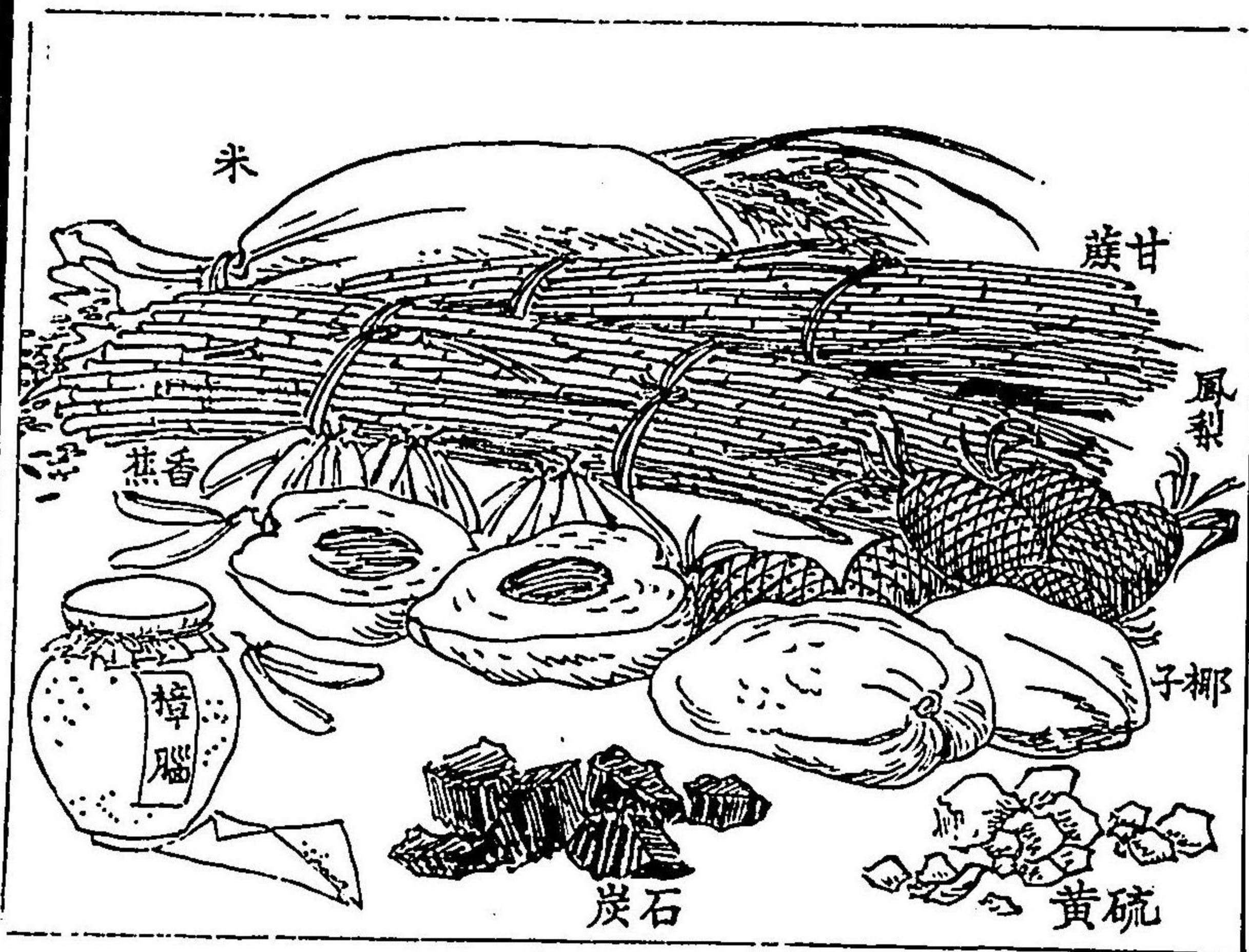
第十 九 圖



北 部 臺 灣 市 街 及 近 郊

を通すべし、電線は其河口を出で、支那福州に達せり。吾等は淡水を出で、島の西岸に沿ひ臺灣海峡の一部なる澎湖水道に向て南に進む、此間大甲溪、大肚溪等ありて、新高山(玉山、モリソン山)の山脈より發し西流して海に入り、沿海一體に淺し、大甲溪の上流に近く苗

第十二圖



臺 灣 産 物

栗あり、支廳所在地にして近傍石油を産す、大肚溪の岸には彰化あり、元縣廳の所在地なり、吾等は澎湖水道を過ぎて安平港に入る、安平港は又外國貿易の盛なる所にして臺南を距ること遠からず、電線ありて澎湖島に通せり、臺南は縣廳所在地にして、北方嘉義彰化等を経て臺北に通じ、南方鳳山を経て恒春に達し、東方卑南に至るを得べし、近傍一體砂糖を産す、澎湖島は大山嶼、漁翁島、白砂

島八罩島等より成り、自ら一大港灣を成せり、媽宮は大山嶼にありて島廳の所在地たり、澎湖島の高島は我邦の最西にして東經百十九度二十分に位し、近傍暗礁多し。

安平より南に打狗港東港等あり、又船を泊すべし、東港は下淡水河の河口にして其谷は地味の肥むたる所なり、それより我邦の最南なる北緯二十一度五十四分の南岬を廻り、紅頭嶼を横に見て臺灣島の東岸を進む、沿岸多くは絶壁にして船を寄すべからず、漸くにして蘇澳灣に入る、蘇澳は東岸唯一の良港にして其の北に宜蘭支廳所在地あり、濁水溪の河口にして西にカプシユラン山脈を負ひ、近傍樟腦を産すること夥し、これより三貂山の鼻を廻り、基隆に還ることを得べし。

壹岐對馬 は肥前國の西北海中にあり、日本海より黃海に通ずる所の咽喉に位す、共に長崎縣の管轄に屬し、對馬には別に又島廳を置けり、兩國共に海岸の出入多く良港少からず、沿海は又共に鯨鯢鰹鮪海參の漁場藻類の採集場たり、古、外寇の屢侵せし

所にして今尙遺蹟を傳ふるもの多し。

壹岐の勝本は良港にして、對馬の嚴原と對馬海峽を隔て、相對せり、其間三十六海里なり、暖流の通過する所たり。

對馬は南北二島に分る、其相接する所の海峽は即ち竹敷の要港にして堅固の砲臺あり、嚴原は上島の東岸に位し朝鮮釜山を距ること六十八海里、對馬島廳の所在地にして且警備隊の設あり、嚴原は又鹿見佐須奈と共に朝鮮との特別貿易港たり。

豆南諸嶋

は伊豆の大島より東南八丈島に列れる諸島の總稱にして、小笠原島は尙其東南に當れる群島なり、共に東京府の管轄に屬す、皆火山質の島にして沿海漁産に富めり。

大島は豆南諸島中、最大なるものにして島中の三原山は常に噴烟せり、東京を距ること七十海里なり、是より利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御倉島を経て、八丈島に至るの間、黒瀬川と稱するものを渡る、是即ち暖流なり。

八丈島は東京を距ること百五十海里に位す、島中に西山と稱する火山あり、硫黄を産す、八丈絹は此島の名産なり。

小笠原島は父島、母島、兄島、弟島、姉島、妹島、聳島、蟻島等より成り、古、無人島と稱せしが今人口千餘あり、凡三百年前小笠原貞頼の發見せし所たり、父島は小笠原島廳の所在地にして東京を距ること五百二十八海里あり、芭蕉、椰子、杧^ヘ、鳳梨、珈琲等能く生育せり。

硫黄島は小笠原島の西南に當り硫黄を産する所たり。

日本海中に位する隱岐佐渡二島は、已に之を述べたるを以て爰に略す。

後篇 地理總說

地文地理

(位置) 我大日本帝國は亞細亞大陸の東なる太平洋中にあり、中部は本州、四國、九州、北海道の四大島より成り、日本海を隔て、露領西比利亞に對し、宗谷海峽を以て其の樺太島(薩哈噠島)と界し、又朝鮮海峽を隔て、朝鮮王國と相望り、東北は則ち千島列島によりてオコツク海を限り、千島海峽を以て露領カムチヤツカと界し、西南は則ち薩隅諸島、琉球諸島、臺灣諸島を以て黃海を限り、臺灣海峽を以て支那帝國と對し、パシー海峽を以て西班牙領フリッピン諸島に對せり、本州の中部より東南に列れる諸島は、豆南諸島及小笠原諸島等にして遙に大洋洲のマリアナ群島に向へり、斯の如くして其形恰も連珠を亞細亞大陸の東部に懸けた

るが如し。

經度は西方澎湖島の花嶼(東經百十九度二十分)より起り、東方千島の占守島(東經百五十六度三十二分)に至る、其間經度の差三十七度十二分にして正午の差異二時三十分餘を生ず、因て東經百三十五度の正午を以て我國の中部標準時となし、東經百二十度の正午を以て我國の西部標準時となせり。

緯度は臺灣島の南端(北緯二十一度五十四分)に始まり、千島のアライト島(北緯五十度五十六分)に終る、而して北緯二十三度半の線、即ち熱帶温帶の境界線は臺灣島嘉義の近傍を通過せり。

(幅員) 臺灣の周回面積共に未だ明ならざれども、周回は凡二百八十里にして面積は凡二千二百六十八方里なるべし、故に之を合算すれば我邦の周回即ち海岸線の長さは凡七千三百餘里にして、面積凡二万七千六十二方里となり、島嶼の總數は二千有餘となるなり。

島名	周回(里)	面積(方里)
本州	二四七五	一四五七一
北海道	六八六	五〇六二
九州	一八四六	二六一七
臺灣諸島	二八〇	二二六八
四國	六七六	一一八一
千島諸島(三十二數)	六一三	一〇三三
琉球諸島(五十五數)	三一五	一五七
佐渡	五三	五六
對馬	二〇六	四五
淡路	四〇	三七
隱岐	七六	二二
壹岐	三七	九
小笠原諸島(十七數)	六一	四

今本州を一箇と見做せば、北海道は凡う其の三分一に當る。九州は凡う本州の十分六、北海道の二分一に當る。四國は凡そ九州の二分一に當り、即ち本州の十分三、北海道の四分一に當れり。臺灣は九州と殆んど同大なり。

(自然區劃) 全國を畿内八道に分ち更に之を八十四國に分てり、之に琉球と臺灣とを加ふれば八十六ヶ國となる。

- (一)畿内五國 山城、大和、河内、和泉、攝津、
- (二)東海道十五國 伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、
- (三)東山道十三國 近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後、
- (四)北陸道七國 若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、
- (五)山陰道八國 丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、
- (六)山陽道八國 播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、
- (七)南海道六國 紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐、

(八)西海道十二國 筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、

壹岐、對馬、

(九)北海道十二國 渡嶋、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十勝、釧路、根室、千嶋、

東山道の中又近江美濃飛驒信濃上野下野の六國を中仙道と稱し、磐城岩代陸前陸中陸奥羽前羽後の七國を奥羽或は東北地方といふ。又山陰山陽の兩道を合せて中國とも稱するなり。

(地勢) 本邦の地勢は西南より斜に東北に向ひて彎曲し、恰も弓形を成す。是即ち地體を構成する所の最も主なる二大山系の方向に依るものなり、其の一は亞細亞大陸なる支那崑崙山脈の餘派を受けて略は西より東に連なれるものにして之を支那山系と稱し、他の一は樺太島と其脈を通じて殆んど南北に列れるものにして之を樺太山系と稱す。此兩山系の相會する所は本州中

幅員最も大にして地勢亦最も高峻なるところなり。
 更に此兩山系を横ざる所の大火山脈三あり、富士帶、霧島帶、千島帶といふ、富士帶は本州の中部を横ぎり、霧島帶は九州に顯はれ、千島帶は北海道に現はる。
 本邦の地勢は主に此二大山系、三大火山脈によりて種々の様を成せり。

更に又兩山系に就き、太平洋に面する所の山脈と、日本海に面する所の山脈とを比較するに、日本海に面する所の兩山系は共に火山に富み地層混雜すれども、太平洋に面する所の兩山系は概ね火山少く地層亦整然たり、因て太平洋に面する方を外帶と名づけ、日本海に通する方を内帶と名づけて區別する事あり。

(樺太山系地方) 北海道に於ては日高山脈東北山脈は樺太山系に屬し、千島帶火山脈は知床岬より道の中央部に走りて之を横ぎり、別に室蘭近傍より西北に走れる小火山脈と、惠山岬より西

北に走れる小火山脈とあり。

本州に於ては、北上山脈、阿武隈山脈、足尾山脈、關東山脈等は外帶の樺太山系に屬し、中央分水山脈及羽越山脈等は内帶の樺太山系に屬す、而して此内帶山脈は熾んに火山を噴起して又火山脈をなせり。

富士帶は遠く其脈を太平洋諸島より延き、小笠原群島、豆南諸島を經、伊豆半島を通じて北に走り、富士山を經て八ヶ嶽、妙高山、焼山に終る、

千島火山脈には、雄阿寒岳、雌阿寒岳、石狩岳、十勝岳等あり、室蘭近傍より起れる小火山脈には、樽前、有珠の諸火山あり、惠山岬より起れるものには、惠山、駒ヶ岳等あり。

北上山脈には、早池峰あり、阿武隈山脈には、八溝山あり、關東山系には、秩父の諸山、小佛峠等あり。

中央分水山脈には恐山、八甲田山、岩手山、森吉山、吾妻山、磐梯山、那須岳、男體山、赤城山、榛名山、清水越等あり、信濃上野の境なる白根山、吾妻山より富士帯に接す。羽越山脈は連続の山脈を成さず、岩木山より烏海山、月山等となり、飯豊山を経て分水火山脈に接す。

羽越山脈の西に平行して小火山を噴起せる小火山脈あり、羽後の男鹿半島より越後の彌彦山、米山を経て富士帯に接す。

(支那山系地方) 支那山系の外帯山脈は、九州に於ては九州南部山脈をなし、一たび豊後洋に没して又四國山脈と成り、再び紀伊水道に沈みて又紀伊山脈を起し、それより三河の南部を経て赤石山脈に連れり。

支那山系の内帯山脈は九州の北部に起り、山陰山陽の境に出で、中國山脈を成し、濃飛高原に至りて飛驒山脈をなし、又南に木曾山脈をなせり、鈴鹿山脈、笠置山脈、葛城山脈も亦内帯の支那山

系に屬す。

霧島帯は、琉球諸島の島嶼に起りて九州に入り、開聞岳、櫻島岳、高千穂岳を起して霧島山に連り、それより稍西北に折れ温泉岳、多良岳に終る。霧島山其中に主たり。

霧島帯の外に又阿蘇火山脈、白山火山脈、能登火山脈等あり、飛驒山脈も亦一火山脈なり。

九州南部山脈には市房山、祖母岳等あり。

四國山脈には森吉山、劔山等あり。

紀伊山脈には高野山、地藏ヶ岳、大臺原山等あり。

赤石山脈には秋葉山、黒法師山、赤石山、駒ヶ岳、甲斐、白根山、身延山等あり、赤石山其の主たり。

中國山脈には徳佐峰、船通山、三國山、愛宕山、比叡山等あり。

飛驒山脈には木曾御岳、乘鞍岳、鎗ヶ岳等ありて越中の立山に至る、之を又一に御

岳火山脈と稱す。

本會山脈には信濃駒ヶ岳、惠那山等あり。

阿蘇火山脈は阿蘇山より起り、鶴見岳、双子山を経て、伊豫の高繩山、讃岐の飯野山となり、伊賀伊勢大和の國境より尾張の知多郡半島を横ぎり、鳳來寺山に終る。白山火山脈は加賀の白山より起り、大日岳を経て日本海々岸に沿ひ大山、三瓶山、青野山等に連るものなり。

能登火山脈は佐渡、能登、隱岐、壹岐、肥前、五島等に出没する小火山脈をいふ。

(臺灣諸島) 臺灣の山脈は未だ詳ならざれども、シルヴア山以南は一大山脈の地形に従うて南方に走れると明らかかなり、之を新高山(玉山)山脈と名づく、樺太山系又は支那山系に屬するものには非ず、シルヴア山より東北に連る一山脈あり、之をカプシラン山脈といふ、是亦本州の山系と如何なる關係あるかは知り難しと雖も、新高山脈と相會してシルヴア山近傍の高地を起したる

ものなるべし。

火山脈として見るべきものは臺灣の北部にあり、三貂山の近傍、金瓜石山より起り、大屯山、燒山の間に出没す、又新高山脈の最高點は一万三千六百七十八尺なり。

(地震) 本邦は有名なる地震國にして、微震を通算するときは殆んど日ごとして之れなきはなし、而して其地震の原因に二種あり。一を火山地震とす、火山破裂の爲に近傍の土地震動せるものにして、其區域狹く其數亦尠し、明治廿一年七月十五日磐梯山破裂の際の地震の如きは即是なり、他の一を地氾地震とす、地層の氾り落つるがために震動するものにして、其區域最も廣く其數亦多し、明治廿四年十月廿八日濃尾大地震の如きは其例なり。

本邦は富士、霧島、千島、三帶の大火山脈を始めとし、國の北端より南端に至るまで、到る處火山を見るべき世界有名の火山國にして、現今活火山三十七座、消火山百三十五座ありといふ、是れ火山地震の時に起る基なり。

木曾川の平野、關東の平野等、其他地體の陥没の上に成りたる新しき土地にては、地層の多少絶えず下り落つるものなり、是れ名古屋近傍、東京近傍等は屢地震の起る所以なり。

臺灣島に起る地震の原因の如きは未だ明ならずと雖も、從來起りし地震は其數多く且激烈なりしものゝ如し。

(礦泉) 礦泉とは礦物の溶出づる泉をいふものにして、火山近傍に最も多し、其地下の泉源の深きと淺きとにより、温泉、冷泉の別を生ず、本邦は火山脈に富むを以て、礦泉亦從て多し、就中本州にては中央分水火山脈の地方及富士帶の南部最も多く、日本海沿岸之に次ぐ、九州は阿蘇火山脈の地方及霧島帶に多く、四國には甚だ少し、北海道は西部に多くして、東部に少し、其總數一千餘にして、最も名高きもの四百餘あり。

礦泉には又其水に溶けたる礦物の性質により、硫黄泉、鹽泉、鹽類泉、炭酸泉、鐵泉等

の別あり、本邦にては硫黄泉最も多く、鹽泉、鹽類泉之に次ぎ、炭酸泉、鐵泉は甚だ少し、草津、伊香保、熱海、道後等は硫黄泉にして、鹽原、有馬は鹽泉に屬し、別府、頓原は炭酸泉にして、箱根湯本は鐵泉なり、臺灣には諸種の礦泉あり、就中硫黄泉最も多くして、北部の火山地方に在りといふ。

(礦物) 本邦頗る礦物に富む、今其有用なるものを擧ぐれば、金、銀、銅、鐵、錫、鉛、安質母、尼、滿、俺、硫黄、石炭、石油、大理石、石灰石、水晶等にして、又外に花崗石等の建築石材あり。

金は薩摩、佐渡、羽後、岩代、陸前、但馬、甲斐等に産し、銀は多く、羽後、陸中、岩代、佐渡、飛騨、但馬、石見等より出づ、銅は下野、伊豫、羽後、陸中、備中、加賀、石見等主なる産地にして、砂鐵は中國山脈より、岩鐵は北上山脈より出づ、錫は薩摩に最も多く産し、鉛は陸前に最も多し、安質母、尼は伊豫より、滿、俺は後志、伊豫、周防等より出づ。

硫黄は九州の阿蘇火山脈及霧島帶の火山より産し、又北海道なる千島帶、本州なる富士帶等、許多の火山より出づ。

石炭は九州の西北部及北海道に多し。

石油は越後を主とし、其他信濃遠江羽後北海道等にも産す

大理石は美濃常陸長門より、石灰石は豊前長門武蔵等より、花崗石は攝津以西中國より、水晶は甲斐若狹等より産す。

臺灣よりは又石炭石油硫黄沙金等を産す。

(水域) 本邦の如く、地形狹長にして山の急峻なる所にては、河の大水域を見ること能はず。然れども稍大なるものに至りては、灌溉の利、交通の便共によろしく、人の最も多く集まる所たり。即ち關東平原の利根川、濃尾平原の木曾川、畿内平原の淀川、大和川、筑紫平原の筑後川、越後平原の信濃川、阿賀川、東北平原の北上川、阿武隈川、石狩平原の石狩川等皆其例なり。

流程を以て之を言へば、石狩川最も長く、信濃川北上川阿武隈川利根川天鹽川木曾川最上川天龍川射水川等之に次ぎ、水域を以て之を言へば、石狩川信濃川利根

川等其の大なるものなり。

臺灣の河は、流程水域ともに細かに之を比ぶる能はざれども、先づ大河として知らるゝものは、淡水河大甲溪大肚溪下淡水河濁水溪等にして、其の水域の稍廣く灌溉交通の便多きものは、淡水河及濁水溪等とす。

(北日本の水理) 北海道は樺太山系之を東西に二分し、千島帯又其の東の一分を南北の二部に分つを以て、水理亦從て此の三大方向に分る。

本州には、中央分水山脈ありて地勢自ら東西二部に分る而して吾妻山月山間の連山によりて西部を更に南北の二區に分ち、東部も亦那須岳八溝山間より南北二區に分つときは地形全く四區に分るゝを以て、水理も亦此の四大方向に従ふ。

北海道に於て、西方日本海に入るものは即ち石狩川天鹽川にして、北方オホック海に入るものは湧別川常呂川、南方太平洋に注ぐものは十勝川釧路川なり。

本州に於て日本海に入るものには、北部に於ては岩木川能代川、御物川、最上川あり、南部に於ては阿賀川あり、信濃川あり、而して太平洋に注ぐものには、北部に於ては馬淵川、北上川、阿武隈川あり、南部に於ては那珂川、利根川、隅田川、多摩川、馬入川等あり。

(南日本の水理) 本州に於ては、近江を以て中心と見做し、近江以東、近江以西、近江以南の三部に分つことを得べし、而して其の以東の地を東山北陸兩道の界に依て更に南北の二區に分ち、且又以西の地を中國山脈に從て南北二區に分ては、南部本州の水理は此五大方向に從て現はる。四國は、其分水山脈の北方に偏在せるを以て、北方に向ふの大河なし。

九州に於ては、國東半島より英彦山を経て多良岳に通ずる連山を以て南北の二部に分ち、大分の南方より鹿兒島灣の東西に亘

れる山脈を以て更に南部を東西の二區に分てば、九州の水理も亦此三大方向に分たる。

即ち本州にありて日本海に注ぐものには、近江以東に日野川(越前)射水川神通川、黒部川あり、近江以西に朝來川、千代川、日野川、宿耆、斐伊川、江ノ川あり、太平洋に入るものには、近江以東に木曾川、矢作川、天龍川、大井川、富士川等あり、近江以南に宮川、熊野川、紀ノ川、大和川、淀川等あり、但其内木曾川、宮川は伊勢内海により、大和川、淀川は大阪灣により、太平洋に通ずるものなり、而して近江以西にありて南に流るゝものは、東大川、西大川、川邊川、太田川等にして、皆瀬戸内海に注ぐ。四國に於て北方瀬戸内海に注ぐ所の河は皆小なれども、東方太平洋に入るものには、吉野川あり、南方太平洋に注ぐものには、仁淀川、渡川あり、西方瀬戸内海に入るものには、肱川あり。

九州の南西部にありて筑紫洋以南の太平洋に注ぐものには、筑後川、白川、球磨川、川内川等あり、南東部にありて瀬戸内海及内海以南の太平洋に注ぐものには、大

野川五箇瀬川美々津川高鍋川佐土原川等あり山國川は九州の北部に於て瀬戸内海に入るものにして、遠賀川は同じく北部に於て日本海に注ぐものなり。

(臺灣の水理) 臺灣の河は一々未だ其源を極むる能はず。雖も、地形によりて之を察するときは、北端富基岬より南端南岬に通じたりと知らるゝ分水山脈によりて、全く東西の二大方向に分るゝものゝ如し。

即ち分水山脈の西に流れて臺灣海峡に入るものには、淡水河あり大甲溪あり大肚溪あり下淡水河あり、而して東に流れて太平洋に注ぐものには、濁水溪等あり。

(湖沼) 湖沼の成りたる原因には種々あり。我邦にて最も多きは火山の舊噴火口に水の溜まりしものゝ、海岸に打ち寄せたる土砂のため縁を造りて澤湖となりしものゝ、内海或は灣に近き陸地の發育して終に其内海或は灣の湖に變じたるものとなり。又地皮の陥落して凹所に水を溜め湖水となりしものもあり、火

山噴出物の溪流を堰き止めて湖をなしたるもあり。大きに依りて之を記せば琵琶湖最大にして、霞浦、猿間湖、猪苗代湖、中海、八郎潟、楓蓮沼、尖道湖、小河原沼、印旛沼、十和田湖等之に次ぐ。

琵琶湖は地皮の陥落せる所に成りし湖の例にして、霞浦印旛沼中海尖道湖は舊時の河内海或は灣たりしものゝ、例猿間湖八郎潟楓蓮沼は澤湖の例なり。臺灣の西岸には澤湖多く、又其の火山地方には火山湖あり。

(海岸線) 凡て或國の面積に比して其の海岸線の長さものは文化の進歩著しき所なりとす。即ち海岸線長さものは岬角港灣の出入必ず多く、港灣の出入多ければ交通の便亦必ず多く、文明を輸入し易きを以てなり。我國は海岸線の出入甚だ多く、延長七千二十九里に及び、臺灣を合算するときには七千三百餘里の長さに至る、而して本州に於て日本海の沿岸に屬する長さは凡六百五十里にして、太平洋の沿岸の長さは凡そ其二倍に當り、九州に於

ては西方の海岸線の方、東方の海岸線よりも長し、

九州は北海道に比し面積小なれども海岸線は却て長し、

四國は臺灣に比し面積凡二分一なれども海岸線は却て二倍以上なり

(港灣) 我國の海岸線は斯の如く長きが故に出入も亦多しと雖も、良港灣の多からざるは惜むべきなり、而して日本海沿岸にありては殊に良港灣に乏し、即ち太平洋の面には噴火灣、仙臺灣、東京灣、駿河灣、伊勢内海、大坂灣、鹿兒島灣、筑紫洋等あれども、日本海の方には敦賀灣、富山灣、小樽灣等あるのみ。

噴火灣には森港、室蘭港あり、仙臺灣には荻ノ濱港、石ノ巻港、鹽釜港あり、東京灣には横濱港、横須賀港あり、駿河灣には清水港あり、伊勢内海には四日市港、半田港あり、大阪灣には大阪港、神戸港あり、鹿兒島灣には鹿兒島港あり、筑紫洋には口ノ津港、三角港あり。

敦賀灣に於ては敦賀港、富山灣に於ては伏木港、小樽灣に於ては小樽港、良港たり、

其他良港として記すべきものは、北海道に於て箱館港あり、日本海に於て佐渡の夷港、隠岐の西郷港、對馬の竹敷港、嚴原港、壹岐の勝本港あり、九州に於て長崎港、唐津港、博多港あり、四國に於て宇和島港あり、本州に於て宇品港、吳港、下ノ關港、舞鶴港、宮津港、直江津、大畑港、下田港、鳥羽港等あり。

臺灣に於ては、海岸の出入少きを以て良港と稱すべきもの甚少く、北部に基隆港あり、東部に蘇澳灣あり、西南部に打狗あるのみ、但澎湖諸島ありて極めて海岸の屈曲に富み、諸嶋相擁して澎湖港と稱すべき一大良港をなせり。

(海流) 本邦沿岸には暖流寒流共に之れ有り、暖流は即ち黒潮にして、臺灣島の東より琉球諸島の沿海を通過し、薩隅諸島より九州四國の南岸を洗ひ、紀伊半島の沖を過ぎ、豆南諸島に達して御倉島八丈島間の黒瀬川となり、犬吠岬の沖より漸く日本を離れて東北太平洋中に散す、黒潮の薩隅諸島より折れて日本海に向ふものあり、對馬海峽を経て日本海に入り、海岸に沿うて津輕海

峽の西方に至り、又二分して一は宗谷岬に至り、一は津輕海峽を過ぎて太平洋中に消ゆ。

本邦の寒流は又親潮と稱せらる。カムチャツカの東方及西方より來り、千島列島を過ぎて根室灣に近づき、こゝより二分して一は北に沿うて宗谷岬に至り、一は北海道の東岸を洗ひ、これより本州の東海岸に移りて犬吠岬近傍に至る。別に樺太海流とて樺太島の東海岸を流れて北海道の宗谷岬に近づくもの、ライマシ海流とて日本海の西岸を流れて對馬の近傍に至るもの、とあり、又冬季黃海の近傍より支那の海岸に沿うて臺灣の北部に至る寒流あり。

黒潮は氣候によりて多少其位置を變じ、又場所によりて其流動の速度を異にす。而して其海水の温度も亦季節に因て變化す、此暖流の通過する近海は鯉、鯖、鰯等

の魚獵多し。

親潮も亦季節によりて多少位置、速度、温度を變ず、昆布は此寒流の通過する海の産物なり。

寒流暖流の衝突する所にては、海霧を見ること多く、又激浪を見ることあり。

(潮汐) 潮汐とは凡そ六時間毎に海水の干満をなす運動をいふものにして、其原因日月の引力に在り、殊に月は地球を距ること太陽に比し極めて近きが故に、地球に對して太陽の殆んど二倍半の引力を有し、主として此運動を生ずるなり。

本邦大平洋の海岸は、直に廣大なる大洋に面するを以て潮汐の高低稍見るべしと雖も、日本海は四面殆んど陸地を以て閉ぢられたるにより、潮汐の高低甚少し。然れども此兩岸の高低の差は必ずしも大なりといふべからず、却て其差の大なる所は海洋の深く陸地に入り込みたる所、又は大河の河口にあり、即ち九州の

筑後河口に於ては大潮の時は十八尺六寸、廣島灣に於ては十二尺、大阪灣に於ては八尺七寸、横濱に於ては六尺なり。

細長き内海又は港灣にて潮汐干満の時速に外海と運動を共にする能はざる所に於ては、内外の水面甚しき高低の差を生じ、爲めに其海灣の口に於て急激なる潮流を見ることがあり、鳴門海峡下ノ關海峡、明石海峡、東京灣口等其例なり。

(氣温) 氣温の差異は緯度の高低、土地の高低、海流の變化等によりて生ずるものなり、而して本邦は南の一部は熱帯に入り、北は北緯五十度五十六分に達するが故に緯度已に大差あり、又到處高山聳えて土地の高低著しきものあり、且南日本には暖流の海岸を洗ふものあり、北日本には寒流の其岸を流るものあり、故に氣温の差異誠に甚し。加ふるに亞細亞大陸或はアラスカ近傍より來れる寒風を受くると、南方太平洋より來れる暖風を受くることにより、其地方の氣温變化を生ずること亦少からず。

冬季の温度よりいへば、九州の南端より犬吠ヶ岬に至る海岸の地は大差なし、即ち其の平均温度は鹿兒島(六、八)最も高く、濱松(四、四)最も低し。之に反して犬吠ヶ岬より北海道根室に至る間は差異甚し、即ち其の平均温度は銚子に於て五、二なれども石巻は〇、八、宮古は零下二、二、網走は零下八、五なり。

日本海沿岸にありては、長崎より宗谷に至るまで其差外帶の如く甚しからず、即ち其の平均温度長崎に於て五、六、宗谷に於て零下六、八にして其差一二、四なれば外帶の差一五、三よりも小なること二、〇なるを知るべし。

太平洋岸と日本海岸との間なる中央部は差異亦大なり、即ち瀬戸内海に瀕する廣島、大阪共に平均温度は各三、五なれども、長崎に於ては零下二、二、山形に於ては零下二、〇にして北海道の上川に於ては零下一一、六に達せり。

夏季(八月)の温度よりいへば概して冬季の如く差異甚しからず、九州の南端より犬吠ヶ岬に至る海岸の地は畧ぼ一様にして二五、五と二七、〇の間なり、東北地方に於ても石巻二三、四、網走一九、九を示せり。

日本内帯にては長崎(二六、八)最も高く、宗谷(一九、六)最も低し。

中央部にありては廣嶋二六、八に達し長野は二三、八上川は二〇、〇を示せり。臺灣にありては、夏季の温度よりいへば、南部の南沙に於て二六、八北部の基隆に於て二九、七にして差異小なれども、冬季の温度よりいへば、南沙一九、三基隆一四、五にして差異最も甚し、是基隆近傍は冬季黄海寒流の影響を受くるを以てなり。

(風) 我國は西に大陸を控へ東方は大洋に瀕するを以て、本邦に起る風は主として此二者に支配せらる、即ち夏季は亞細亞の内地非常に熱せられ空氣常に稀薄となりて上昇するが故に太平洋よりこの所に向うて流るゝ風あり、是れ夏季本邦に於て南風若しくは東南風の多き所以なり。之に反して冬季は亞細亞大陸非常に冷却し空氣濃厚となりて高氣壓を示すが故に、こゝより四方に向うて吹く風あり、之れ冬季本邦に西北風の多き所以なり。

九月の中旬、即ち陰曆の二百十日前後には本邦に颶風の起るを

常とす、是氣候頓に變じ氣壓に劇變を起せばなり、其の颶風は常に臺灣島若しくは其南方のフィリッピン群島邊より始まり、東北に進み九州四國を過ぎ斜に本州を吹きて北海道に及ぶ。

從來航海者の言ふ所によれば、我國沿海中風浪の最も高きは七嶋洋及び鹿嶋洋にして、玄界洋、遠江洋、日向洋、熊野洋等之に次ぐといへり、然れども一般に太平洋面は冬季に穩にして、日本海面は夏期に和なり。

(雨雪) 本邦は四方海にして濕氣多きが故に雨雪亦從て多し、概して夏季は南風或は東南風によりて太平洋より多量の濕氣を送るが故に九州四國の南部及紀伊の南端並に東海道の降雨量最も多し、之に反して冬季は西北風吹きて日本海上の濕氣を多量に送るが故に山陰道北陸道の地降雪甚多く能登半島殊に甚し、但東北の寒冷なる地方及瀬戸内海の沿岸は降雨降雪誠に尠

此外全國を通じて多きものは霖雨と暴雨となり。霖雨は六月頃に起り梅雨又は五月雨と名づく、是南方の風と北方の風と衝突して成せる霧状の雨ならん。暴雨は九月頃に起り多くは颶風に伴ふものにして、其量一時甚しく恰も盆を傾くるが如きことあり。

臺灣は冬季東北の寒冷地方より黒潮上を吹きて來れる北東季候風の衝に當るを以て、北部は雨量最も多く西南部は極めて少し。之に反して夏季に至れば南西季候風濕氣を帯びて吹き來るが故に、西南部の降雨亦甚しく北部は此時降雨却て少し。

臺灣にても冬期に至れば北部の高山及中部の新高山(玉山)山脈に降雪を見ることありといふ。

(植物) 我邦は常に緯度に於て熱帶温帶に跨るのみならず高山

あり海洋ありて氣候を種々に變化するが故に寒温熱三帶の植物を併せ有し、且雨量多く地味肥沃なるの故を以て植物の種類亦極めて多く、到る處森林を見る。

本州及四國九州等は之を五區の植物帯に分つことを得べし、熱帶樹帯、半熱帶樹帯、温帶低地帯、温帶高地帯、高山帯是なり。

熱帶樹帯は小笠原諸嶋、琉球諸嶋を始めとし九州及四國の南端を含み、蘇鐵、杉、檜、竹、柏、臭樹、榕樹等生育し、最も甘蔗に適せり。

半熱帶樹帯は九州、四國、中國、畿内、紀伊半島の大部及東海道の海岸地方並に能登、以西の海岸地方を含み、松柏類の森林あり、山茶、厚皮香、樟樹、蜜柑、甘蔗、檳榔等能く生育し、最も茶樹に適す。

温帶低地帯は甲府近傍、兩毛の平野、阿武隈川、北上川の平野、富山灣の沿岸、新潟近傍、最上川、御物川、能代川、岩木川の平野等を含み、松柏類及漆樹に適し、又稻作の良境たり。

温帯高地帯は九州、四國、中國、紀伊半島等の高山を始めとし、東山道の大部及越中越後の高地を含み、山毛櫸最も多く、常緑樹は少くして檜の如き針葉樹多し、麥及荳類能く生育す。

高山帯は富士の山頂及赤石山脈、木曾山脈、飛騨山脈、中央分水山脈等の高峰にして特有の植物には羅漢松、梅、偃松等あり、農作には殆んど全く適せず。

北海道の植物帯は海岸帯、下方潤葉樹帯、針葉樹帯、上方潤葉樹帯の五區に分つを得べし、其下方潤葉樹帯は之を本州の温帯高地帯に比すべく、上方潤葉樹帯は本州の高山帯に等し。

臺灣の植物帯は未だ詳ならずと雖も、其の大部は熱帯樹帯に屬し、高地の半熱帯樹帯に屬するは明にして、又南部と北部とに別あることも明なり。全島に最も多きは檳榔樹、棗樹、棕櫚、枕椰等なり。

(動物) 動物は自由に移住するものなるを以て其區域は植物の如く判然せずと雖も、然も南北自ら差異あり、南方には熱帯性の

もの及温帯性のもの多く、北方に進むに従ひ熱帯性のもの先づ消え、温帯性のものは減じ、寒帯性のもの加はる。

南方に在りては陸には琉球及び薩隅諸島の毒蛇、四國の猿最も名あり、猪鹿兎狐の類又多し、海産は太平洋と日本海と稍其性質を異にし、鯉、鱈、鮪、牡蠣は太平洋に多く、鯛、烏賊等は日本海に多し。

北方に在りては陸には熊、狼を産し、海産には鮭、鱈、鯨等多く、殊に千島は紅鮭、海獸に名あり。

臺灣は最も動物に富み、陸には熊、豹、鹿、猪多く産し、水牛亦多く養はる、海産には牡蠣、珊瑚等ありといふ。

後篇 地理總説

人文地理

〔歴史〕 謹みて按するに神代は遼たり、得て考ふべからざるもの多し、蓋し運草味に屬し人文全く開けず、唯西方一部や、開明の曙光を認むるを得たりしものゝ如し。神武天皇日向高千穂の宮を出で立たせ給ひ沿道の諸賊を平らげて大和に入り橿原の宮に即位し給ふに及び、國造縣主を置きて地方を治め給ひしかは中州漸く平定せしかと、東北の地は八百年代 日本武尊の東征あるに至るまで皇化未だ洽ねからざりき。九百年代に至り神功皇后自ら舟師を率ゐて三韓を征伏し、一時之を我領土となし給ひしが、一千三百年代に至り内政の改新を専らにして遂に之を放棄せり。此時我國の制度に一大革新を來たし、地方行政は

國司郡司を置いて之を管領せり、大化の新政これなり。これより分道分國屢々なりしが、千五百年代 淳和天皇の天長元年に至り全國を通じて一畿七道六十六國二島となし、爾後永制となりて明治維新の時に至れり。而してこれより先き帝都の變更も屢々なりしが、桓武天皇都を山城の平安城に奠め給ひしより、爾後相傳へてこれ又維新の際に及べり。中世以後大權漸く下に移り、藤原氏平氏源氏を経て北條の末年一たび建武の王政に復せしかど、幾許ならずして日月光を失ひ世は足利の世となりて全く封建の姿をなせり。此頃武田信廣自ら蝦夷島今の北海道に渡り全島を領して松前に住せり、これより蝦夷漸く開發の緒に就きぬ。争鬪亂離の間に足利氏亡びて織田氏起り、豊臣氏その後を承け

て天下を統一し威武海外に振ふ、然れども僅かに二世にして之を徳川氏に移し、徳川氏代りて我邦を治むるに及び、國內に大名小名を封じ、幕府を江戸に開き、征夷大將軍の名を以て大權を確守せり。琉球の我領に入りしは實に徳川氏の世にあり、島津氏自ら乞うて征服せしものたり。かくて慶應三年即紀元二千五百二十七年に至り徳川慶喜大權を奉還するに及び、王政の古に復し更に王政維新となりぬ。明治元年都を江戸に移し東京と改稱し給ふ、同八年魯西亞との交換條約により我領地北蝦夷今の樺太島を彼に與へ得撫以北の千島列島を我に得たり、同廿四年小笠原島の西南なる硫黃島を我領内と定めらる、降て同廿八年に至り戦勝の結果により清國より遼東半島及臺灣諸島を得たるも、好意を以て復た遼東半

島を清國に還附せり、茲に於て我國現今の領土成る。
 (政治區劃) 維新後、政治上の區劃は屢々變せしも、現今は一廳三府四十三縣となれり。臺灣は此外にあり。

廳府縣	官廳所在地	管轄國名
北海道廳	札幌區	北海道
東京府	東京市	武藏一市八郡、伊豆七島、小笠原島
京都府	京都市	山城、丹後、丹波五郡
大阪府	大阪市	河内、和泉、攝津一市四郡
神奈川縣	橫濱市	相模、武藏一市三郡
兵庫縣	神戸市	播磨、但馬、淡路、攝津一市三郡、丹波二郡
長崎縣	長崎市	壹岐、對馬、肥前一市六郡
新潟縣	新潟市	越後、佐渡
埼玉縣	浦和市	武藏九郡

千葉縣	千葉町	安房、上總、下總六郡
茨城縣	水戸市	常陸、下總三郡
群馬縣	前橋市	上野
栃木縣	宇都宮町	下野
奈良縣	奈良町	大和
三重縣	津市	伊勢、伊賀、志摩、紀伊二郡
愛知縣	名古屋市	尾張、三河
静岡縣	静岡市	遠江、駿河、伊豆、七島を除く
山梨縣	甲府市	甲斐
滋賀縣	大津町	近江
岐阜縣	岐阜市	美濃、飛騨
長野縣	長野市	信濃
宮城縣	仙臺市	陸前一市十三郡、磐城三郡
福島縣	福島町	岩代、磐城七郡

岩手縣	盛岡市
青森縣	青森町
山形縣	山形市
秋田縣	秋田市
福井縣	福井市
石川縣	金澤市
富山縣	富山市
鳥取縣	鳥取市
島根縣	松江市
岡山縣	岡山市
廣島縣	廣島市
山口縣	山口町
和歌山縣	和歌山市
德島縣	德島市

陸前一郡、陸中一市十一郡、陸奥一郡
陸奥一市八郡
羽前、羽後一郡
羽後一市八郡、陸中一郡
若狹、越前
加賀、能登
越中
因幡、伯耆
出雲、石見、隱岐
美作、備前、備中
備後、安藝
周防、長門
紀伊一市七郡
阿波

香川縣	高松市
受媛縣	松山市
高知縣	高知市
福岡縣	福岡市
大分縣	大分町
佐賀縣	佐賀市
熊本縣	熊本市
宮崎縣	宮崎市
鹿兒嶋縣	鹿兒嶋市
沖繩縣	那覇

讃岐
伊豫
土佐
筑前、筑後、豊前四郡
豊後、豊前二郡
肥前一市、八郡
肥後
日向
大隅、薩摩
沖繩諸島

(外交) 現今我邦の條約國は二十國にして即ち左の如し。

亞細亞 支那、朝鮮、暹羅及び太平洋中の布哇、
 歐羅巴 英吉利、佛蘭西、獨逸、埃地利、匈牙利、露西亞、伊太利、西班牙、葡萄牙、瑞西、白耳、
 義瑞典、那威、丁抹、和蘭

南北亞米利加 北米合衆國、墨西哥、白露
歴史より言へば、我國の外交は其初め朝鮮支那よりし、後歐米諸國と相通するに至りしなり。

我邦人の海外に往來せしは已に 神武天皇以前に始まれり、而して 神功皇后 韓土を征服し給ひてより彼地の交通頻繁となり、隨て支那の工藝學術を始め風俗宗教に至るまで朝鮮を経て我邦に來れるもの甚多く、其後朝鮮との交通中絶せる時にも支那との交通はなほ絶えざりき、足利時代以後世はかりともと亂れ行き英雄割據の間に處し志を内地に得ざりしもの、奮躍一番多くは外商となり支那の海岸より安南、暹羅、呂宋、マラッカ、印度等をかけて通商するもの多く、堺港博多港等其商業の根據たりき。

二千二百年代に葡萄牙の商船九州に漂着し依て通商を求めてより、西班牙人、和蘭人、英吉利人相次て來り貿易を始めしが、是と共に傳はりし耶蘇教の弊害甚しきを見て、豊臣氏先づ其教徒を放逐せしかど、徳川氏の時に至り竊かに來りて布教に従事するもの多く、たましく和蘭人耶蘇教徒の禍心を抱くを告げしかば、幕

府大に嚴制を設けて我國に來ることを禁じ、且つ我國人の外國に往くことをも禁せしにより外交全くこゝに絶ぬ。

二千五百十三年北米合衆國の使節ベルリ下田に來りて通商を請ふに及び、國禁を解きて長崎、下田、箱館三港を開き、後下田に換ふるに横濱、神戸、新潟を以てし、更に又大阪をも加へ以て今日に至れり。

居留外國人は支那人、英人最も多く、米人、獨逸人、佛人等之に次げり。外國に在留する我國人は之を保護するに領事、總領事、公使等あり。

〔族制及び人口〕 我日本民族は東洋の一島國に生育して、生れながらに忠勇義烈の精神に富める特種の一民族なり、皇族華族士族平民の別あり。

人口は明治廿八年十二月三十一日の現在四千二百二十七万六千二百二十人にして、年々増加の割合凡四十四万人なり、臺灣は此外にあり。臺灣の人口は未だ明ならざれども凡二百四万内外なるべし、其人種には土人と

移住支那人とあり、土人は之を生蕃熟蕃に分つ、移住支那人の中に客家ハツカと稱する種族あり、慄悍にして頑固なり。

(市邑) 人口の最も多き所は地味肥えて氣候温暖なる水域にあり。我國にては關東の平野最も多く畿内の平野、濃尾の平野等に次げり、市邑の大なるものも亦從て是等の平野にあり。全國大市邑の人口を見るに、二万五千以上の人口あるもの總べて五十四にして之を區分するときは左の如し。

二十万以上 東京、大阪、京都、名古屋

十万以上 神戸、横濱

五万以上 金澤、廣島、長崎、仙臺、徳島、熊本、富山、箱館、福岡、鹿兒島、和歌山、岡山、新潟、
海

二万五千以上 堺、福井、高知、静岡、宇都宮、赤間關、甲府、松江、前橋、高松、長野、盛岡、松山、
岐阜、水戸、弘前、山形、大津、津、高岡、宇治、山田、佐賀、松本、米澤、高崎、鳥取、
札幌、奈良、秋田、久留米、小樽、千葉、姫路、若松、八王子、首里、那覇

臺灣の人口は未だ明ならざれば爰に畧す。臺北、臺南、基隆、淡水、打狗等皆一万以上に達するものなしと云ふ。

(政治) 王政復古の後、明治二十三年に至り憲法を制定せられ、立法司法行政の機關備はり以て今日に至る。

行政の事務は國務大臣輔弼の任に當り、詔勅に副署して其の責に任じ、樞密顧問官國事を審議して、天皇陛下の諮詢に應へ奉り、立法は帝國議會の協賛を須つて成り、司法權は、天皇陛下の名に於て裁判所之を行ふ

立法部は帝國議會と稱し、貴族院衆議院の二より成る。貴族院は皇族華族及び勅選せられたる議員、多額納税者より選みたる議員より成り、凡三百人を限る。衆議院は各府縣に於て投票を以て公選せられたる議員三百人より成る。

行政部は上に内閣あり、内閣總理大臣及び其他の國務大臣(各省大臣)を以て組織す。其下に外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信、拓殖務の十省あり、各省長

官は即大臣なり、又別に帝室の事を承るを宮内省といひ、宮内大臣之が長官たり。地方行政は道廳に長官、府縣に知事を置き、内務大臣の指揮監督に屬し、部内の政務を行はしむ。道廳府縣は又之を小分して市區郡若しくは島となし、市區郡役所には各其長を置き、島廳には島司を置く、而して又區郡島等を細分して町村とし、自治制を布きたる所には町長村長を置き、其他には戸長を置く。

司法部は裁判所にして、區裁判所、地方裁判所、控訴院、大審院より成り、區裁判所の判決に對する控訴は地方裁判所之を審判し、地方裁判所の判決に對する控訴は控訴院之を審判し、控訴院の判決に對する上告は大審院之を判定す、而して大審院は最高裁判所にして、其判決は終審たるべきものとす。又別に行政裁判所ありて、行政官廳の違法處分に關する控訴を判決す。

大審院は一にして東京にあり、控訴院は七にして東京大阪名古屋廣島長崎仙臺箱館にあり。

臺灣には特別の政治を布き、天皇陛下の親任せられたる臺灣總督ありて、大權の一部を行ふ、其の官廳を臺灣總督府といひ、臺北にあり、地方には縣廳あり、支廳

ありて、縣知事或は支廳長を置き、部内の政務を行はしむ。

(軍備) 我國は全國皆兵の制にして、臣民は滿十七歳より四十歳までの男子悉く兵役に服するの義務あり、兵役には常備、後備、補充及國民の四種あり、又常備兵を分ちて更に現役及び豫備役となす、現役は陸軍三年、海軍四年にして、滿二十歳に達したる男子之に服す、現役を終りたるものは陸軍は四年四ヶ月、海軍は三年の豫備役に服す、かくて常備兵役を終れば更に各五年間後備兵役に服するなり、補充兵役は、陸軍に在りては第一補充兵役、第二補充兵役、第三補充兵役は七年四ヶ月にして、其年所要の現役兵員に超過する者の中、所要の人員之に服し、第二補充兵役は一年四ヶ月にして、其年所要の第一補充兵員に超過する者之に服す、海軍に在りては一年にして、其年所要の現役兵員に超過す

る者之に服す。國民兵役は分ちて第一國民兵役第二國民兵役となし、第一國民兵役は、後備兵役及び第一補充兵役を終りたる者之に服し、第二國民兵役は常備兵役、後備兵役、補充兵役及び第一國民兵役に在らざる者之に服す。

陸軍は適齡の男子を全國より募れども、海軍は沿海地方及び島嶼の男子を調査して之を採る

全國の陸軍を編制して近衛及十二師團となし、之を全國十三の師管區に配置す。師團は更に小分して聯隊區等となし、聯隊等を以て衛戍す、即ち左の如し。

師團	聯隊	警備隊	師管區
近衛	第一	第一	東京府五區三郡、埼玉縣四郡、栃木縣、茨城縣、千葉縣
第一	第一	第一	東京府十區五郡、南諸島、神奈川縣、山梨縣、群馬縣、埼玉縣五郡、長野縣
第二	第二	第二	宮城縣一市十三郡、福嶋縣、新潟縣
第三	第三	第三	愛知縣一市十四郡、三重縣一市十三郡、靜岡縣
第四	第四	第四	大阪府四區一市六郡、和歌山縣、奈良縣、兵庫縣、二郡、滋賀縣、三重縣二郡、京都府二區八郡
第五	第五	第五	廣嶋縣、岡山縣十一郡、山口縣十郡、嶋根縣
第六	第六	第六	熊本縣一市九郡、長崎縣、鹿兒嶋縣、宮崎縣、沖繩縣
第七	第七	第七	北海道
第八	第八	第八	青森縣、岩手縣、宮城縣三郡、秋田縣、山形縣
第九	第九	第九	石川縣、富山縣、岐阜縣、福井縣一市八郡、愛知縣五郡
第十	第十	第十	京都府十郡、兵庫縣二市廿三郡、福井縣三郡、大阪府三郡、鳥取縣、岡山縣一市廿郡
第十一	第十一	第十一	四國
第十二	第十二	第十二	福岡縣、大分縣、山口縣一市一郡、熊本縣三郡、佐賀縣

臺灣には以上の師團中より交代駐在す。砲臺既成の箇所は左の如し。

東京海 横須賀軍港 紀淡海峡 下ノ關海峡 淺海灣

出師國防作戦の計畫は、參謀本部之を司り參謀總長之に長たり。軍隊の練習は監軍部の監督に屬し、軍人を養成する學校には陸軍大學校、士官學

校、幼年學校、岡山學校、教導團、軍醫學校、經理學校等あり、
砲工に關する事は砲兵會議、工兵會議之を司り、兵器の製造は砲兵工廠に於てす。
海軍にありては帝國の海岸及海面を五區に分ち、各區の軍港に鎮守府を置き、軍
艦を附屬せしめ、出師の準備、軍港要港の防禦、管轄海の警備、軍艦の製造修理、兵員
の徵募訓練を司らしむ。又別に常備艦隊を組織し、司令長官之を率ゐて常に環海
を守衛す。

海軍區及鎮守府は左の如し、但舞鶴、室蘭は豫定なり。

第一海軍區 鎮守府所在地 横須賀

陸中國南九戸北閉伊郡界より紀伊國南牟婁、東牟婁郡界に至る海岸海面、及
び小笠原島の海岸海面。

第二海軍區 鎮守府所在地 吳

紀伊南牟婁、東牟婁郡界より西は石見長門國界に至り、又筑前豐前の國境よ
り九州東海岸に沿ひ、日高大隅國界に至るの海岸海面、及び四國の海岸海面
並に瀬戸内海。

欠

MISSING

牛馬は主に東北地方及西南地方に産し、家禽は上總及び中國の出雲備中備前等に、豚は琉球以南に殊に多し。

(漁業) 漁業は國勢上最も盛なるべきものなれども、斯業の發達極めて微々たるは國の爲めに甚た遺憾なりとす。漁業者の最も多きは九州四國中國等の南部なれども、漁場の大なるものは却て東北の沿海にあり、北部の漁業者は主に鮭、鱒、鯉の類を捕獲し、南部の漁業者は鱈、鯉、鮪、鰯等及鯨族を漁獵す。

臺灣の漁業は甚た幼稚なるものゝ如し。

(製鹽業) 日本の食鹽は海水を煮て得るもの多きが故に、製鹽業は氣候乾燥晴天多く海岸遠淺なる所に盛なり、即ち瀬戸内海に沿ひたる十州の地の如き是なり。

縣名

製鹽石高

鹽田面積

香川	一〇九萬石	八〇七町
山口	一〇五	一〇七四
兵庫	八五	一一四四
廣島	六二	五八〇
岡山	五六	五〇三
徳島	五五	六三五

石川縣能登の地は、氣候乾燥ならず地勢平坦ならざるにも拘はらず、一ヶ年の製鹽高約二十萬石なり

(鑛業) 本邦の鑛物に富めることは已に地文篇に於て明らかなり、而して採掘の業亦從て盛にして之に由て生活するもの亦尠なからず、其中に就き石炭及び銅の産額は最も多くして、銀、鐵、金等之に次げり、今此五種の鑛物につき、其鑛業の結果を示さば左の如し。

金	銀	銅	鐵	石炭
佐渡 五萬	秋田 三十五萬	栃木 一六萬貫	岩手 一七萬貫	福岡 四八萬石
鹿兒島 五	岐阜 二七	愛媛 八	島根 一五	長崎 五萬
但馬生野 三	福島 一五	岡山 七	鳥取 三	北海道 一五
秋田 五	佐渡 三	宮崎 七	廣島 三	佐賀 五萬
福岡 八	生野 三	島根 三	群馬 三	山口 三五
山梨 八	島根 三	石川 七	岡山 七	福島 五

(工業) 從來我邦の工業は多くは手工を以てせしにより規模亦小なりしが、維新以來大に西洋の器械を輸入し、近年に至り益々大工事を見るに至れり、而して其主なる工業會社の中製絲會社は最多く、織物會社之に次ぎ其他鑛物會社、金屬器會社、摺附木製造會社、煉瓦製造會社、陶磁器會社、紡績會社、製紙會社、造船會社、セメント會社等種々あり、酒、麥酒、葡萄酒等の醸造會社も亦多し。

酒類醸造業の盛なるは兵庫縣、愛知縣、長野縣、福岡縣等にして、醬油製造業は殊に千葉縣に盛なり。

製絲は養蠶業の行はるゝ地方に多く、綿絲紡績は大阪府、岡山縣等に盛大なり。機織業の盛なるは京都、群馬、福島、山梨、愛知、埼玉、奈良、大阪の諸府縣にして、絹織物は特に京都、群馬、福島、山梨等を盛なりとす。

陶器磁器製造業は愛知、佐賀、石川等に盛にして、漆器製造は漆樹の特産地たる中國以北の地方に盛なり。

製紙業中和紙の製造は高知縣最も盛なり、洋紙の製造も近年大に發達して東京、神戸等に盛なり、摺附木製造は各地甚だ盛んなれども是れ亦東京、神戸を推す。

(交通) 封建の世にありては、各國山河によりて故さらに交通を阻隔し以て自ら衛りしものなれども、維新以後交通を盛ならしむるために諸所の險阪を通じ橋梁を架し、大に鐵道を敷き航路

を擴め、郵便の制、電信の便を設け、更に電話を通じて一層の便を開きしに、より三十年ならずして全く面目を一新するに至れり。

道路は分ちて國道、縣道、里道の三となせり、國道とは東京より道廳府縣廳各開港場並に伊勢太廟に達するもの及び道府廳と師團本部とを連絡するものをいひ、縣道は各府縣と連接するもの師團より分營に通ずるもの及び市邑の往還等の類をいふ、里道は各村の通路をいふ。

臺灣の道路は最も不完全にして我國内地の維新前に似たり。

(鐵道) 明治五年始めて東京横濱間に鐵道を敷きてより、線路の延長は年々増加し來り、已に開業せるもの二千四百哩に及べり。即ち本州の縦貫線は北方青森より南方廣島に達し、九州に於ては門司より松橋に至り、北海道に於ては岩見澤より空知に及べり、而して之を横ざるべき横貫線は甚だ多からず、雖も、北海道には手宮と室蘭との間に一線あり、本州に於ては東京直江津間

に一線あり、米原、福井間に又一線あり、姫路生野間の一線も亦將
た中國を横斷せんとし、武雄鳥栖間の線路は漸く延びて九州を
横貫せんとし、其他一部の目的に供せらるゝ小線路は甚だ多
し。

臺灣の鐵道には基隆より新竹に至れるものあり、是亦漸く延びて縦貫鐵道をな
すに至らむ。

(航路) 我邦は四圍海ありて航路を開くに易く、又河湖内海の航
通し得べきもの多きが故に、内國の運漕交通諸外國との往復共
に便なり。而して此航海を業とせる會社にては、日本郵船會社最
大にして大阪商船會社之に次ぎ、日本郵船會社は内國外國の航
路を兼ね開き、大阪商船會社は専ら内國の航海を業とせり。

即ち日本郵船會社は横濱を中心とし、西は四日市、神戸、長崎、臺灣、上海、芝罘、天津、牛
莊、朝鮮諸港及び浦鹽、斯德等に至り、東は荻ノ濱、箱館、小樽、根室、千島列島を往復し、

時としてフィリッピン諸島のマニラ、安南のサイゴン、瓜哇、孟買、布哇等に至るこ
とあり、近頃更に歐洲及び米國に航路を開きたり、大阪商船會社は大阪を中心と
し、専ら岡山、多度津、宇和島、廣島、宇品、馬關を経て境に至り、又徳島、和歌山等の間を
往復し、又鹿兒島、琉球、長崎、臺灣間を往復す。

燈臺其他航路の標識太平洋面に多くして日本海面に少きは、其岬角の出入島嶼
の散布、太平洋面に多く日本海面に少きを以てなり。

(郵便) 我邦の郵便制度は明治四年より始まり、今日に至りては

山の隈海の涯も能く信書を往復し得るに至れり。
外國に郵送する郵便物は横濱、神戸、馬關及び長崎に於て之を集め上海に送りて
之を萬國聯合郵便に託するなり、但上海、芝罘、天津、釜山、仁川、浦鹽、斯德等へは直ち
に長崎より送達す。

(電信) 電信は明治二年始めて東京横濱間に架設し、それより全
國に及びて今は電信線の延長一万二千二百餘里に亘り、全國主

要の市邑は概ね電信局を見るに至れり、但本州と九州、本州と四國、九州と四國、本州と北海道、本州と佐渡、九州と壹岐對馬、九州と薩隅諸島を経て琉球とは海底線によりて便を得れども、隱岐、千島、豆南諸島、小笠原島は皆電信の惠による能はざるなり、但臺灣は直通の線を有せず、僅に福州行の海底電線により支那を経て内地に達し得るの便を備ふるのみなりしを、今や將に成らんごす。
(明治三十年六月全く)薩隅琉球諸島を経て臺灣に通ずるの線も今や將に成就せんとす。

上海より我邦に來れる電信線は海底線となりて長崎に出で又長崎より浦鹽斯德に達せり、又九州朝鮮間に海底電線ありて支那に通ず。

(電話) 最も後に起れる交通機關にして、最も能く用ゐらるゝは電話なるべし、今は東京、横濱、京都、大阪等、其他市邑の一部に行は

るれども、若し之を長距離に延き得るに至らば、利便を加ふることに更に一層なるべし。

(内國商業) 我國內の商業に於て、取引の最も盛なる貨物は米にして清酒之に次ぎ、其他食用麥、甘薯、豆類並に生絲、織物、茶等も亦之に次ぎ、主要なる貨物にして、石炭、木材、魚介、織物、陶器、紙等其下に位せり。

東京は内外貨物の中心にして、大阪は關西貨物の中心となり、其他横濱、神戸、名古屋、仙臺、前橋、金澤、箱館、徳島、福岡等亦其地方の商業中心となる。

銀行は恰も身體の血液の如く、國家金融の媒介者となり、商業の運動を圓滑ならしむ、日本銀行は即ち全國の財産を整理することに勉め、正金銀行は横濱にありて海外貿易を調和せり。

(外國貿易) 我國の外國貿易に最も關係ある場所は、支那、北米合衆國、濠洲、香港、浦鹽斯德及び英吉利、佛蘭西、獨逸等の諸國にあり。

本邦に於て貿易をなすべき所は、横濱、神戸、長崎、新潟、箱館の五港と大阪となり、此所に於ては貨物の何たるを問はず、取引をなすことを得べし、又朝鮮との貿易に限りて許されたるは、下ノ關、博多、佐須奈、鹿見、嚴原の五港、朝鮮及び魯領浦鹽斯德との貿易に限りて許されたるは、宮津港、米、麥、麥粉、石炭、硫黃の五品に限りて外國へ輸出するを許されたるは、四日市、三角、口ノ津、博多、小樽、門司、宮津、下ノ關、伏木、唐津、釧路、室蘭等の特別輸出港なり。今明治廿八年中の輸出入價額を明治十六年に比するに、外國貿易の進歩せること著しきを見る、即左表の如し。

	輸 出	輸 入	輸 出 入 計
明治廿八年	一、一八、三三六	一、三六、四〇二	二、五四、七三八
明治十六年	三、四九、七五〇	三、八四、三三〇	七、三四、〇八〇

現今我商品の主なる得意先は、北米合衆國を第一とし、佛蘭西、香港、支那、英吉利等之に次ぎ、其貨物の種類は左の如く、生絲、綠茶、穀物等最も多し。

- | | | | |
|-------|---------------|-------|-----|
| 北米合衆國 | 生絲、綠茶、絹布、手巾、米 | 支 那 | 石 炭 |
| 佛 蘭 西 | 生絲、絹布、府絲類 | 英 吉 利 | 生 絲 |
| 香 港 | 石炭、摺付木、鰹、樟腦、米 | 獨 逸 | 米 |
| 英領加奈陀 | 綠茶 | | |

外國より輸入する貨物は、英國品最も多く、支那、北米合衆國、英領東印度、獨逸、香港、朝鮮等之に次ぐり、貨物の價額は綿類、砂糖最も

多し。
 英國 絹絲織、鐵類、毛織子、生金巾、汽車及客車汽船
 支那 綵綿、赤砂糖、實綿 北米合衆國 石油、綵綿
 英領東印度 綵絲、綿織絲 獨逸 鐵類、器械、毛織物
 香港 白砂糖、赤砂糖 朝鮮 米、豆類、大麥
 輸出入各港別によれば、横濱第一にして全國の五割強を占め、神戸之に次ぎて三割強に居り、他の諸港通計にて餘の二割に當れり。
 臺灣の貿易港は基隆、淡水、安平、打狗の四にして、茶、砂糖、樟腦は輸出品の主なるものなり。

新撰普通地理(日本之部)終

地名索引

(各郡内イロハ順但キイ等ハ一列中ニ置ク數字ハ頁數ナリ)

伊豆	五、八、九八、一〇四、一三七	磐城	二九、八五、九〇、九七、九八	露領四比利亞	一〇一、
伊勢	一〇、一二、一四、七〇、七	岩代	一〇三、一〇五、一一〇、一	露西亞	一三五、一三九、
伊賀	一、一〇四、一一〇、一三三	磐城	二二、一三六、一六三	播磨	一九、二〇、二一、三七、一〇
和歌山	七、一五五	伊豫	四五、四六、一〇四、一〇五、	布哇	四、一三六、
因幡	一三、一四、七一、一〇四、一	石狩	一三七	日本橋	一三九、一六二、
出雲	一〇、一三七	伊豆七島	四五、五一、一〇四、一〇五、	本郷	三、
石見	一七、一八、六九、八八、一〇	以太利	一一三、一三七	本所	三、
	四、一三六	印度	一〇、一三三、一三九	防長(周防)	二五、二六、一三八、
	二二、三七、八四、一〇四、一		七四、八一、一〇五	伯耆	三六、三七、八四、一〇四、一
	三八		七七、七九、八〇、一〇五	北海道	三八、
	三三、三四、		九〇、一三六		四九、七二、七八、七九、九〇
	三六、八四、一〇四、一三八、		一三九		一〇一、一〇三、一〇四、一
	一五六		一四〇		〇五、一〇六、一一一、一一

地名索引

區劃

澎湖諸島	九〇、二二二	遠江	八、四三、一〇四、二四、一三七、一五四	島後	八四
北國	六二	白尾	一三九	東印度	一六六、一六七
北海道本島	七六、八〇、八九	白鷺	一四〇	朝鮮	八五、九〇、九八、一〇一、一三九、四〇、一六六
北陸道	八四、一〇四、一二六、一二七、一三六、一五四	遠江	八、四三、一〇四、二四、一三七、一五四	中國	一〇五、一二四、二九、一三〇、一五四、一五六
本州	八九、九〇、一〇一、一〇五、一〇四、一〇五、一〇六、一〇七、一二二、一二三、一二五、一二六、一二七、一二九、一二三、一二七、二二九、一三〇、一五六、一六三	土佐	六三、六四、〇四、一三九	千島	一〇五、一三一、一六二
備前	一三九、一四〇	十勝	七四、七八、一〇五	千島列島	七五、八九、九〇、一〇一、一〇三、一二二、一三五
		獨逸	一三九、一六五、一六六	筑前	二七、二八、一〇五、一三九
		東海	一〇四、一二七、二九	筑後	二八、一〇五、一三九、一五三、一五四
		東山道	一〇四、一〇五、一六六、一三〇、一五三	陸前	四五、四六、四七、七三、一〇四、一〇五、一三三、一三七
		豆南諸島	九八、一〇一、一〇七、一一一、一六三	島前	八四

除中	四六、四七、四八、五〇、七三、七四、一〇四、一〇五、一一三、一三八	檳大和匈牙利	一三九、五六	樺太	七九、一〇一、一〇五、カムチヤツカ八九、九一、一〇一、一二三
兩羽(羽前)	四九	奥州	三三、三三、九一、一〇五、一三九	川邊十島	九一、九二、六〇、八三、一〇四、一〇
琉球諸島(沖繩諸島)	八九、九二、九四、一〇一、一〇三、一〇九、一一一、一二九、一三九、一六三、一九二、二〇四、一三一、一三五、一五六	大隅	三九	加賀	一一三
歐米	一四〇	近江	三六、三七、八四、九〇、九九、一〇三、一〇四、一一〇、一一一、一三八、一六三	上野	三九、五三、五六、一〇四、一〇五、一〇八、一三七
波島	八一、一〇五	尾張	六、一七、一三七	上總	五五、一〇四、一三五、一五六
小笠原諸島	一〇一、一〇三、一〇七、一二九、一三五、一三六、一四一、一六三	奥羽	一〇、一一、四一、七二、一〇四、一一〇、一三七、一五四	甲斐	八、四二、一〇四、一一三、一四、一三七
奥羽(又、東北地方)	一〇五、一三九	若狹	三九、六一、一〇四、一二四、一三八	河内	一七、一八、六七、六八、一〇四、一三六
和蘭	一三九	加奈太	一六六	關東(關八州)	一二、二〇、五四
				神田	三
				筑前	三

四ッ谷	三、	丹後	四、二三六、	武蔵	一四、三九、四三、五四、一〇四、一二四、一三六、
吉野郡	七〇、	但馬	一九、二一、三七、一〇四、一三六、	雲伯(出雲、伯耆)	三三、
歐羅巴	一三九、	對馬	二九、九〇、九七、九八、一〇三、一〇五、一二二、一二三、	雲備伯(出雲、備中、伯耆)	三七、
太平洋諸島	九〇、一〇七、	樺室	一三六、一六三、	雲石(出雲、石見)	三五、
臺灣諸島	九四、一〇一、一〇三、一一〇、一三五、	長門	七五、七八、九〇、一〇五、一二五、	牛込	三、
臺北	九四、九六、	中仙道	二、一〇五、一五五、	羽前	四五、五〇、五一、五二、一〇四、一〇五、一三八、
臺南	九六、	陸奥	四五、四七、四八、四九、一〇四、一〇五、一三八、	羽後	四五、四九、五〇、五一、一〇四、一〇五、一〇八、一二三、
臺灣	一〇二、一〇四、一一〇、一一一、一二四、一二五、一二八、一二九、二二〇、二二二、二二三、二二六、二二七、二二八、二三〇、二三一、二三三、二四一、二四四、二五四、二五六、	南海道	一〇四、	龍登	一一四、一三八、
丹波	一五、一九、二二、三九、一〇	甲州(甲斐ヲ見)	三三、	那威	一一〇、

山ノ手	三、	小石川	三、	天鹽	七五、七九、一〇五、
山城	一四、一五、六七、一〇四、一三四、一三六、	甲斐(甲斐、駿河)	六、	麻布	三、
大和	一七、六八、六九、七〇、一〇四、一一〇、一三三、一三七、一五五、	兒島郡	三五、	赤阪	三、
マラツカ	一四〇、	五島	八五、一〇〇、	淡路	一九、二〇、六二、一〇三、一〇四、一三六、
マリアナ群島	一〇一、	薩州	一六二、一六五、	津草	三、
京阪(京都、大阪)	一九、三七、	英國	九一、一三九、一六五、一六六、一六七、	安藝	二二、八七、一〇四、一三八、
福州	九五、一六三、	越中	四〇、五九、一〇四、一〇九、一三〇、一三八、	安房	五五、一〇四、一三七、
佛蘭西	二七、二八、三四、一〇五、一四、一三九、	越後	四〇、四九、五二、五三、五七、五八、八三、一〇四、一〇八、一一四、一三〇、一三六、	アラスカ	二二、
豐前	三〇、三三、三四、一〇五、一三九、	越前	一三、六一、八三、一〇四、一三八、	亞細亞	八九、一〇一、一〇五、一一四、
豐後	三、	丁林	一三九、	安南	一四〇、一六二、
深川	三、			阿波	六二、一〇四、一三八、
				陸奥諸島	八九、九一、九二、一〇一、一二、一三三、一六三、
				山陰道	一〇四、一〇五、一〇八、一

山陽道	二七、 一〇四、一〇五、一〇八、	佐波郡	二六、 四、二〇、四三、一〇四、一三 六、	畿内	〇、一六三、 一〇四、一二九、一五四、一 六一、一六三、
四海道	一〇五、	北見	七九、一〇五、	墨其母	一四〇、
讃岐	六三、六六、六七、一〇四、一 一〇、一三九、一五三、一五 四、	京橋	三、	美濃	一〇、一二三、九、一〇四、一 〇五、一二四、一三七、
薩摩	三三、九一、一〇五、一三三、 一三九、	紀伊	六八、六九、七一、一〇四、一 二七、一三七、一三八、一五 五、	三河	九、一一、四一、一〇四、一〇 八、一三七、
佐渡	五三、八二、九〇、九〇、九九 、一〇三、一〇四、一一〇、一 一三、一二二、一三六、一六 三、	九州	二六、二七、三〇、八一、八九 、九〇、一〇一、一〇三、一〇 四、一〇六、一〇八、一一二、 一一三、一二四、一二六、一 一七、一二八、一二九、一二 〇、一二二、一二三、一二五、 一二七、一二九、一三〇、一 四〇、一五四、一五六、一六	美作(作州)	三一、三二、一〇四、一三八、
三備(備前、備中、備後)	三三、			美禰郡	三五、
山陰道	一一三、三五、一五三、			瓜哇	一六二、
出羽道	三三、三五、			後志	八〇、八一、一〇五、一一三、

島尻	九二、	役樂郡	九、一〇、	肥後	三三、一〇五、一三九、一五 四、
進羅	一三九、一四〇、	下谷	三、	日向	三三、三三、一〇五、一三三、 一三九、
志摩	七〇、七一、八八、一〇四、一 三七、	下町	三、	常陸	四五、五五、一〇四、一一四、 一三七、
四國	六二、八六、八九、九〇、一〇 三、一〇四、一一二、一二六、 一一七、一二〇、一二二、一 二七、一二九、一三〇、一三 一、一五四、一六三、	芝	三、	日高	七四、七七、七八、一〇五、 一七、一八、一九、一〇四、一 一四、一三六、
下總	四四、五五、五六、一〇四、一 三六、一三七、	飛騨	一二、四〇、五九、六〇、一〇 四、一〇五、一一三、一三七、 一五四、	攝津	一四、一三六、
下野	四四、五六、一〇四、一〇五 一一三、一三七、	備前	二二、三二、一〇四、一三八、 一五三、一五四、一五六、	關西	一七、一八、
信濃	八、一二、三九、四〇、五二、 五四、五七、五八、一〇四、一	備中	三三、一〇四、一一三、一三 八、一五六、	駿河	五、八、四三、一〇四、一三七 二五、一〇四、一一三、一三 八、
		備後	三三、一〇四、一三八、	周防	一〇、一二三、九、
		肥前	二八、二九、三〇、九七、一〇 五、一一〇、一三六、一三九、	四班牙	一〇、一二三、九、
				瑞四	一三九、
				瑞典	一三九、

飯田町(東京)	二、	出石	三九、	岩屋	六三、
伊豆山	五、	糸魚川	四〇、五九、	池田(阿波)	六三、
一ノ宮	二、	飯田(信濃)	四二、	伊野	六四、
池田(播磨)	一九、	岩沼	四五、四六、	今治	五六、八七、
伊丹	一九、	岩切	四六、	市ノ川	六五、
生野	二、三九、一六一、	石ノ巻	四六、四七、二二五、	石狩	七九、
院ノ庄	二、	院内	五〇、	岩見澤	八〇、一六一、
伊部	二、	出雲崎	五三、八三、	岩内	八〇、
岩國	二五、	伊香保	五四、一三三、	巖谷別	八〇、
飯塚	二七、	市川	五五、	巖谷	八一、
伊萬里	二八、	石岡	五五、	一淡	九二、
疎早	二九、	磯濱	五五、	巖原	九八、一六五、
市來	三三、	伊勢崎	五六、	八王子	二、四三、
今市	三五、	磯部	五七、	箱根	五、一三三、
岩井	三七、	魚津	五九、	濱松	九、一〇、二二五、
				半田(尾張)	一〇、

市邑 (附古跡其他) (著名ノ地)

島田(赤間關、下ノ關)	一八、二六、三四、三	莊山	五、	幌内	八〇、
菅崎	二七、	西ノ宮	一九、	ホシカキベツ	八〇、
博多	二七、二八、三四、	日光	四二、	孟買	一六二、
萩	三五、	二本松	四四、	鳳山	九六、
濱田	三五、八四、	新潟	四五、	別府	三四、一三三、
中田(岩代)	四五、	新潟	五三、五四、八二、一三六、二	別子	六六、
花巻	四七、	二ノ宮	四二、	東京	一、二、八、九、一七、一九、三
八戸	四八、	新冠	七八、		九、四三、四五、四六、四九、
羽咋	六〇、	本所	二、五五、		五四、五五、六七、七二、九八
初瀬	六八、	細島	三三、八六、		九九、一一二、一三五、一三
箱館	七二、七四、七五、七六、八〇	細倉	四六、		六、一四二、一四四、一五〇、
	八一、八三、一四二、一四四	本莊	五〇、		一五二、一五四、一六〇、一
	一六四、	法隆寺	六八、		六一、一六三、一六四、
花咲	七五、	北條	二七、	豊橋	九、一〇、
ハラコシ	九一、	幌泉	四七、七七、	鳥取	二二、三七、一三八、一四二、
				徳山	二五、

香浦	二六	土ノ庄	六七	大磯	四
島栖	二八、一六一	菅小枝	七七	小田原	五
榎原	三六、一一三	利別	七八	興津	七
豊岡	三八、三九	泊	九〇	岡崎	〇
島井木	三九	秩父	五四	大府	〇
十和田	四八	千葉	五五、一三七	桶狭間	〇
鳥居	五二	銚子	七二、二五	大津	一三、一四、一三七、一四二
十日町	五三	沼津	五、六七	大垣	一三
友部	五六	沼田	五三	岡山	二二、二四、三七、八七、一三
栃木	五六	留萌	七九	長船	八、一四二、一六二
宮岡(上野)	五七	大坂	一、二七、一八、一九、五四	尾ノ道	二二、二八
宮山	五九、一三八、一四二	大津(十勝)	六二、六七、六八、六九、八六	小野田	二六
徳島	六二、六三、八八、一四二、一六二、一六四	大牟田	八五	折尾	二七
宮岡(阿波)	六四	歌志内	八〇	大村	二九
道後	六五、一三三	歌楽	八一	飯沼	三三

大分	三四、一六、一三九	小樽	七六、八〇、一四二	稚内	七九
大森(石見)	三五	追分(石狩)	七七	湯村	九二
小濱	三九、六二	大津(十勝)	七八	和泊	九二
太田	四〇、五六	大牟田	八五	川越	二四三
追分	四二、五七	歌志内	八〇	龜井戸	三
大宮	四三、五四	歌楽	八一	神奈川	三
小山	四四、五四、五六	小船	九〇	鎌倉	四
小牛田	四六	和氣	九	金谷	八
尾去澤	四八	若松(筑前)	二二、三三	掛川	八
大館	四九、五〇	限府	二七	掛塚	九
小千谷	五三、五八	通谷	三一	笠松	二二
荻ノ濱	四六、七三	若松(岩代)	五二、五三、一四二	神戶	一七、一九、二〇、八七、一三
大洲	六五	輪島	六〇	笠岡	六、一四二、一六四、一六七
王寺	六八	鹿町	六三	海田市	三三
尾鷲	七〇	和歌山	六九、七〇、一四二	可部	二四
落石	七五				

金田	二七、	川中島	五七、	横濱須	四、七二、
香椎	二七、	金澤	六〇、一三八、一四二、一五	吉田	九、
唐津	二九、	金ヶ崎	〇、一六四、	四日市	一一、二四、七二、八九、
鹿兒島	三二、三三、三三、八六、九一	川口	六一、	吉岡	三三、
	九二、一二五、一三九、一四	川ノ江	六四、	米子	三六、三七、
	二、一五〇、	觀音寺	六四、六六、	横手	五〇、
加治木	三三、	龜山	七一、七二、	米澤	五一、一四二、
龜岡	三九、	加治山	七二、	横川	五七、
神岡	四〇、	上川	八〇、一二五、一二六	四條畷	六七、
上野	四二、	上古丹	八一、	淀	六七、
飯ヶ澤	四三、	喜峯	九六、一〇二、	吉野	七〇、
勝沼	四三、	勝本	九八、	團子坂	三、
釜石	四八、	横濱	三、一九七、七三、七四、	瀬ノ川	三、
輕井澤	五二、五七、		一三六、一四二、一六〇、一	武豊	一〇、
柏崎	五三、		六三、一六四、一六五、一六	高尾	一六、
登岡	五六、				

龍野	三三、	高崎	五四、五六、五七、一四二	宗谷	八〇、一六一、
玉島	三三、	高田(越後)	五八、	空知太	三三、
大宰府	二八、	高岡	五九、六〇、一四二、	津島	一一、三六、六一、六二、八四、一六
武雄	二八、一六一、	大聖寺	六一、	敦賀	一一、三七、
高瀬	三〇、	武生	六一、	津山	三五、
田原坂	三〇、	多度津	六六、	津和野	五〇、
野山	三三、	高松	六六、六七、一三九、一四二、	鶴形	五〇、
高鍋	三三、	高田(大和)	六八、	土崎	五一、五二、
竹田	三三、	田邊	七〇、	津川	五二、
高山	四〇、	館山	七二、	土浦	五五、
保	四二、	釜北	九四、一四三、一四四、	月ヶ瀬	六八、
立川	四三、	淡水	九五、一四三、一六七、	津	七一、一三七、一四二、
榎倉	四五、	竹敷	九八、	根室	七八、
平	四六、	打狗	一四三、一六七、	内陸新宮	一一、三四三、
太郎	五〇、	園部	一四二、	生麥	三、
橋岡	五二、		三九、		

名古屋	八、一〇、二二、七二、一二二	成田	五五、	宇佐	三四、
名倉	九、	直江津	五三、五八、五九、一六一、	浦和	四三、五四、一三六、
鳴瀬	一〇、	長岡	五三、	宇都宮	四四、一三七、一四三、
長湫	一三、	中村(土佐)	六五、	上ノ山	五一、
長濱	一三、	奈賀	六七、六八、一三八、一四二、	上田	五七、
龍波	一七、	南沙	一六二、	卯ノ町	六五、
瀨目	一九、	那覇	九二、一三九、	宇治	六八、七〇、七一、
名護屋	二九、	七飯	七六、	浦賀	七二、七四、七七、
長崎	二九、二二五、二二六、一三三	村上	五二、	有珠	七六、
中津	六、一四二、一四四、	六日町	五三、	延岡	四四、
長野	三四、	室津	八六、	野田	四四、
中野(群城)	四六、	上野(東京)	二、四二、五四、	野邊地	四八、四九
		宇治山田	一四、	能代	五〇、
		梅田	一七、一八、	ノトコ	九〇、
		宇土	三一、	九段	三、
		白柅	三四、八六、	桑名	一二、七二、

草津(近江)	一三、一四、七、	九十九里	七二、	八尾	五九、
倉敷	二二、	銅路	七八、	柳瀬	六二、
船本	二八、三〇、三一、三二、三三、	久遠	八一、	八幡旗	六五、八七、
	三四、三九、一四二、一五	縁成	九一、	八幡旗	六七、
	〇、	矢口ノ渡	三、	屋島	六七、
		焼津	八、	前ヶ須	一一、
久留米	二八、三〇、三四、一四二、	八幡(近江)	一三、	米原	二〇、
口ノ津(薩摩)	三三、	八幡(山城)	一七、六七、	舞子	三一、六一、
倉吉	三七、	山口	二四、二五、二六、一三八、一	松橋	三五、三六、三八、一四二、
梁橋	四四、	柳川	五〇、	松江	四〇、一四二、
黒澤尻	四七、五〇、	矢部川	三〇、	松木	四四、
草津(上野)	五四、一三三、	山鹿	三〇、	前橋	五六、五七、一四二、一六四、
船ヶ谷	五四、	八代	三一、	松代	五七、
葛生	五六、	安来	三一、三三、	丸岡	六一、
久万	六四、	山形	三六、	松山	六四、六五、一三九、一四二、
黒江	七〇、		五一、二二五、一三八、一四		
中本	七〇、				

丸龜	六六、	船橋	五五、	足利	五六、
松坂	七一、	福井	六一、二三八、一四二、	安藝(土佐)	六四、
增毛	七五、七九、	福見	六二、	赤岡	六四、
馬公	九七、	伏見	六七、	厚岸	七八、
松前	八一、一三四、	福山(渡島)	八一、	網走	七九、
マニラ	一六二、	船越	八一、	榑ヶ澤	八一、
府中	七、	釜山	九八、	相川	八三、
袋井	八、	小金井	三、四三、	安平	九七、
福山(備後)	一三、	關府津	四、五、六、	佐倉	二、五五、
福岡	二七、二八、三〇、一三九、一	御殿場	五、	佐賀	二八、二九、三四、一三九、一
福山(薩摩)	四二、一六四、	小倉	二七、三四、	榑井(播津)	一七、六八、
福知山	三三、	木葉	三〇、	相賀	四二、
福島	三九、	國府	三三、	小松	六〇、六一、
古川	四五、五一、一三七、	江津	三五、	高知	六四、八八、一三九、一四二、
二ツ井	四六、	高津	三五、	琴平	六六、
	五〇、	甲府	三九、四二、一三九、一三七、	五條	六八、七〇、

御坊	七〇、	赤坂(美濃)	一三、	足利	五六、
五稜原	七六、	尼ヶ崎	一八、一九、	安藝(土佐)	六四、
尾尾	九四、	有馬	一九、二一三、	赤岡	六四、
恒春	九六、	赤穂	二一、	厚岸	七八、
高島	九七、	明石	二〇、	網走	七九、
郡山(大和)	六八、	有田	二八、二九、	榑ヶ澤	八一、
粟山	七四、	阿久根	三二、	相川	八三、
江差	八一、	綾部	三九、	安平	九七、
天童	五一、	青森	四三、	佐倉	二、五五、
寺泊	五三、	青森	四三、	佐賀	二八、二九、三四、一三九、一
天鹽	七九、	足尾	四四、	榑井(播津)	一七、六八、
手宮	八〇、一六一、	阿仁	五〇、	相賀	四二、
飛鳥山	三、	秋田	五〇、一三八、一四二、	佐世保	二九、
海熱	五、一三三、	荒川	五一、	佐土原	三三、
有松	一〇、	赤湯	五一、	佐伯	三四、八六、
船田	一〇、				

佐賀關	八六、	宜關	九七、	三原	三三、
鷺	八四、	木更津	七三、	三次	三三、三五、
札幌	七七、八〇、二三六、一四二、	岸和田	六九、	三石	二一、
堺	六九、一四二、	木津	六八、	淡	一七、
四條	六五、六六、	桐生	五六、	宮	一〇、
佐川	六四、	氣仙沼	四八、	見付	八、
貞光	六三、	杵築(出雲)	三五、	三島	五、
鯖江	六一、	行橋	三四、	夕張	八〇、
佐久平	五七、	七、一四二、	湯淺	七〇、	
佐野	五六、	岐阜	一一、	由良	六二、
佐原	五九、	清洲	一一、	結城	五六、
三條	五三、	二、一五一、一六四、	湯澤	五〇、	
酒田	五〇、五一、	二、六七、六八、一三六、一四〇、	湯島	三八、	
猿橋	四三、	二、六三、三五、三九、六一、六	湯泉津	三五、八四、	
境	三七、	九、一二、一三、一四、一七、	湯田	二六、	
征ヶ谷	三五、	山村	九二、	基陸	一四三、一六一、一六七

宮市	二五、	下板橋	二、三九、五四	下諏訪	四二、四二、
都ノ城	三三、	品川	二、	鹽原	四五、一一三、
宮崎	三三、一三九、	新橋	二、	下館	五六、
美々津	三三、	修善寺	五、	志度	六七、
三田井	三三、	静岡	七、八、九、一三七、一四二、	新宮	七〇、
宮津	三八、	島原	二九、八五、	標茶	七八、
水戸	四五、五五、五六、一七三、一	鹽尻	四〇、四一、	標津	七九、
三春	四二、	白河	四五、	斜里	七九、
水澤	四五、	白石	四五、	下津井	八七、
宮古	四七、	白水	四六、	紗那	九〇、
淡(常陸)	四八、	鹽釜	四六、	新知	九一、
水橋	五五、	新庄	四六、	首里	九三、
淡(伊豫)	五九、	新發田	五〇、五一、	新竹	九三、
三崎	六五、六八、	澁川	五二、	彰化	九四、一六一、
宮ノ浦	七二、	新町	五三、五四、	鹿見	九六、
	九二、	志布志	五四、	彦根	九八、一六五、
			三三、		一一、

兵庫	兵庫	一、九	元箱根	五	駿府	一六〇、七
姫路	二、三、三、七、一四二、一	四司	二六、二七、三四、六一、	須磨	二〇、七	
廣島	六一、	本宮	四五、	須賀	三六、	
	三三、三三、二四、二五、三六	盛岡	四七、四八、四九、一三八、一	洲本	六二、	
	二五、二六、二三八、一	茂邊地	四二、	須崎	六五、	
	四二、一四四、一六〇、一六	室蘭	七四、七五、七七、八〇、一〇	宿毛	六五、	
山口	三四、		六、一〇七、	森都	八一、	
廣瀨	三六、	森	七六、	山岳(山脈、峠、越、溪)	一三、一〇、	
弘前	四九、一四二、	紋別	七九、	膳吹山	一四、	
人吉	三三、	千住	二、五五、	伊賀越	一七、六四一、	
氷見	六〇、	關	一一、	飯釜山	二〇、	
牧方	六七、	關ヶ原	一一、	一ノ谷	三三、一〇九、	
平戸	八五、	瀬高	三〇、	市房山	四八、一〇八、	
卑南	九六、	仙臺	四六、四七、四八、五一、一三	岩手山	四九、一〇八、	
苗梁	九五、		七、一四二、一四四、一五〇、	岩木山		

院内峠	五〇、	四山	九八、	大江山	三九、
板谷峠	五一、	鳳來寺山	九、二一〇、	鷺山	四八、一〇八、
飯野山	五二、一〇八、	鳳凰山	四二、	大平山	五〇、
石越山	六五、	徳佐峠	三五、一〇九、	娘捨山	五七、
飯野山	六六、一一〇、	十勝岳	七八、一〇七、	男山	六七、
生駒山	六八、	東北山脈	一〇六、	大塔峰	七〇、
石狩山	七八、八〇、一〇七、	鳥海山	五〇、一〇八、	大峰	七〇、
稻穂峠	八〇、	秩父山	五四、一〇七、	大壱原山	七〇、
伊豫小富士	八七、	千島帯	一〇六、一一一、一二三、一	大川山	七六、
箱根山	五、	中央分水脈	一〇七、一〇八、一二三、一	雄阿寒山	七八、一〇七、
早池峯	四九、一〇七、		一五、三三〇、	音無山	七八、
磐梯山	五一、一〇八、一一一、	千島火山脈	一〇七、	雄冬山	七九、
榛名山	五四、一〇八、	中國山脈	一〇八、一〇九、一二三、一六、	和田峠	四二、
白山	六〇、二一〇、	大山(相模)	四、	釜臥岳	四八、
白老山	七七、	大江高山	三五、	笠置山	六八、
白山火山脈	一〇九、一一〇、			鹿野山	七二、

開闢岳	八五、一〇八、	多武峰	六八、	有珠峰	七六、一〇七、
カブシユラン山脈	九七、一一〇、	標前山	七七、一〇七、	稚水峰	五七、
樺太山系	一〇五、一〇六、一〇七、一〇、一二五、	大屯山	九四、一一一、	雷電岳	八〇、
關東山脈	一〇七、	高千穂峯	一〇八、	羽越山脈	一〇七、一〇八、
葛城山脈	一〇八、	蘆野山	五九、	武甲山	五四、
米山	五三、一〇八、	祖母岳	三四、一〇九、	乘鞍岳	四〇、一〇九、
吉森山	六五、一〇九、	筑波山	五五、	鋸山	七二、
多良岳	二九、一〇九、一二六	劍岳	五九、	濃飛高原	一〇八、
大山(倉伯)	三七、一一〇、	劍山	六三、六四、一〇九、	能登火山脈	一〇九、一一〇、
大日岳	四〇、一一〇、	鷲見岳	一一〇、	久能山	七、
立科山	四一、	那岐山	三七、	黒法師山	九、一〇四、
高取山	四五、	男體山	四四、一〇八、	鞍馬山	一一、
高斐山	五八、	那須岳	四五、一〇八、一二五、	國見岳	三三、三〇、
立山(御岳)	五九、一〇九、一五五、	中山峠	四八、	位山	四〇、
高尾山	六五、一一〇、	那智山	七〇、	生駒山	四七、
		温泉岳	三九、一〇九、	耶馬溪	三四、

鎗ヶ岳	四〇、一〇九、	双子山	八六、一一〇、	大目山	四三、
八ヶ岳	四二、	富士帯	一〇六、一〇七、一〇八、一	大躰岳	七九、
八海山	四五、一〇七、一一五、	駒ヶ岳	一一、一二三、一二三、	天城山	五、
矢立峰	四九、	駒ヶ岳	七六、一〇七、	足柄山	五、
八甲田山	四九、一〇八、	巽海山	一〇五、	愛鷹山	五、
彌彦山	五三、一〇八、	金峰山	四二、	秋葉山	九、一〇九、
俱利伽羅峰	六〇、	金剛山	六八、	送坂山	一四、
焼山	五八、一七〇、	高野山	七〇、	嵐山	一六、
山上岳	七五、	駒ヶ嶽(信濃)	四〇、一〇九、	愛宕山	一七、一〇九、
八重岳	九二、	駒ヶ嶽(甲斐)	四二、一〇九、	阿蘇山	二〇、一〇、
焼山(臺灣)	九四、一一一、	小佛嶺	四三、一〇七、	赤名峰	三六、
月山	五一、一〇八、一一五、	五剣山	六七、	赤石山系	四二、一〇八、一〇九、一
富士山	五、六、七、四〇、四一、四	英彦山	三四、一一六、	安達太朗山	三〇、
	二、一〇七、一三〇、	江代山	三三、		四五、
舟坂山	二一、	黒那山	四〇、一〇四、	吾妻山(岩代)	四五、一、一一五、
船上山	三七、	黒山	七六、	吾妻山(上野)	五四、一〇八、

赤城山	五六、一〇八	三嶺山	九七、一一一	霧島帯	一〇六、一〇九、一一一、一二一、一二三
浅間山	五七、一〇七	櫻島岳	一〇八	九州南部山脈	一〇八、一〇九
菅野山	一一〇	霧島山	三三、一〇九、一五五	紀伊山脈	一〇八、一〇九
朝熊山	七〇	木曾御岳	四〇、一〇九	山布岳(豊後富士)	三四
跡佐登	七八	北岳	四二	遊樂部岳	八一
阿武隈山系	一〇七	北上山系	四七、一〇七、一一三	雌阿寒岳	一〇七
足尾山脈	一〇七	木芽嶺	六一	三上山	一三
阿蘇火山脈	一〇九、一一〇、一一二、一一三	清澄山	七二	御岳(薩摩)	三三
天城山	一五五	金華山	七三	三國山	三七、一〇九
薩陀峠	七	金北山	八三	身延山	四三、一〇九
小夜ノ中山	八	玉山	九五	三峰山	五四
三太郎坂	三三	玉山山脈	一一〇、一二八	妙義山	五七
三瓶山	三五、一一〇	九仇山	九四	妙高山	五八、一〇七
篠千峠	四三	水曾山脈	一〇八、一一〇、一三〇	三原山	九八
山玉峠	五二	金爪石山	九四	殿ヶ岳	一三
		木曾山	一五五		

四十曲峠	三七	鶴越	二〇	池田川	一八
龜尻峠	四一、四二	姫神山	四八	市川	二一
白根山(甲信)	四二、一〇九	日高山脈	一〇六	揖保川	二二
白神岳	四九	飛騨山脈	一〇八、一〇九、一三〇	岩國川	二五
清水越	五三、一〇八	森吉山	五〇、一〇八	一ノ瀬川	三三
白根山(上信)	五四、一〇八	船通山(鏡ノ川上)	三六、一〇九	岩木川	四九、八一、一一六、一二九
澁峠	五四	仙人嶺	四七	射水川	六〇、一一四、一二七
支那山系	一〇五、一〇八、一一〇	關山峠(笹谷峠)	五一	石狩川	七九、一一四、一二五
地蔵岳	七〇	雪光山	六四	六郷川	三七二
釋迦岳	七〇	千軒岳	八二	馬入川	四、四三、一一六
斜里岳	七九	鈴鹿山脈	一〇八	四大川(旭川)	一一七
シルゲイア山	九四、一一〇	醉川岳	五〇	仁途川	六四、一二七
四國山脈	一〇八、一〇九	須知ノ峠	三九	豐川	九
比叡山	一七、一〇九	鈴鹿山(鈴鹿峠)	一三、一四	利根川	四四、五五、五六、七二、一一
東山	一七	河川(瀑布)	二三、七二	富田川	四、一一六、一五三、一五四
檜原峠	五一				七〇

利別川	七八	大丸川	三三	片品川	五三
十津川	七〇	大野川	三四、一七	カマイコヤン	八〇
十勝川	七八、一五	大堰川	三九	澁川	一七、一八、六七、一一四
豊平川	八〇	御物川	五〇、一六、二九		一一七
常呂川	七九、一五	音更川	七八	吉野川	六二、六三、六九、一一七
筑後川	二八、三〇、一四、二七	大川	五二	米代川	一五四
	一二四	蒲川	四六	養老瀨	一三
千代川(加羅川)	三七、一七	渡川	六五、一七	多摩川	三、四三、一六
千曲川	五七、一五三	狩野川	五	大谷川	四四
千歳川	七七	加茂川	一四、一六	只見川	五二
布引ノ瀨	一九	桂川	一七	淡水川	九四、一五、二八
大井川	八、二七	加古川	三	大姑沼川	九四
大平川	一〇	川邊川(大川)	三三、三三、一七	大甲溪	九五、九六、一五、二八
太田川	二五、一七	神門川	三五、三六	大吐溪	九五、一五、二八
遠賀川	二七、一八	加古川	三九	高鍋川	一一八
大湫川	三三	釜栗川	四二、四三		

空知川	八〇	柳田川	七一	江ノ川(江川)	一三、三五、一七
然別川	七八	黒部川	五九、一七	厚東川	二六
那智瀨	七〇	雲出川	七一	五箇瀬川	三三、一八
那賀川	六三、六四	銅路川	七八、一五	高津川	三五
那珂川(關東)	四四、一六	黒瀬川	九八、三二	江別川	八〇
長良川	一一、一三	九頭龍川	六一	江戸川	五五
名取川	四六	久慈川	四五	天龍川	八、九、四二、一一四、一七
鳴瀬川	四六	球磨川	三二、三三、一七	天神川	三七
中川	四四、五五	矢矧川	一〇、一七	手取川	六〇
那珂川(筑前)	二七	山國川	三四、一八	天鹽川	七九、一四、一五
武庫川	一九	大和川	六八、六九、一一四、一一七	阿寒川	七八
雨龍川	七九、八〇			足羽川	六一
有年川	二一	馬淵川	四八、一六	安宅川	六〇
野州川	一三	華嚴瀨	四四	有田川	七〇
熊代川	五〇、八一、一六、二九	富吹川	四二、四三	海部川	六四
熊野川	七〇、一七	富士川	七、四三、一七	相殿川	四八